

豐中市
服部遺跡

—第5次調査—

1996年

六甲山麓遺跡調査会

豊中市
服部遺跡

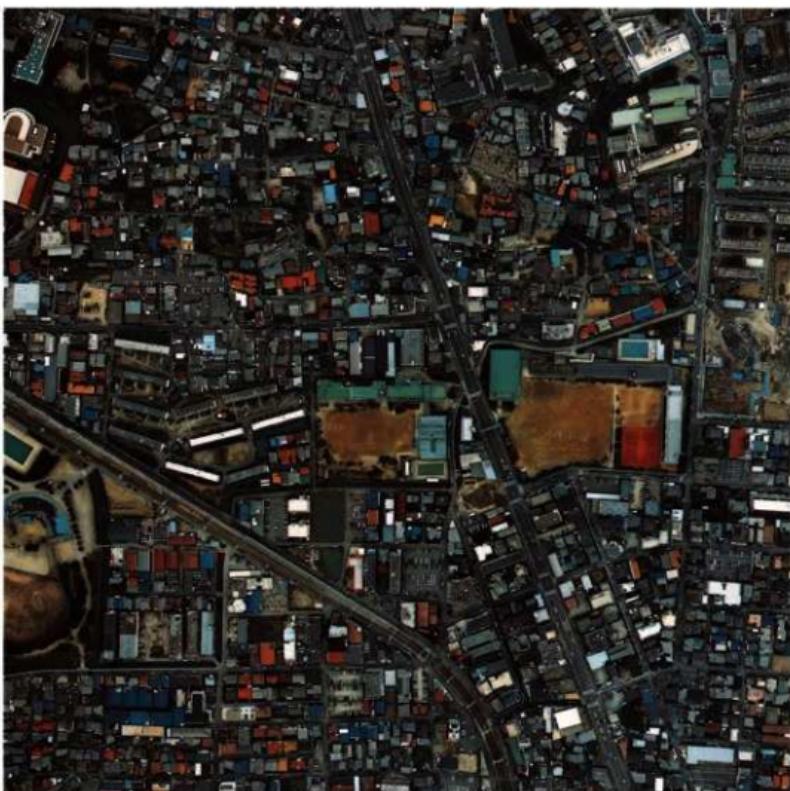
—第5次調査—

1996年

六甲山麓遺跡調査会



発掘調査地区垂直写真



遺跡全景垂直写真

左端球場：豊島北遺跡第3次調査地点
右端：腹部遺跡第4次調査地点
中央右寄り：腹部遺跡第5次調査地点

序

震災後、1年1ヶ月を隔てて、はじめて調査現場をおとずれた。表通りを歩いてみえる被害はかぎられているようだが、住宅地や商店街を歩いて、更地のひろがりにあらためて驚く。復興ができるかぎり、長期的な住環境の向上・整備とむすびついて進められることと、埋蔵文化財の調査・保存とが整合しておこなわれていくことを心から望む。

豊中市内の遺跡調査は、住宅開発にともなう発掘調査の激増により、20年ほど前からみても、くらべものにならぬほどの成果をあげつつある。したがって、それをはるかに上回るまわって失われていく遺跡も激増しているのだろう。調査の機会を得たことに感謝しつつ、あたえられた条件下でできるかぎりの精密な調査をこころがけざるをえない。

今回は、上層の平安・鎌倉時代の遺構面で、掘立柱建物・井戸・土坑・溝状遺構・自然河道、その下の中層で東西にのびる大畦畔といいくつかの小畦畔をともなう水田遺構、さらに下層で弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝状遺構を検出した。遺物はもっぱら土器類を中心とするが、僅か1点ながら北宋銭「紹聖元宝」も出土している。他地域からの将来物としては、生駒西麓や河内平野からの弥生土器、上層からは東播系の須恵こね鉢、常滑の陶器甕などがみられる。いずれもこの地域には比較的よくみられる製品であり、各時代の流通を語る資料でもある。隣接調査地との比較検討をへて、さらに豊富な発見が生ずるだろうとも期待している。

周辺の住宅地を歩いているうちに、いたるところに小さな水路がみえかくれすることに気付いた。ついこのあいだまでの田園にひろがっていた水路がいつしか宅地化の波で、見えなくなりつつある。全国的にみても、ここ30年ほどの開発と圃場整備の推進で、原風景ともいいくべき祖先たちの手で作りあげられてきた長い歴史をもった水田と水路が消滅した。これらの記録、この間までの水田と水路の図・空中写真という記録の保存も急がねばならない。これらもまた現代においては、貴重な歴史的文化財といわざるをえなくなっている。

末尾ながら、このたびの調査にあたって、さまざまな立場からご協力いただいた方々に厚く感謝の意を表する。

1996年3月

六甲山麓遺跡調査会
代表 橋本 久

凡　　例

1. 本報告は六甲山麓遺跡調査会が実施した大阪府豊中市服部元町に所在する服部遺跡—第5次調査—の発掘調査報告書である。発掘調査は清水建設株式会社大阪支店から調査委託を受けた。

2. 調査は橋本久を調査団長とし、調査主任に浅岡俊夫、副主任に古川久雄をあてた。

3. 調査に際して、豊中市教育委員会社会教育課の奥田至哉係長・柳本照男・服部聰史・清水篤・橋田正徳・清家章各氏から指導・助言を得た。また、施主・野村不動産株式会社大阪支店・清水建設株式会社大阪支店の担当者各位から種々協力を賜った。

4. 発掘調査・整理作業の過程で下記の方々からご協力・ご助言いただいた。記して感謝の意を表したい。

豊中市の位置

亥野 強、梅川光隆、金原 明、金原正明、金原正子、篠宮 正、高井悌三郎、

中村信義、宮川楨一、森岡秀人、山崎貞治 (五十音順、敬称略)

安西工業㈱、㈱古環境研究所、写測エンジニアリング㈱、辰馬考古資料館、㈲白沙堂

5. 遺跡の国家座標の取り付け、空撮図化は、写測エンジニアリング㈱に委託した。

6. 木質遺物の樹種同定は㈱古環境研究所に委託し、その結果報告を得た。

石材の鑑定については、大阪教育大学山崎貞治教授のご指導を得た。

7. 本報告作成にあたって、出土遺物のうち、上器類については磯辺敦子、西田明子、萩原美香が測図し、萩原が製図した。石器類については梅川光隆が測図し、製図した。遺構および土層の製図は磯辺、西田、萩原、古川が担当した。

8. 遺構の写真撮影は古川が行い、遺物の写真撮影は橋本真紀子氏に依頼した。

9. 本報告の編集・執筆は浅岡と古川が行い、本文の執筆については目次に氏名を記した。なお、遺物のうち石器および土製品については梅川の参加をえて、浅岡と共同執筆した。

10. 遺物のうち、上器・石器類については1~300番台の番号を、木質遺物については400番台の番号を付した。実測図にくく写真図版に掲載したものは500番台の番号を振り、出土地点がわかるように図版表題にその番号を記した。

11. 発掘調査の実測図・写真および遺物は豊中市教育委員会に移管している。



報告書抄録

ふりがな	よしかわし ほっとうけいせき せいじゅ じきじゆ						
書名	豊中市 服部遺跡 第5次調査						
圖書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	浅岡俊大、古川久雄、梅川光隆、礪古環境研究所						
編集機関	六甲山麓遺跡調査会						
所在地	〒662 兵庫県西宮市田中町3-17-301 TEL0798-22-3627						
発行年月日	西暦1996年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
服部遺跡	大阪府豊中市 服部元町 2丁目21	27203	50 34度 45分 50.28秒	135度 28分 39.47秒	1995.10.3 1996.1.20	630	高層住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
服部遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代前期 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝状造構 井戸	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 錢貨(紹聖元寶) 曲物 鞋石の浮子			

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の所在	(浅岡) 1
2 地理的環境	(浅岡) 1
3 歴史的環境	(浅岡) 3
II 調査の経過	9
1 調査にいたる経過	(浅岡) 9
2 発掘調査組織	9
3 調査の経過	(古川) 10
III 調査の概要	14
1 調査の方法	(浅岡・古川) 14
2 土層の概要	(古川) 16
3 上層遺構	(浅岡・古川) 20
(1)掘立柱建物	22
(2)土坑	25
(3)井戸	26
(4)溝状遺構	27
(5)ピット	29
(6)自然河道	29
4 中層遺構	(古川) 30
(1)水田遺構	30
5 下層遺構	(浅岡・古川) 32
(1)弥生時代中期後半の遺構	32
(1)竪穴住居址	32
(2)土坑	36
(3)溝状遺構	40
(2)弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構	41

(1) 構造遺物	41
(2) 墓	45
(3) 土坑	48
(4) 溝状遺構	53
(5) ピット	54
IV 出土遺物	55
1 上層遺構関連遺物	(古川) 55
(1) 構造遺物に伴う遺物	55
(2) 土坑・井戸・その他ピットの遺物	57
(3) 溝状遺構の遺物	60
(4) 遺物包含層（第4層）出土遺物	60
(5) 河道内の遺物	65
2 中層遺構関連遺物	66
3 下層遺構関連遺物	67
(1) 弥生時代中期後半の遺構に伴う遺物	67
(2) 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構に伴う遺物	77
(3) 遺物包含層（第8層）出土遺物	90
(4) 石器および土製品	(浅岡・梅川) 94
(5) 木質遺物	(古川) 99
V 木質遺物の樹種同定	(古環境研究所) 100
1 試料	100
2 方法	100
3 結果	100
4 考察	103
VI まとめ	(古川) 105
1 各遺構の存続時期と前後関係	105
2 搬入土器について	111

図版目次

卷頭図版 1 発掘調査地区垂直写真

卷頭図版 2 遺跡全景垂直写真

図版 1 (上) 遺跡周辺鳥瞰遠景 (南から)

(下) 同上 (南東から)

図版 2 (上) 発掘調査地区鳥瞰遠景 (南から)

(下) 発掘調査地区鳥瞰近景 (東から)

図版 3 (上) 上層遺構垂直全景

(下) 上層遺構鳥瞰全景 (南から)

図版 4 南調査区上層遺構全景 (西から)

図版 5 (上) SB-1、SB-2 全景

(下) SB-3 全景

図版 6 (上) SE-1 平面

(下) SE-1 立面

図版 7 (上) SK-1 平面

(下) SK-1 遺物出土状況

図版 8 (上) ND-1 断面

(下) SD-6 土師器 (40) 出土状況

図版 9 (上) SP-43瓦器碗 (14) 出土状況

(下) SP-47遺物出土状況

図版 10 (上) 下層遺構垂直全景

(下) 下層遺構鳥瞰全景 (南から)

図版 11 (上) 南調査区下層遺構全景 (西から)

(下) 南調査区下層遺構北東地区全景 (西から)

図版 12 (上) 南調査区下層遺構中央地区全景 (北から)

(下) SB-101全景 (北から)

図版 13 (上) SD-101全景 (北から)

(下) SD-101断面

図版 14 (上) SA-101近景 (東から)

- (下)SA-101、SK-128・129、SD-102・103全景
図版15 (上)SA-102とSK-130検出状況
(下)SA-102、SK-130、SK-126・127など発掘後全景(南から)
図版16 (上)SA-102、SK-130とその周囲(南東から)
(下)SA-102とその周囲(北から)
図版17 (上)SK-126全景
(下)SK-126遺物出土状況
図版18 (上)SK-127完掘状況
(下)SK-101上層遺物出土状況
図版19 (上)SK-130半掘断面
(下)SK-130完掘状況
図版20 (上)SK-130中間炭化面の遺物出土状況
(下)SK-130同上遺物(261)出土状況(部分)
図版21 (上)SK-131全景および上層遺物出土状況
(下)SK-131断面
図版22 (上)SK-131遺物出土状況
(下)SK-131遺物出土状況(部分)
図版23 (上)SK-107平面
(下)SK-107半掘断面
図版24 (上)SK-119遺物出土状況
(下)SK-109
図版25 (上)SK-132半掘断面
(下)北調査区(トレニチ)下層遺構検出状況(東から)
図版26 SB-1・3、SK-1・119・130・131、SP-8、SD-6、第8層出土遺物
図版27 SA-101、SK-119・128・131、SD-101、第8層出土遺物
図版28 SK-119・126・130、SD-101、第4・8(501)層出土遺物
図版29 (上)SB-1・2・3、SE-1出土遺物
(下)SK-1、SP-8(502)出土遺物
図版30 (上)第4層出土遺物
(下)第4層出土遺物
図版31 (上)ND-1・2(503・504)・3出土遺物
(下)第7層、第6層、SD-2・4・5・7・8出土遺物

- 図版32 (上)SD-101出土遺物
(下)SD-101出土遺物
- 図版33 (上)SK-103・108出土遺物
(下)SK-107・109・113・124、SP-132出土遺物
- 図版34 (上)SA-101、SD-102、SK-128 (505)・129出土遺物
(下)SA-102、SK-124・126 (506)、127出土遺物
- 図版35 (上)SK-101・119・131出土遺物
(下)SK-130出土遺物
- 図版36 (上)第8層出土遺物
(下)第8層出土遺物
- 図版37 (上)SK-126・130、第8層出土遺物
(下)SK-103・129 (510)・130・131、SD-102、第7 (511)・第8 (512・513) 層出土遺物
- 図版38 木質遺物の顕微鏡写真I
- 図版39 木質遺物の顕微鏡写真II
- 図版40 木質遺物の顕微鏡写真III
- 図版41 木質遺物の顕微鏡写真IV

挿 図 目 次

図1 遺跡周辺の地形図 (1/25,000)	2
図2 遺跡の位置と周辺の遺跡 (2が発掘調査地点)	4
図3 第5次発掘調査地の位置と既往の調査地 (I~Vは次数を表す)	8
図4 発掘調査区域図 (1/500)	15
図5 5m方眼区割り図と土層断面図の面 (ローマ数字) (1/300)	16
図6 土層断面図1	17
図7 土層断面図2	18
図8 上層断面図3	19
図9 上層遺構平面配置図 (1/200) (ローマ数字は上層断面図の面を表す)	21
図10 SB-1実測図	22
図11 SB-2実測図	23
図12 SB-3実測図	24
図13 SK-1実測図	25
図14 SE-1実測図	26
図15 SD-6、SB-3、SE-1の関係	28
図16 中層遺構平面配置図 (1/200)	31
図17 下層遺構平面配置図 (1/150)	33・34
図18 SA-103推定復元平面図と周辺の土坑、溝状遺構との関係	35
図19 SK-103・107・108・132実測図	37
図20 SK-109・120実測図	39
図21 SD-101実測図	40
図22 SA-101と周辺の土坑、溝状遺構との関係 (1/50)	41
図23 SA-102実測図	43
図24 SA-102と周辺の土坑等との関係 (1/100)	44
図25 SB-101実測図	46
図26 SB-102実測図	47
図27 SK-101・110実測図	48
図28 SK-119と出土遺物の関係図	49
図29 SK-126と出土遺物の関係図	50

図30 SK-130と出土遺物の関係図	51
図31 SK-131と2層目出土遺物の関係図	53
図32 SB-1・2・3、SK-1出土土器類	56
図33 SP-8・24・33・50、SE-1、SD-2・4・5・6～8・12出土土器類	58
図34 SE-1曲物の底板	59
図35 第4層出土土器類(1)	62
図36 第4層出土土器類(2)	64
図37 第4層出土銭貨	65
図38 ND-1～3出土土器類	65
図39 第7層出土土器類	66
図40 SK-120、SD-101出土土器(1)	69
図41 SD-101出土土器(2)	71
図42 SK-103・109出土土器	73
図43 SK-107・108・113・124・132、SD-109出土土器	76
図44 SA-101、SD-102、SK-128・129出土土器	78
図45 SA-102、SK-126・127出土土器	81
図46 SK-131・122出土土器	84
図47 SK-101・119出土土器	86
図48 SK-130、SP-147・164・167出土土器	88
図49 第8層出土土器(1)	91
図50 第8層出土土器(2)	93
図51 石器類(1)	95
図52 石器類(2)	98
図53 道構変遷図	106
図54 挿入土器	112

表 目 次

表1 豊中市遺跡一覧	5
表2 木質遺物の樹種同定結果	104

I 遺跡の位置と環境

1 遺跡の所在

服部遺跡第5次調査地点は豊中市服部元町2丁目21にあたる。

服部遺跡の範囲は服部元町と服部本町にまたがって、東西約500m、南北約200mの長方形の広がりをもってとらえられている。その中に国道176号線が南北に横断し、現国道の旧道にあたる笑面街道と遺跡の中央で三角に交差する。当調査地点は、国道と旧道が交差した80mほど南の両道にはさまれた一画、ちょうど遺跡推定範囲の中央西寄り南端に位置する。東西両側が国道と旧道に面し、阪急服部駅の北380mの…等地にある。そして、この国道と旧道が交差する東西両側には中学校（第四中学校）と小学校（中豊島小学校）が並び建ち、交通の便はもちろんのこと文教面においても、住宅地として好環境に恵まれている。

2 地理的環境

豊中市は大阪府の北西部、南側を大阪市、西側を兵庫県と接する位置にある。商業都市大阪に隣接し、大阪国際空港の玄関口でもあり、住環境に適した地勢に恵まれていること也有って、大阪の衛星都市として飛躍的に発展しつつある。

市域の地勢を概観してみると、洪積丘陵台地部と沖積低地部に二分され、その面積はほぼ半々である。洪積丘陵台地部は市域の北東部を占め、その北部は標高50mから100m前後の丘陵地帯としてやや複雑な地形をなすが、南部は標高15mから40mほどのなだらかな台地が広がる。丘陵台地はさらに、千里川と天竺川によって大きく三分され、二つの川にはさまれた真ん中の丘陵台地が豊中台地と呼ばれ、恵まれた立地条件により市の中心をなしている。沖積低地部は市域の南側から西側にかけて展開して、標高10m以下の平野が広がる。最低点は0mである。

服部遺跡は、市域の南側に広がる沖積平野に所在する遺跡のひとつで、舌状に伸びた豊中台地の南縁東寄り直下に張り付いている。明治の陸測図を見ると、標高4mほどの安定した平野の中に遺跡の立地を確認することができ、あたり一帯一面に水出が広がっていたことが見てとれる。しかし、遺跡のすぐ東側には天竺川が直線的に南流し、遺跡の東半分は氾濫域にかかっており、この100年間は大きな流路の変更や氾濫は見られないものの、江戸時代以前はかなりの水害を受けていた地域であったと思われる。現標高は住宅化が進んで5～7mとなり（図1）、10mもあった台地との比較差は台地斜面にまで住宅が張り付

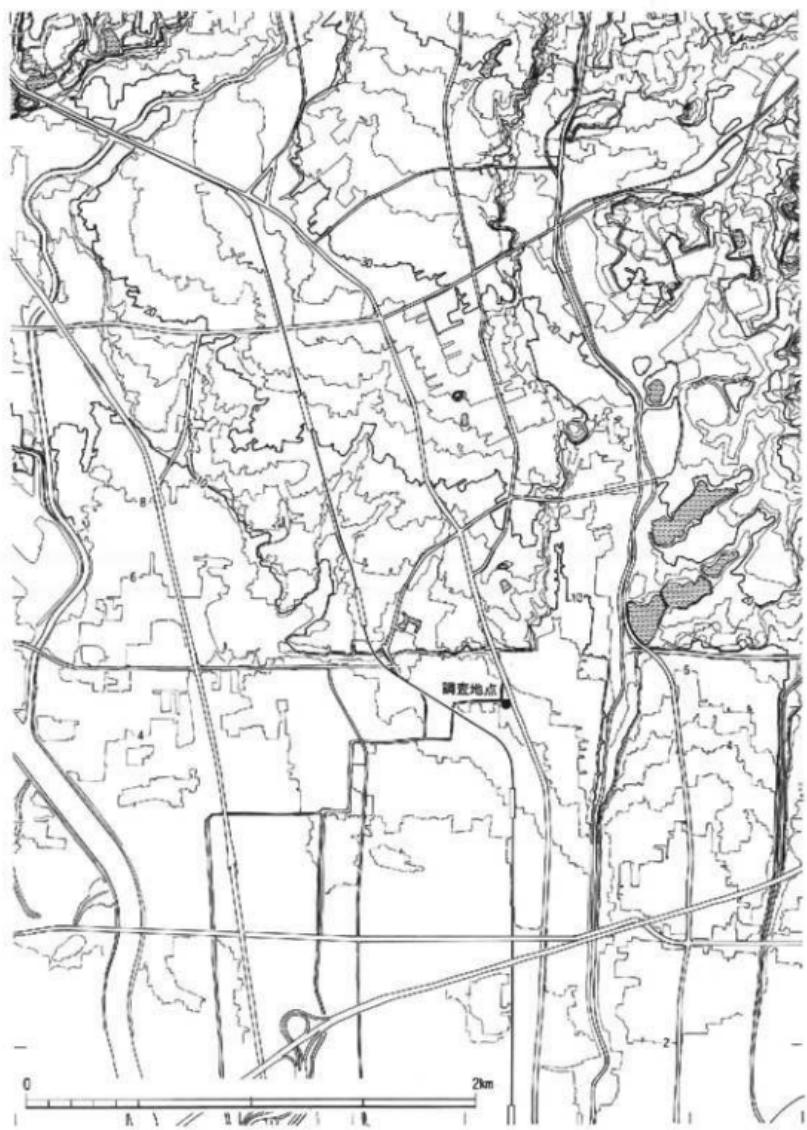


図1 遺跡周辺の地形図 (1/25,000)

いていることもあるってか、今ではあまり高く感じられない。また、のどかな田園風景の面影はまったく見られなくなっている。ちなみに、調査地点の現標高は約6mである。

3 歴史的環境

豊中市内では、現段階で71ヶ所の遺跡および遺跡群が確認され、分布地図（1995年12月改定版）に表示されている。これらの遺跡の立地は、北部の丘陵地帯、平野に面した丘陵台地、沖積平野のおおむね三つに分けることができる。特に、二番目と三番目にあげた地域は遺跡の密度が高く、集落遺跡のなかにはかなり広範囲にくくられているものもある。

北部丘陵地帯の遺跡のあり方をみてみると、弥生時代や古墳時代の集落遺跡が少なく、まず目につくのがその全体を被うように分布する須恵器の窯跡群である。古墳時代から奈良時代にかけての窯跡が点在し、桜井谷古窯跡群として名高く、生産遺跡の分布地帯に位置づけられる。また、市内で見つかっている縄文時代の遺跡の多くもこの地域の千里川上・中流域の河岸段丘上に立地する、という特徴が見られる。

平野に面した丘陵台地には、弥生時代に螢ヶ池北遺跡や待兼山遺跡、新免遺跡などの集落が形成され、弥生時代から古墳時代を通じて顕著に開発の手が伸びていった様子が発掘調査によって明らかにされつつある。古墳時代前期、待兼山古墳、御神山古墳、大石・小石塚古墳が丘陵縁辺に点在するように築かれるが、中期になると大石・小石塚古墳のある農中台地の中央部に集中して築造され、桜塚古墳群を形成し、ここが中心地域として発展したようである。同じ農中台地の低位部にある新免遺跡などは、古墳時代後期、前述した桜井谷古窯跡群と非常に関係深く関わって発展した遺跡として注目されている。そして、飛鳥時代には近くに金寺山廃寺が建立され、中世戦国期には農中台地の南西端に原田城が築城される。原田城の東に隣接する曾根遺跡では、奈良時代から平安時代の大型建物群が検出され、豊島郡衙の可能性が取りざたされている。

沖積平野に立地する遺跡は、水田稲作の導入とあいまって、弥生時代以降、低湿地での土地利用が高まり、急速にその数を増加していく。西側の平野部には勝部遺跡や原田西遺跡、南側の平野部には小曾根遺跡などが弥生時代前期に形成され、中期、後期を通して飛躍的に増大する。服部遺跡や利倉遺跡、「庄内式」の型式名を与えた庄内遺跡などがそれである。このような低地に営まれた遺跡は水田経営に適していたであろうが、洪水など水の脅威がつきまとっていたのに対し、比高差10m前後の台地縁辺に営まれた遺跡はその脅威にさいなまれることもなく、低地と台地の遺跡はどのような関係にあったのであろうか、注目される。

なお、最近、穂積遺跡で縄文時代の海成層が検出され、現在では死滅したといわれる貝

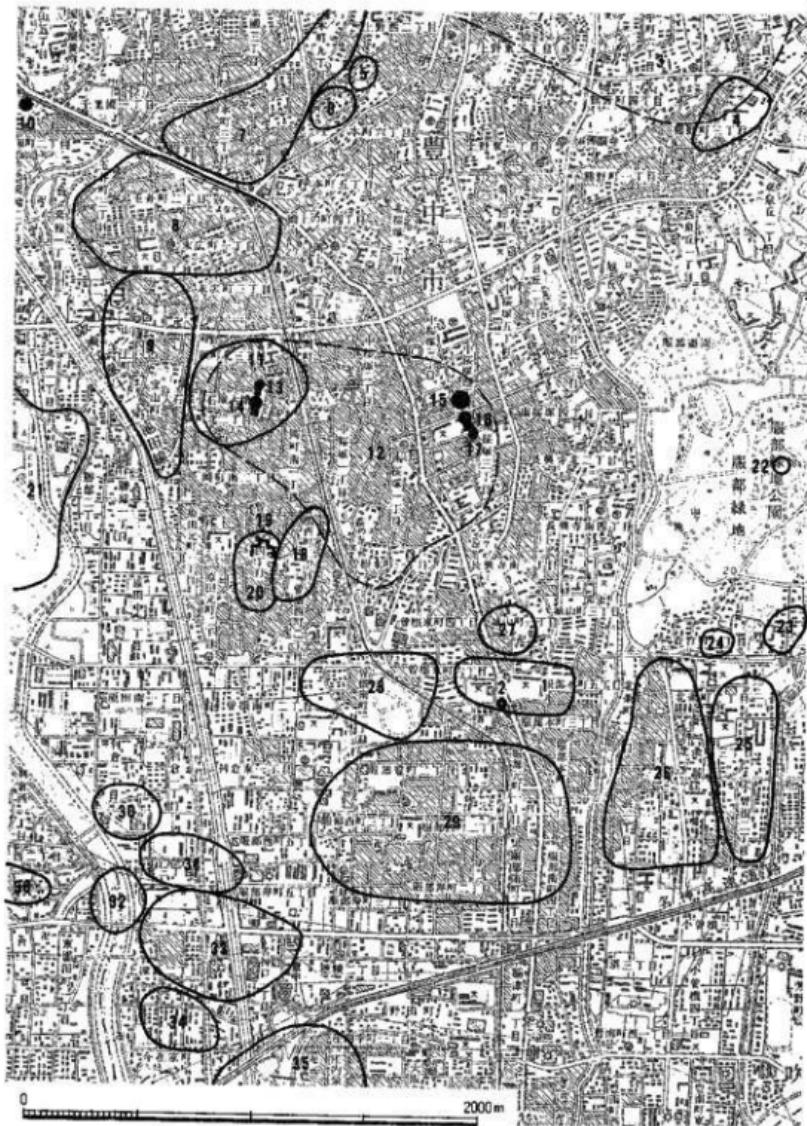


図2 遺跡の位置と周辺の遺跡（2が発掘調査地点）

表1 豊中市遺跡一覧

番号	遺跡名	種類	内 容	時 代	文 献
1	服 部 遺 跡	集 落	豊穴住居址・円形周溝墓群 掘立柱建物・井戸・粘土鉢器坑	弥生・古墳後期 平安・鎌倉	5, 23, 27
2			第5次調査地点		本報告書
3	桜井谷高跡群	高跡群	古墳時代後期を中心とする須恵器高跡群	古墳～奈良	
4	熊野川遺跡	集 落	掘立柱建物・溝	古墳後期・鎌倉	22, 26
5	金 寺 山 旗 寺	寺院跡	軒丸瓦・軒平瓦・塔心磚	白鳳～奈良	26, 31
6	新免宮山古墳群	古墳群	横穴式石室墳・陶棺	古墳後期	31
7	本 可 遺 跡	集 落	豊穴住居跡 掘立柱建物跡	弥生～鎌倉	16, 17, 18, 20, 24, 25, 26
8	新 免 遺 跡	集 落	豊穴住居跡 方形周溝墓 古墳跡	繩文～中世	6, 7, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 21, 22, 25, 26, 27, 30
9	山ノ上遺跡	集 落	豊穴住居跡 掘立柱建物跡 寺院跡	弥生～中世	12, 14, 15, 25
10	御 神 山 古 墳	古 墳	前方後円墳 三角縁特徴鏡・車輪石出土	古墳前期	31
11	岡町北遺跡	集 落	豊穴住居跡 掘立柱建物跡	弥生中期～	29
12	桜塚古墳群	古墳群	もと36基存在したとされ、その内5基が現存	古墳前・中期	26, 27, 31
13	小石塚古墳	古 墳	前方後円墳 全長49m 周囲に円筒棺群	古墳前期	17, 18
14	大石塚古墳	古 墳	前方後円墳 全長80m以上 周囲に円筒棺群	古墳前期	4, 20, 25, 26, 27
15	人 手 古 墳	古 墳	円墳 直径56m 史跡整備済み	古墳中期	8, 10, 12, 25
16	御舞子塚古墳	古 墳	前方後円墳 全長53m 史跡整備済み	古墳中期	9, 10, 15, 21, 25, 26
17	南天平塚古墳	古 墳	帆立貝式古墳 全長28m	古墳中期	1, 25, 31
18	曾根遺跡	集 落	豊穴住居跡 掘立柱建物等	弥生・平安	26, 31
19	原田城跡	城 壕	宝町堀の茶碗 伊丹の右衛門城跡まで存在	豪町・戦国	28
20	原田遺跡	集 落	掘立柱建物等	弥生・戦国	28, 31
21	勝 那 遺 跡	集 落	木棺墓 塼棺墓 掘立柱建物跡	弥生～平安	2, 27
22	梅 塚 古 墳	古 墳	元は大型の前方後円墳 昭和34年に全壠	古墳中期	31
23	寺 内 遺 跡	集落跡	土坑・水路 白鳳期の瓦出土	古墳・中世	28
24	石 遊 寺 麗 寺	寺 院	中世の寺跡 初建は古代に遡る可能性あり	中世	28
25	北 条 遺 跡		河川跡等 多くの遺物が出土	弥生～中世	28
26	小曾根遺跡	集 落	弥生前～中期の発点集落 古墳前期の河遺	弥生～古墳	26
		菲 国	春日社領盛水西收牧小曾根村に推定される集落	平安～江戸	28
27	城 山 遺 跡		臨陣工事で弥生時代中期の遺物が出土	弥生中期	28
28	豊島北遺跡	集落跡	弥生時代末の円形周溝墓群	弥生	25
			掘立柱建物 水田地割りにともなう坪界	奈良～中世	28
29	砂 積 遺 跡	集落跡	绳文時代中期の海成層を被出 直径18mの円墳	繩文～古墳	25, 26, 27, 19
		北 地	春日社領庵水西收牧精村に推定される集落	平安～近世	31
30	利 倉 遺 跡		水路等	古墳～近世	3, 27
31	利 倉 南 遺 跡	集落跡	古墳時代中期の方墳群等	弥生～古墳	28
32	上津島川床遺跡	集 落	豊穴住居址 掘立柱建物 河から木製品等出土	弥生～中世	26
33	上津島遺跡	集 落	河跡から人形・菅串等祭祀遺物出土	弥生～平安	27
34	上津島南遺跡	集 落	掘立柱建物 井戸 土壙墓 亂圓文軒丸瓦出土	弥生～奈良	28
35	島 田 遺 跡	集 落	河跡から石製模造品等祭祀遺物 掘立柱建物群	古墳～鎌倉	14, 19, 25, 31
36	利 倉 四 遺 跡	集 落	豊穴住居址 大量の初期須恵器出土	弥生～古墳	28

主要文献

1. 小林行雄「大阪府豊中南天平塚の発掘」「考古学」8・9 東京考古学会 1937
2. 豊中市教育委員会「勝部遺跡」1972
3. 利倉遺跡発掘調査団「利倉遺跡」1976
4. 豊中市教育委員会「史跡大石塚・小石塚古墳—保存事業に伴う調査報告」1980
5. 服部遺跡発掘調査団・豊中市教育委員会「服部遺跡発掘調査報告書」1986
6. 古急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団・豊中市教育委員会「新免遺跡第11次発掘調査概報」1986
7. 豊中市教育委員会「新免遺跡・第11次調査報告書」1987
8. 豊中市教育委員会「摂津豊中人城古墳」1987
9. 豊中市教育委員会「御獅子塚古墳」1990
10. 豊中市教育委員会「大塚古墳・御獅子塚古墳—環境整備事業」1991
11. 豊中市教育委員会「桜井谷窯跡群2・23号窯跡」1991
12. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1982年度」1983
13. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1983年度」1984
14. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度」1985
15. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1985年度」1986
16. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1986年度」1987
17. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1987年度」1988
18. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1988年度」1989
19. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1989年度」1990
20. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1990年度」1991
21. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1991年度」1992
22. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1992年度」1993
23. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1993年度」1994
24. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1994年度」1995
25. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財年報 Vol. 1 1989、1990年度」1993
26. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財年報 Vol. 2 1991、1992年度」1994
27. 豊中市教育委員会「豊中市埋蔵文化財年報 Vol. 3 1993年度」1995
28. 豊中市教育委員会「豊中市文化財分布図『ふるさとの文化遺産を守るために一埋蔵文化財発掘調査の手引き』」1995
29. 六甲山麓遺跡調査会「豊中市岡町北遺跡—第3次調査—」1993
30. 六甲山麓遺跡調査会「豊中市新免占塚群第3号墳—新免遺跡第38次調査—」1993
31. 豊中市役所『豊中市史』第一巻 1961年

とともに、縄文時代中期の土器片を利用した鍤が出土し、縄文人の低地での活動が明らかにされた。

最後に、服部遺跡における既往の調査内容を簡単に見ておく。調査は本調査で5次目にあたり、それぞれの調査地点は図3に示す。

服部遺跡に初めて調査のメスが入れられ、遺跡の性格の一端が明らかになったのは1985年9月である。市立第4中学校体育館の建替えにともない、第1次発掘調査が実施された。調査面積は約140m²で、中世と弥生時代の遺構面の存在が明らかにされた。中世の主な遺構としは、曲物を井筒に使用した井戸がある。深さは2mあり、井戸底に曲物を4段85cmに重ね、その上に方形枠が組まれていたらしく、一辺70cmの木製の基底枠と縦側板が1枚残る。また、調査区外から、工事中に羽釜を井筒に転用した井戸も見つかっている。羽釜は底部を欠いて、口縁を下に二段に重ねられたものである。他に、平安時代の土坑も1基検出されている。弥生時代の遺構には、二段に掘り込まれた土坑など5基と溝状遺構数本、ピットが検出されているが、建物跡などは確認されていない。出土遺物は弥生時代後期後半から終末期にかけての良好な一括遺物で占められている。この調査により、当初考えられていた遺跡の範囲が北へ拡がることがわかった。(文献5)

第2次調査は、1次調査の北西150mの地点、曾根東5丁目の一画である。調査期間は1993年6月～8月で、調査面積は約247m²である。主な遺構としては、古墳時代後期の掘立柱建物1棟と建物の敷地を区切ると考えられる溝などが検出された。掘立柱建物は南北3間(4m)、東西2間(3m)の総柱造りである。これにより、古墳時代後期の集落の存在が明らかにされた。遺物では、北白川下層式の縄文土器の出土が注意される。(文献27)

第3次調査は、1次調査と2次調査の中間地点、曾根東6丁目の国道176号沿いの敷地である。調査は1993年10月～12月にかけて、210m²が発掘された。この調査では、中世の粘土採掘坑24基、中世の掘立柱建物跡1棟のほか、弥生時代終末頃と古墳時代後期の河川跡などの検出に加え、弥生時代後期の包含層も確認された。(文献27)

第4次調査は、遺跡の東端部にあたる服部本町5丁目の府営住宅建替え高層化にともなう大がかりな調査である。約1年を要する調査期間中、後半は第5次調査期間と重なる。主な遺構に弥生時代後期後半から終末期の造り出しをもつものを含む円形周溝墓5基、方形周溝墓1基、土坑墓10余基、掘立柱建物跡4棟、竪穴住居址2棟、井戸4基がある。弥生時代後期の集落と墓地の存在が明らかになった。なお、当遺跡の西に隣接する豊島北遺跡でも第3次調査が平行して進められており、同時期の円形周溝墓が見つかっている。



図3 第5次発掘調査地の位置と既往の調査地（I～Vは次数を表わす）

II 調査の経過

1 調査にいたる経過

1994年8月下旬、野村不動産株式会社大阪支店から豊中市に所在する服部遺跡の発掘調査の話しが持ち込まれた。土地の取引をめぐって、埋蔵文化財存否の確認が市教育委員会に提出され、この夏2度にわたって試掘調査がなされた結果、中世と弥生時代の遺構面2面が確認され、発掘調査の必要性が説かれた。発掘調査は、土地の取り引きの前におこなうという前提条件をめぐって、すみやかな調査開始がのぞまれた。しかし、市教育委員会ではすでに服部遺跡第4次調査、豊島北遺跡第3次調査など大きな発掘調査を抱えており、調査にかかるのは来年度以降になるということであった。このような状況を受けて市教育委員会社会教育課と協議し、同年10月かかりから調査を開始することで合意した。

発掘調査範囲や方法については、市教育委員会の指導を受け、あらかじめその範囲が設定され、また、中世と弥生の面の間にある50~60cmの厚い洪沢堆積砂は機械でもって除去して期間の短縮をはかるなど対策をとることになった。

調査に先だって、9月1日、浅岡俊夫を調査主任とする発掘調査届を文化財保護法第57条第2項の規程により市教育委員会に提出し、同月30日、市教育委員会教育長、野村不動産大阪支店長、当調査会代表の三者による「埋蔵文化財調査に関する協定書」を締結した。また、発掘調査の事業委託契約は、本体建設工事を請け負った清水建設大阪支店と当調査会で締結した。

2 発掘調査組織

発掘調査および整理作業の担当者はつぎのとおりである。

調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
調査副主任	古川久雄
調査員	磯辺敦子、西田明子、(整理のみ) 萩原美香、梅川光隆
調査事務	中棚美佳、藤井民子
遺物撮影	楠木真紀子
作業員	佛安西工業
空撮測量	写測エンジニアリング㈱

3 調査の経過

発掘調査は1995年10月3日より開始した。調査地区は、建物建設の本体工事部分（南調査区という）と、立体駐車場建設部分（北調査区という）とに分けて行なった。当該地はアスファルト舗装された駐車場であったため、調査範囲にコンクリートカッターが入れられており、重機でアスファルトを剥がす作業から始めた。重機掘削は、土層が砂質が主体ということもあって、調査区外周に大きく法面を残しつつ、約一週間をかけ全体にわたって約1mの盛土と旧耕土・床土（第1・2層）を除去した。

11日からはベルトコンベアを設置して、南調査区壁面の整理や搅乱坑の発掘をしつつ、試掘溝やサブトレーナーなどで土層の観察を行い、順次第3層も除去していく。13日からは上層の遺物包含層である第4層の発掘を始め、25日にはそれも終了して上層遺構の上面検出状況の撮影をした。引き続き各遺構の発掘を進めるとともに、北調査区の第3・4層の除去も行い、11月1日に上層遺構の空中撮影を実施した。

統いて遺構平面実測の進捗をまって、遺構の未掘・切り合い部分も発掘し、掘立柱建物（SB-1・2・3）についてはそれぞれ単独撮影を行った。11月4日には市教育委員会服部聰志氏・清水篤氏の中間立会があり、7日に上層遺構面の調査を終了した。

市教委による試掘の際、上層遺構面と下層遺構面の間に50~60cmの砂質の無遺物層のあることがわかつていただけたため、11月8日より再度重機を入れ、第7層上面（一部第6層上面）までを一気に除去した。ところが、第7層上面の精査で予想外に古墳時代水田面があらわれ、大小の畦畔が検出された。しかしながら、水田面と確信した時点では既に一部で下層包含層（第8層）の上面検出をはじめていたので、全景撮影するにいたらず、平面図を作成するにとどまった。

第8層の発掘は11月22日より始め、サブトレーナーで土層断面の検討をしつつ第9層上面を精査し、12月1日に下層遺構上面検出状況を撮影した。遺構の発掘はND-2・ND-3の河道より始めたが、いずれも湧水が激しく粗砂・細砂の埋土が容易に流出してしまうので、調査区壁面の崩壊を懸念して完掘を断念した。他の遺構についても、ベースとなる厚さ10~20cmの第9層の下が分厚い暗灰色細砂（第10層）になるため、少し深い遺構やサブトレーナーについてはすべて水たまり状となり、小規模ながら各所で遺構壁面崩壊の危険にさらされ、排水に苦心するとともに水中ポンプをフル稼働せざるをえなかった。

遺物の出土状況や壁断面の撮影・実測などを行いつつ、12月20日には一部を除いて遺構発掘を終え、22日にバルーンとセスナ機による空中撮影を実施した。統いてSA-1・2等の部分撮影を行い、24日には年内の調査を終えた。

新年（1995年）は1月6日から作業を開始し、主として遺構平面実測（1/20）を進めるとともに、切り合い部分など遺構の掘り残し部を発掘し、またSA-101・102の光撮状況を撮影した。1月12日には、文化財保護係長奥田至藏氏、主任学芸員柳本照男氏、清水篤氏による終了立会があった。

調査も終了間際となった1月17日の午前5時46分、観測史上初の震度7を記録する大地震が兵庫県南東部を襲い、淡路島北部と神戸・芦屋・西宮・宝塚などを中心として6000人を越える死者と一時期300,000人以上の避難民が出た。被災の中心から東へはずれる農中市では完全倒壊の家屋こそ少なかったが、市域南部の各所に設けられた避難所には多くの市民があふれた。地震当日は大阪近辺でもほとんどの交通機関が不通、神戸方面へ向かう主要道路は空前の大渋滞、神戸・阪神方面との電話連絡もほとんど不能という状態であった。

さいわい発掘現場では、事務所の備品が一部転落する程度の軽微な被害ですんだため、翌日の18日より作業を再開したが、作業員のほとんどは宿舎・自宅が被害を受けたため当面の避難所暮らしを余儀なくされており、また交通事情の関係もあって出勤できなかった。よって、復旧した阪急電鉄宝塚線で通える一部の調査員・作業員のみで、最後の遺構断ち削りや図面の追加点検などの作業を進め、1月20日に現地作業を終了した。さらに、図面整理や出土遺物の洗浄・注記など若干の室内作業を現場事務所で行い、同31日に現地を撤収した。

調査日誌

1994年

- 9月30日～10月1日 事務所備品、および調査関係器材搬入。
- 10月3日 調査開始。野村不動産蟹江氏立会。
- 3日～ 8日 機械掘削。フェンス等付帯工事。南側在区から調査開始。調査区壁面・検出面整理。北壁の一部にサブトレンチ設定。
- 11日～ 12日 ベルトコンベア搬入。壁面整理、検出面残土処理、第4層上面検出続行。
- 13日～ 15日 第4層、東壁部サブトレンチ掘削。調査区外周・試掘坑等平板実測。写真エンジニアリング師により5m方眼杭設置（14日）。
- 17日～ 24日 第4層発掘続行、平安・鎌倉期に相当する上層遺構面を精査、遺構上面検出につとめる。調査区北東部で自然河道（ND-1）を検出し、畦を残して掘り下げる。
- 25日～ 26日 上層遺構上面検出状況全景撮影。終了後、遺構配置状況平板実測と

- 並行して遺構掘削を始める。北調査区第3層発掘。
- 27日～ 29日 遺構発掘続行、遺構内柱断面撮影・実測。北調査区第3・4層発掘終了。東壁にサブトレーナーを設定して土層観察。
- 30日 空撮のため上層遺構面全面清掃、および方眼杭検測（写真エンジニアリング）。
- 11月1日 バルーンによる空中撮影。
- 2日～ 4日 遺構平面実測（1/20）。市教育委員会服部聰志氏・清水篤氏立会。
- 5日～ 7日 遺構の切り合い部分等発掘のうえ、平面図追加記入。掘立柱建物（SB-1～3）柱穴列等断面実測。掘立柱建物3棟それぞれ撮影。上層遺構面調査終了。
- 8日～ 10日 中間の無遺物層（第6層上面まで、厚さ50～60cm）を機械掘削。
- 11日～ 14日 檢出面清掃。第6層で微量の古墳時代頃の須恵器が出た。第7層上面は複雑に踏み荒らされたような状況を呈し、若干の柱跡も検出されたため古墳時代の水田と判断。また北側試掘溝と重なって東西にのびる盛り上がりも、同時期の大柱跡ないし遺構と考えられたため、急速これらを中層遺構とする。一部写真撮影とあわせて平板実測。
- 14日 方眼杭再度設定（写真エンジニアリング）。
- 15日～ 19日 第7層発掘、第8層（弥生時代遺物包含層）上面検出。掘削深度が2mを越えてきたため、各壁面に添って若干のテラスを残したうえでサブトレーナーを設定。
- 21日 第7層発掘終了。第8層上面で全景撮影。上層断面の実測を開始する。
- 22日～ 26日 第8層発掘。土層断面実測を継続。
- 28日～ 30日 第9層上面精査、遺構検出。北調査区も第8層まで発掘。
- 12月1日 全体清掃、下層遺構検出状況全景撮影。
- 2日～ 3日 SA-102上面検出状況撮影。下層遺構全体検出状況平板実測。ND-2・3を発掘。ともに埋土かほとんど灰色砂で湧水が激しく壁面崩壊のおそれがあるため、擁壁を設け、また大きく法面を残すなど対策をこうじて最深部までの完掘を断念。
- 5日～ 20日 遺構発掘。その進捗状況にあわせて、隨時遺構の部分撮影や柱断面・遺物出土状況の撮影と実測も進める。

- 21日 下層遺構をほぼ全掘。空掘にむけて全体清掃。方眼杭検測。
- 12月22日 空中撮影（写測エンジニアリング）。セスナ機による遠望・垂直撮影も行う。水中ポンプによる排水の方法について豊中市下水道部より注意を受け、下水管へ直接流す方法に変更する。
- 23日～ 24日 下層遺構面全景撮影、および住居址等の遺構部分撮影。発掘器材を整理し、ベルトコンベア撤出。ブルーシートによる遺構面・調査区壁面等の保護に万全を期して年内の調査を終了。
- 1995年
- 1月6日～ 7日 新年度の調査を開始。平面実測（1/20）準備のため割り付け、遺構内水抜き等。
- 9日～ 14日 遺構平面実測（1/20）、およびその進捗状況にあわせて遺構の未掘部や切り合い部の発掘を進め、必要に応じ随時撮影も行う。また土層断面図（1/20）の点検・追記も実施。SA-102の発掘状況撮影（14日）。
- 12日 市教育委員会文化財保護係長奥田至藤氏、主任学芸員柳本照男氏、清水篠氏により終了立会。
- 17日 本日未明（5:46）に突如おそった兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）により、公共交通機関が全面ストップし、電話連絡もほとんど不能となる。やむなく、発掘現場の被害が軽微なことを確認するのみで作業は中止。
- 18日～ 19日 交通機関の部分復旧により、通勤可能な一部の調査員・作業員のみで作業を再開。平面図点検・補足記入。また柱穴列等一部遺構断ち割りのうえ、各種遺構の断面実測。土層断面の部分撮影を行う。
- 20日 土層断面図の一部について修正・追加記入のうえ現場作業を完了する。
- 24日～ 31日 現場事務所において、出土遺物の洗浄・註記、および図面の整理等室内作業を行う。また随時不用器材をかたづけ、31日には現地を撤収する。

III 調査の概要

1 調査の方法

1994年夏、豊中市教育委員会によって遺跡存否確認の試掘調査が二度にわたって行われた。特に、二回目の試掘は遺跡の状況を詳細に知るため、東西方向に幅2m長さ十数mのトレンチが二本設定された。その結果、上下二枚の遺構面があること、敷地南西部には中世の大きな埋没河道があって、その箇所は遺構面が完全に失われていることがわかった。また河道部分は河水がきわめてはげしく、2mを越える発掘は危険と判断された。そこで、その河道が発掘調査範囲にひっかかるところは調査対象から除外されることとなった。

よって、発掘範囲は、北東部が不整形に突出するなど、複雑な平面形状をなす調査地となった。さらに立体ガレージの地下埋設部分も11m×4mの長方形に発掘した（図4）。

北側に分離した立体ガレージ部分を北調査区、建物本体工事部分を南調査区と呼ぶ。

発掘範囲は、前もってアスファルト面にコンクリートカッターをいれて示されており、それにしたがってアスファルトを剥がし、盛土と耕土（第1層）・床土（第2層）など地表下約1.5mまでは一気に重機掘削を行った。その際、試掘で判明している最終遺構面が現地表下2m以上に達するにもかかわらず土留壁設置等の措置をこうじられていなかったため、調査区内壁面、特に東側の民家と国道に面する部分においては、特に大きく法面を残すこととした。残土は第3層以下の入力掘削の分も含めてすべて場外搬出とし、ミニユンボを使用してダンプに積み込みを行った。

発掘面積は敷地面積約1200m²の半分にあたる約630m²であるが、調査区周囲に大きく法面を残したので、最終面での調査面積は約400m²にとどまった。

調査地区は、国家座標（第VI系）にとりつけて5m方眼に割り付けた。方眼にはその西北交点に西から東へ0 1 2 3…、北から南へA B C D…の番号・記号を付し、それをグリッド名とした。国家座標値は、たとえばD-2がX=-136,980・Y=-47,820、F-5はX=-136,990・Y=-47,805となる（図5）。

遺構検出は、上層の遺物包含層である第4層除去後の第5層上面（上層遺構）と、下層遺物包含層である第8層除去後第9層上面（下層遺構）で行い、いずれもバルーンによる空掘を実施した。また上層遺構調査後、50~60cmの無遺物層は重機掘削を行ったが、その直下、第7層上面で古墳時代の水田面を検出したため、これを中層遺構とした。

検出遺構は、上層・下層とも掘立柱建物・竪穴住居・土坑・溝など数多く、これらはSA

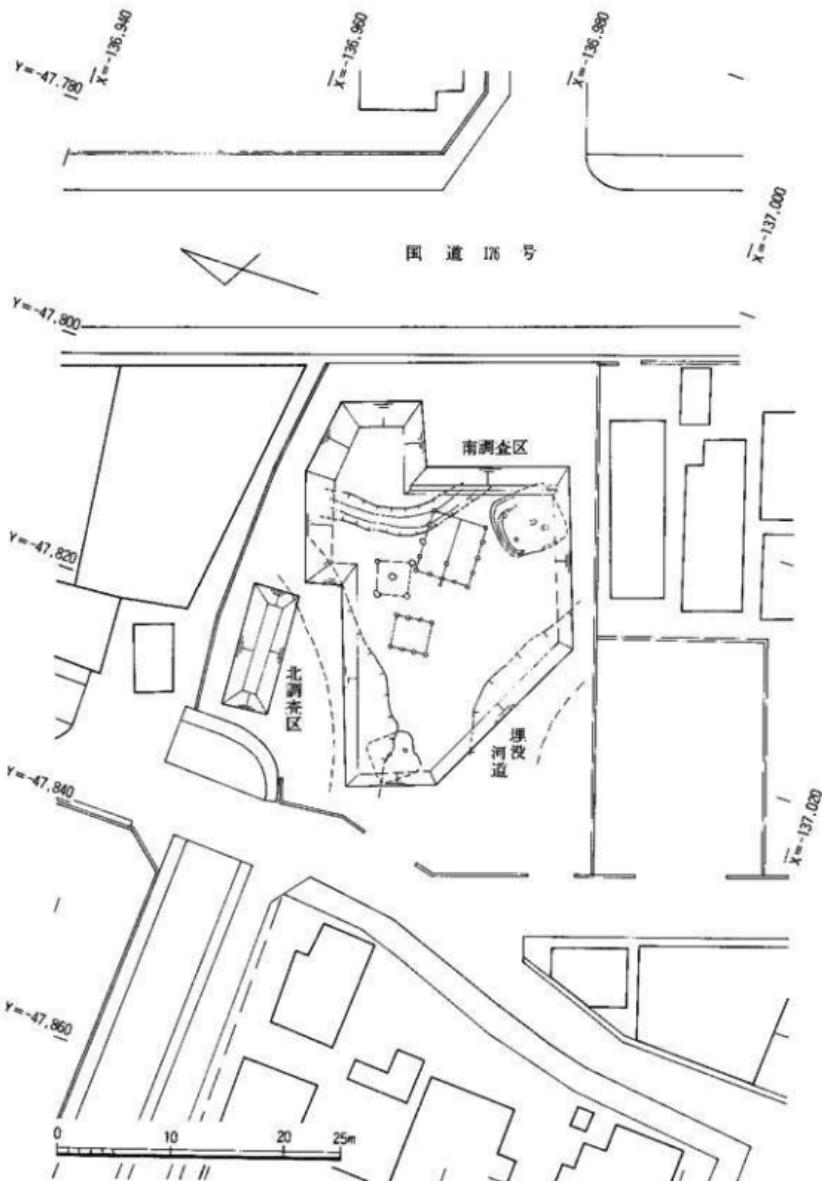


図4 発掘調査区域図 (1/500)

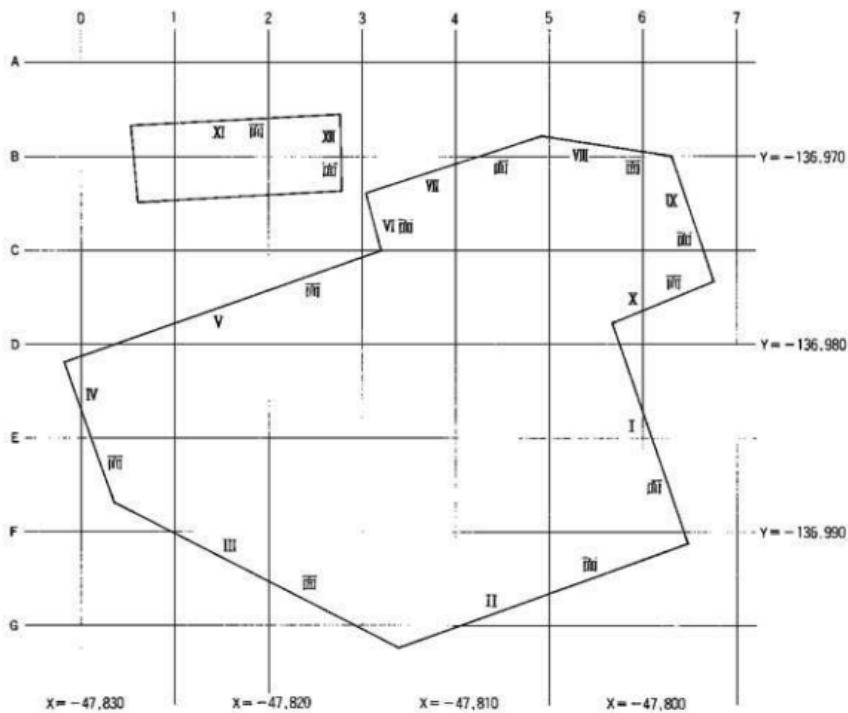


図5 5m方眼区割り図と土層断面図の面（ローマ数字）(1/300)

(豊穴住居址)・SB (掘立柱建物)・SK (七坑)・SP (ピット)・SD (溝)・ND (河道)と略称するとともに、造構種別に上層造構では1~99まで、下層造構では101からの通し番号を与えた。なお、遺構図中、ピットについてはSPを省略して番号のみ記している。

2 土層の概要 (図6~8)

調査地の現地表は、標高6.1m前後を囲り、アスファルト・パラスと盛土（あわせて厚さ約90cm）の下にⅢ耕土（第1層、暗灰色砂質土）がある。第1層には、東西方向を示す多数の歴が観察され、埋め立てられる直前は明らかに水田ではなく畑として利用されていたとみられる。旧耕土と床土（第2層）は合わせて厚さ40cmほどで調査区全体に広がっているが、その下部はやや複雑な様相を呈し、全壁面に共通する土層はほとんどみられない。

基本的には、中世の遺物を若干含む第3層が薄く広く堆積し、その下に平安時代前期か

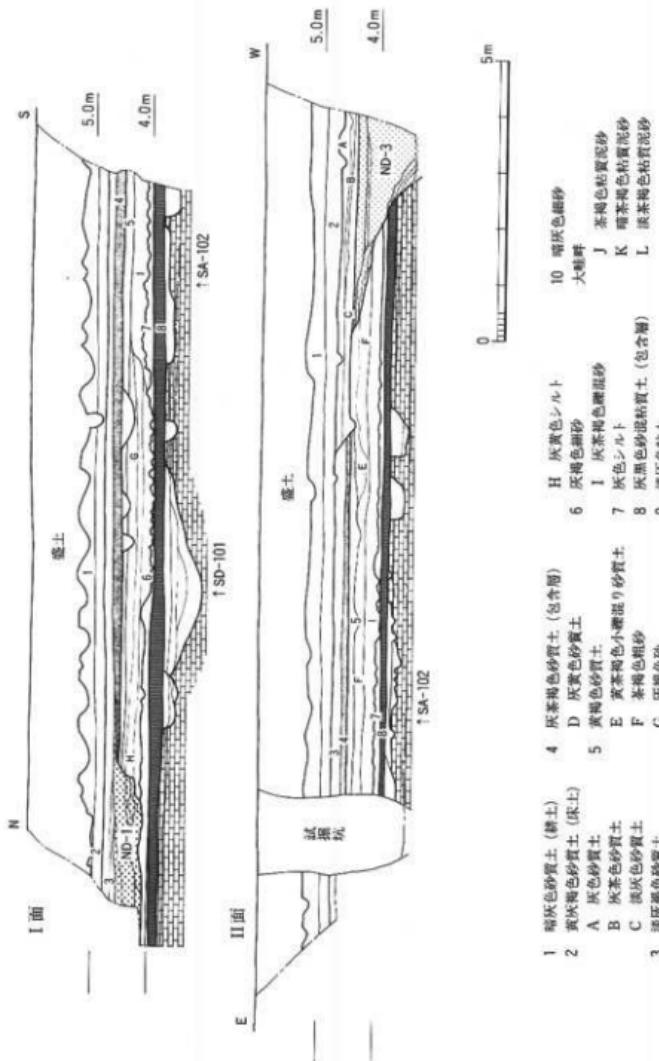


図6 土層断面図1

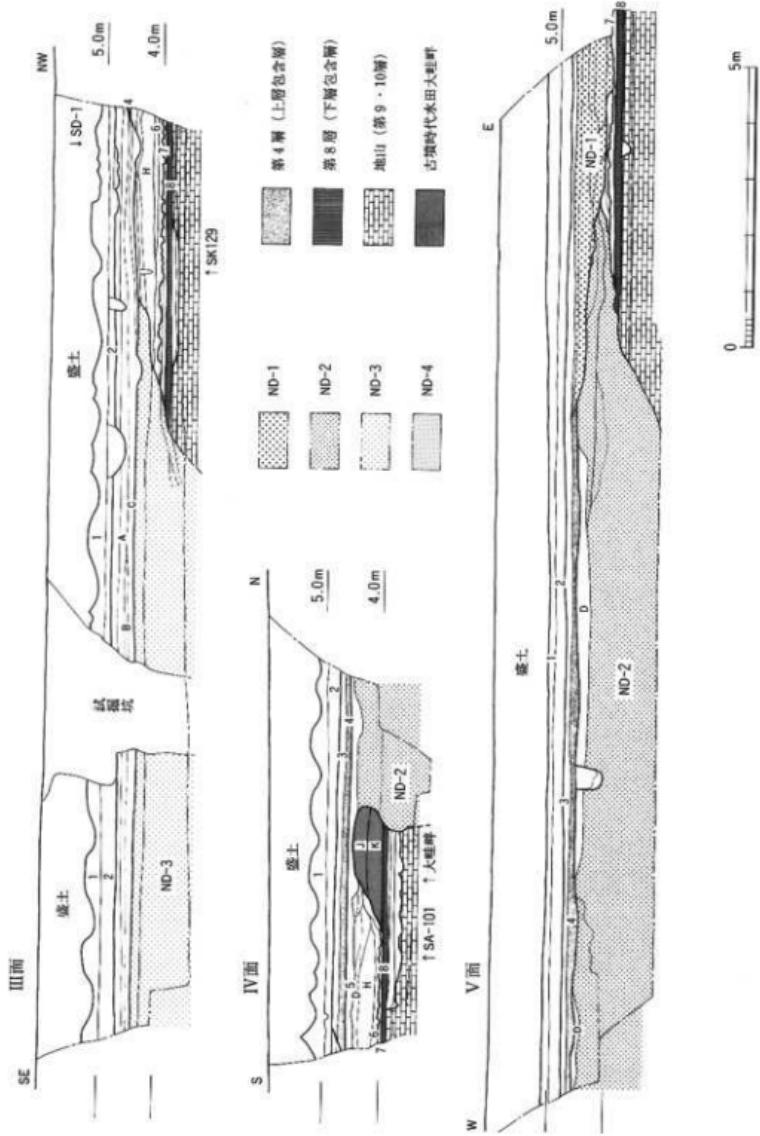


図7 土層断面図2

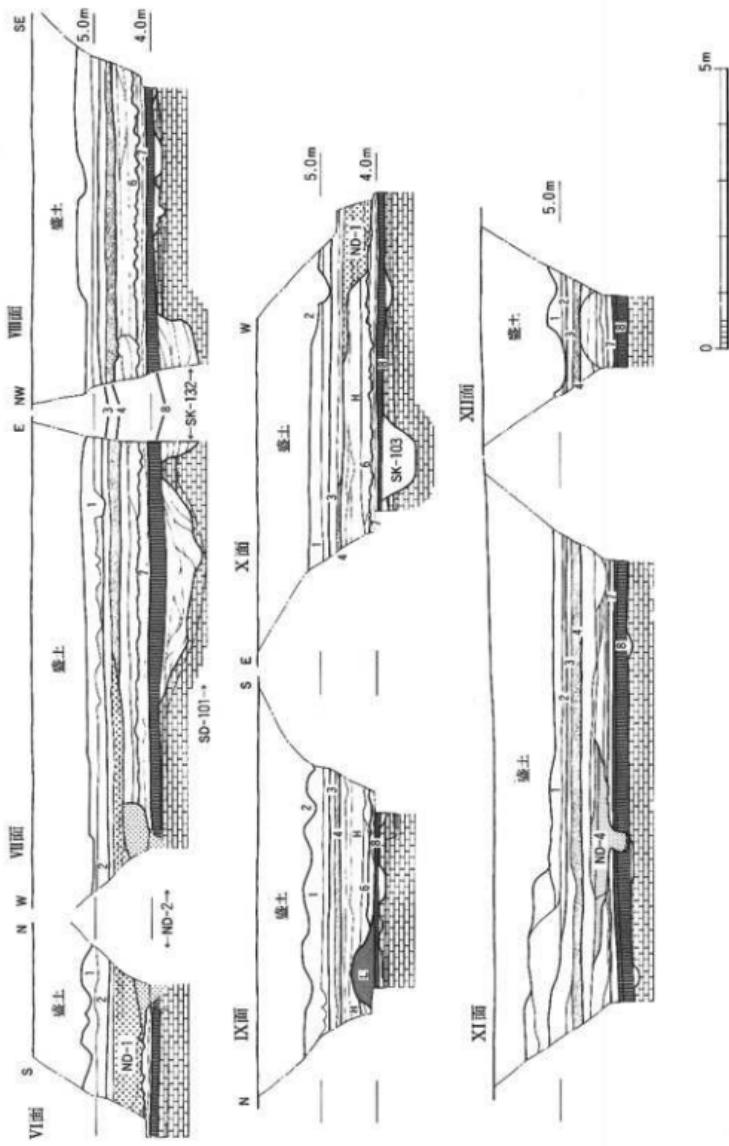


図8 土層断面図3

ら鎌倉時代の遺物を主体に包含する第4層がある。そして、この両層を切り込んで造成された一段低い耕作面が調査区南西部にあり、段差の下端を区切る側溝とみられる小溝が、上層遺構面の南部で東西方向から直角に南へ曲がっている。この下段部分は、三層（A・B・C層）に分層できる淡灰色系の砂質土で埋まっていた。

また、調査区北東部では、第4層を切り込んだ幅4mほどの自然河道（ND-1）があり、第3層がその上を覆う。

上層遺構面は、第4層除去後の標高約4.4mにあり、先の第3・4層を切り込んだ下段面もほぼ同一レベルとなっている。後に述べるように、この面では平安時代前期と鎌倉時代の遺構が同一面で検出されたが、土層観察では鎌倉期にいったん削平整地されている可能性が高いように思われ、古い河道（ND-2・3）の埋土上面に鎌倉期の掘立柱建物であるSB-3の柱穴が掘り込まれている。

上層遺構面の下部には、黄褐色や灰褐色系の砂（第5・6層）が40~50cmの厚さで堆積している。このあたりの土層は一見単純な水平堆積にも見えるが、よく観察すると粒度や色調など意外に層相変化があり、洪水層的な砂層もみられることから、古墳時代の終わりから奈良時代頃にかけてはあまり安定的な土地利用はされていなかったのかもしれない。

この砂質層の下には、灰色ないし灰黄色のシルト質七層（第7層）があり、その上面は踏み荒らされたような著しい凹凸を示し、洪水層と思われる粗砂が薄く被っていた。このシルト質土層は、後に述べるように古墳時代の水田に由来する土層で、大小の畦畔を伴っていた。大畦畔の土質はJ・K・Lの記号を付して表現した。

下層包含層の第8層は灰黒色の砂混じり粘土で、厚さは10~30cmあり、弥生時代中期から古墳時代初頭の土器を包含し、河道部分を除く調査区全域に広がっている。下層遺構のベースとなる第9層は、厚さは10~20cmで、第8層と比べて著しく白っぽい淡灰色粘土からなる。下層遺構面は標高3.8m前後で、現地表からの深さは2.3mある。

第10層は暗灰色を呈し極めて均質で分厚い細砂質層で、上下にはほとんど土質変化がみられず、厚さは1m以上あると思われる。また、湧水が著しく、下層遺構のうち深く掘り込んだものは常に遺構崩壊の危険にさらされた。この第10層はいわゆる縄文海進にともなう海浜性の砂層かとも思われ、今後の調査では地質調査もあわせて行なわれることを願う。

なお、第9・10層ではまったく遺物の出土をみておらず、調査では第9層以下を地山として取り扱った。

3 上層遺構

上層遺構として、掘立柱建物3棟、土坑1基、小溝・ピット多数を検出し、ほかに自然

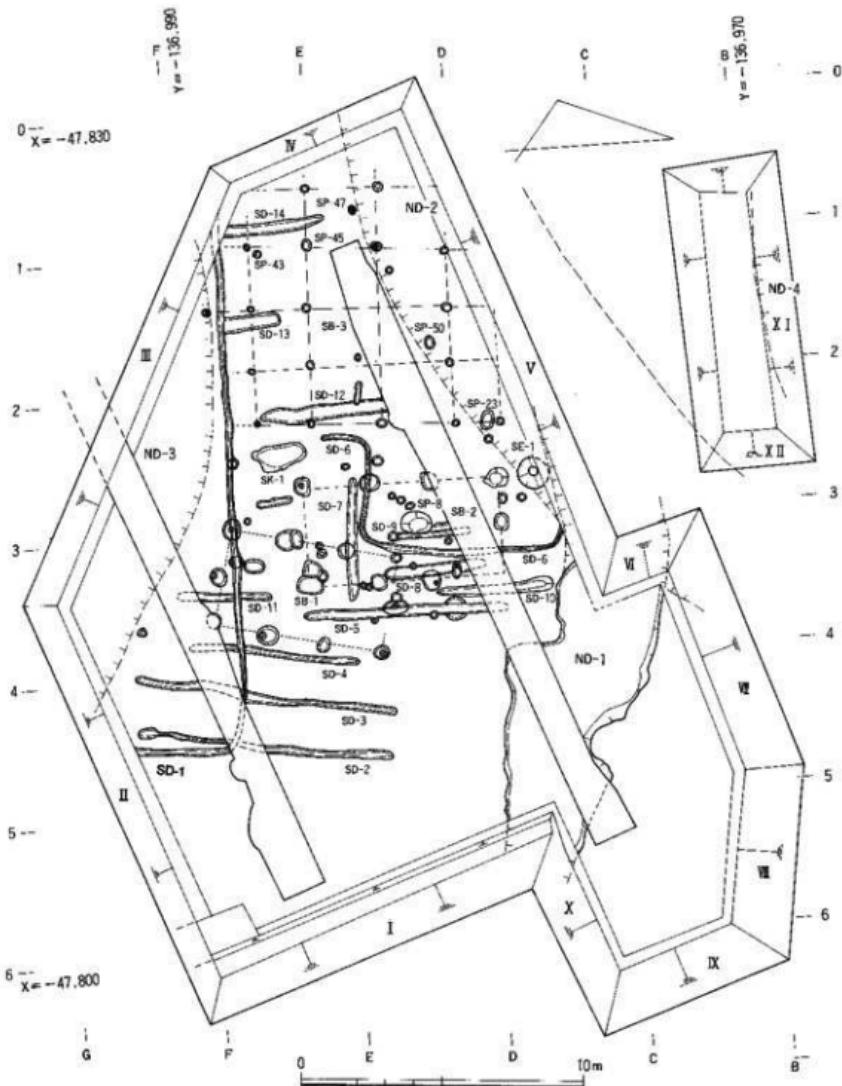


図9 上層造構平面配置図 (1/200) (ローマ数字は土層断面図の面を表わす)

河道がある。時代としては、平安時代前期と鎌倉時代の遺構が同一面で検出された(図9)。

(I)掘立柱建物

SB-1 (図10)

南北3間(6.1m)・東西2間(3.4m)の掘立柱建物で、桁行はN14°Eに軸をもつ。柱穴は南東隅のもの(SP-17)が試掘トレンチで一部切られ、西列南から二つ目のもの(SP-11)がSB-2の柱穴(SP-4)で切られているものの、10本すべてが遺存する。柱穴の形はいずれも略円形で、北西隅のSP-62がやや小さく径42cmであるが、他は径50~70cmを測り、ほぼ類似する大きさである。明確な柱痕の残るものはなかったが、柱穴底部に柱の沈み込みによるものかとおもわれる小円形の深部のあるものが多かった。また、北列中央と南列中央の柱穴(SP-13・67)はそれぞれ30cmほど柱通りから外へ外れており、棟持柱としての位置を占めている。埋土はいずれも暗茶褐色系の砂質土である。

SB-2 (図11)

南北3間(6.85m)・東西2間(3.70m)の掘立柱建物で、SB-1とはほぼ同形態・同規模

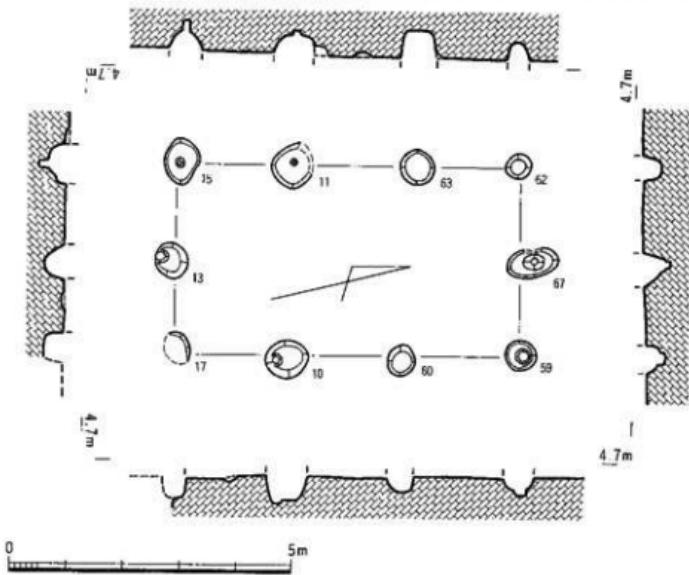


図10 SB-1 実測図

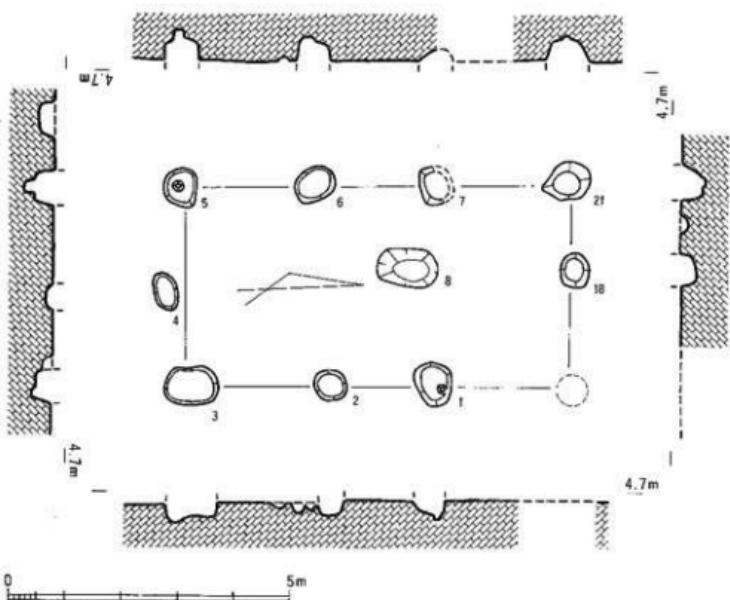


図11 SB 2 実測図

であるが、桁行の方向はやや異なり、N 3°E とほぼ真北に近い軸をとっている。柱穴は北東隅のものが試掘トレンチにかかって失われ、西列の北から二番目(SP-7)も半分しか残っていないが、他の8本の柱穴は遺存する。平面形はいずれも不整形であるが略楕円形を呈し、およそ長径75~90cmを測る。また、北列中央(SP-18)はほぼ柱通りにのるが南列中央の柱穴(SP-4)は外側へ30cmばかりずれている。埋土はやはり暗茶褐色系の砂質土である。

なお、SB-1とSB-2は一部重複しているが、柱穴の切り合い関係から、SB-1がSB-2に若干先行するものであることがわかる。柱穴からの出土遺物はいずれも少なく、所属時期を決定しがたいが、中世のものは基本的にみられず、ほぼ平安時代前期のものに限られるようなので、SB-1・2ともに9世紀頃に相前後して建てられたものと考えておきたい。

またSB-2柱列のはば中央にSP-8がある。南北1.08m、東西0.68m、深さ35cmの皿形に掘られたもので、主に平安時代前期の遺物(図33-29~34)が出土した。SB-2に伴う遺構と決めつけるわけにはいかないが、時期的にはほぼ一致することや建物との位置関係から、SB-2の内部に設けられた施設の可能性が考えられる。

SB-3 (図12)

SB-3は南側在区西部で検出した大型の掘立柱建物跡である。試掘トレンチによって建物の中央部にある柱穴二か所が失われているが、最低南北3間(7.1m)・東西3間(6.3m)は確認できる。なお、SP-45の西に一つ(SP-46)と、やや柱通りからずれるがSP-48の西

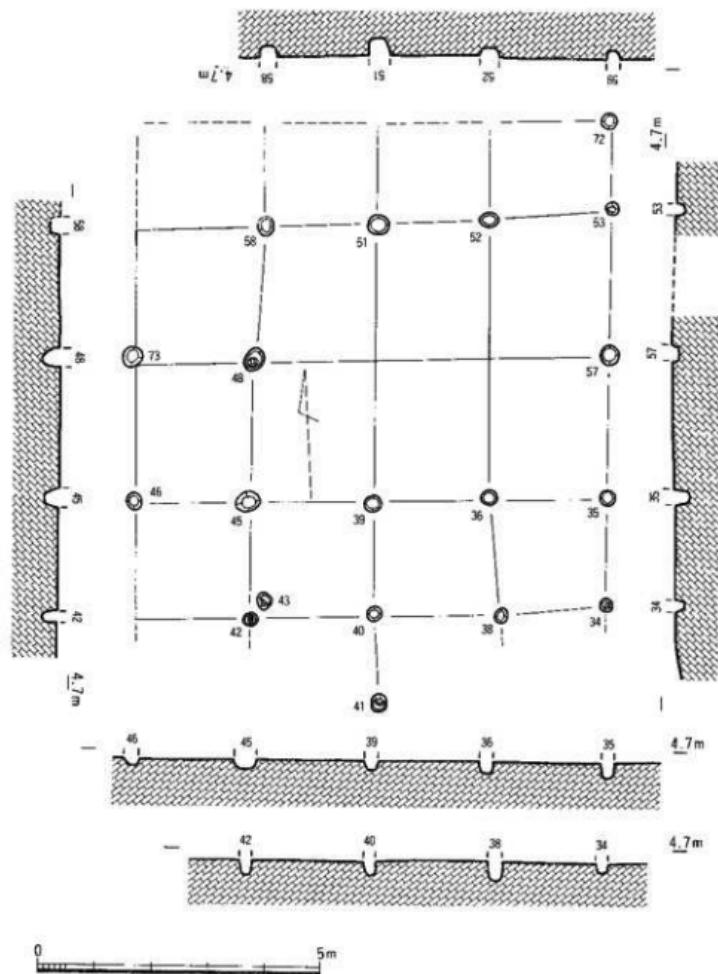


図12 SB-3 突測図

に一つ (SP 73)、SP-53の北側にも一つ (SP 72)、さらにSP-40の南側にも一つ (SP-41) の柱穴が、それぞれ柱通りの延長上に並ぶ。特に西側の柱穴は、柱間の間隔もほぼ一致するので、少なくとも西へもう一間のびて東西4間をなすことは間違いない。北と南へも延長する柱穴を南北側それぞれ1本ずつしか確認できなかったが、1間ずつはり出す可能性が非常に高い。

柱間の間隔をみると、東西方向は2.1m前後ではほぼ均等なのにに対して、南北の柱間は北から1.4m、2.5m、2.5m、2.1m、1.4mとなり、北側と南側が少し狭い。この狭い南北両側のはり出しを建物の庇とみると、真中の3間が母屋となり、南北3間、東西4間の母屋を想定することができる。建物跡の東側を除く三方が調査区外へ出たり、河道の砂地のため柱穴がよくわからなかつたりで、確実なことはいえないが、南北二方に庇がとりつく一母屋二庇構造の建物跡と思われる。

個々の柱穴はSB-1やSB-2のものとくらべるとかなり小さく、径25~35cm程度を測る。埋土は一様でなく、また後に述べる河道埋土にうがたれた柱穴の埋土は判別しにくいが、いずれにしろ前二者の建物柱穴と比べてやや色調の淡い茶褐色砂質土ないし細砂質土である。

SP-42のすぐ北東に接して検出したSP-43は、径30cmのごく浅いビットであるが、完形品に近い瓦器碗の大きな破片(図32-14)が出土した。およそ13世紀ころのものと思われる。その位置関係からもSB-3の時期を考えるうえで関連深い資料となる可能性がつよい。

(2) 土 坑

SK-1 (図13)

SB-2とSB-3の間の南寄りで土坑を1基検出した。長径1.9m短径0.9mを測る不整形な楕円形を呈し、深さは北端部が最も深くて約27cmを測り、南へ向かってなだらかに浅くなっている。埋土からは平安時代前期に比定できる須恵器・土

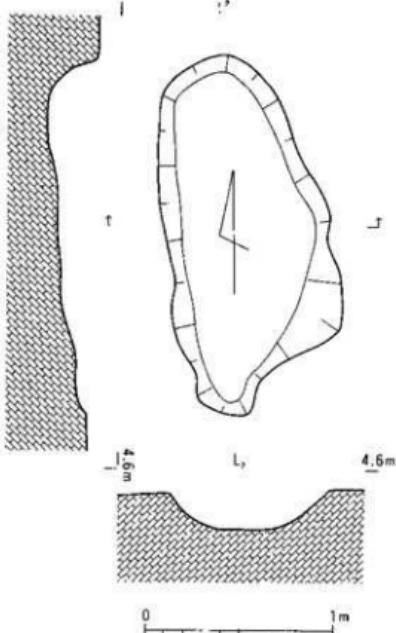


図13 SK-1 実測図

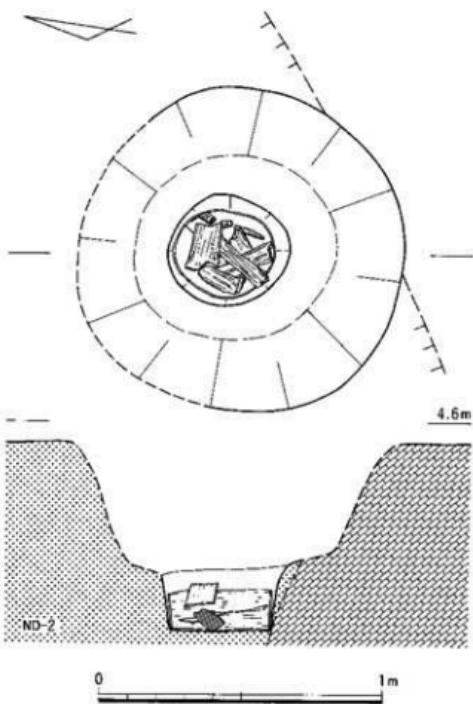


図14 SE-1 実測図

師器が多数出土しているが(図32 17~28)、無秩序な出土状態で完形品は無く、おそらくSB-1ないしSB-2にともなうゴミ捨て穴ではないかと思われる。

(3)井戸

SE-1 (図14)

SB-2の北西、SB-3の北東の調査区北壁沿いで検出した。ただ、自然河道(ND-3)の堆土を掘り込んだものであるため、複雑な様相を呈する河道の堆積砂の中でこの遺構の上面を確認することができず、上層遺構の調査を終了して中間層機械掘削の後、検出面を清掃する過程で遺構下部を検出し、急遽調査を行った。

改めて上層遺構検出時の写真

を点検すると、ほとんど粗い砂質土からなる河道埋土中の当該地点に直系1.2m程度のシルト質らしい部分があるので、上層遺構面から掘り込まれていることは間違いない。

検出した面では、直径40cmのはば正円形を呈するピット状で、小礫混じりの粗砂を埋土とする。そこから若干掘り下げると掘り方いっぽいに径36cmの曲物が埋設されており、内部からは拳大の礫や木片とともに鎌倉時代の瓦器碗・土師器皿が出土した。この曲物が出土した時点でようやく井戸であることが判明したわけで、素掘り井戸の底に設置した水溜め部分のみを検出したことになる。

検出面から曲物の底までの深さは20cmで、上層遺構面からの深さでいえば約70cmを測る。鎌倉時代の遺物が出土していることからみて、SB-3の存続期間に使用された井戸ではないかと思われる。曲物の大きさは直径36cm、深さ15cmをはかり、スギ材でつくられていた。

井戸掘り方の南側はND-2の南岸にはば接しているが、河道埋没後の伏流水を汲むのに

絶好の位置を選んでいると言つてよい。

(4)溝状遺構(図9)

上層遺構面では、多くの柱穴・ピットとともにその間を縫うように走り切り合う溝状遺構も多数検出した。いずれも幅30cm以下、深さ10cm以下の小規模なもので、ほとんどは途切れ途切れの中途半端な遺存状態である。

遺構に伴う遺物も少なく、それぞれの溝の時期や性格を明らかにするのは難しい。

SD-1

SD-1は幅20cm、検出面からの深さ5~7cm程の細い溝で、調査区南寄りで東西方向に18m程度一直線にのび、SD-2のすぐ東側で南へ直角に折れて調査区外へ出る。上層遺構として他の遺構と同一面で検出したが、実のところこのSD-1はさらに新しい耕作面の段差に伴う個溝(排水溝)である。柱穴や溝などすべての遺構を切り込んでいることから、上層遺構のなかで一番新しいものであることは多言を要さないが、それは土層断面の観察からも裏付けられた。つまり、調査区南壁(II面)・南西壁(III面)の断面で、上層遺構面の上を覆う第3層と第4層を切り込んで一段低い耕作面(水田面)が造成されていることが判明したが、SD-1はその段差の下にある。

実際SD-1より南側においては、その北側の検出遺構面と同一レベルでSD-1の走向と同じ東西方向を示す多数の耕作痕がみられ、それより5~8cm下がった面でようやくSP-15・13・17・41やSD-2・3・4・11を検出した。これは、南側の遺構面がわずかに下がっていたことを示し、耕作面造成にあたって遺構の上部が削平を受けたことは明らかである。あるいはこの造成面は、自然河道ND-2埋没後の陸地を、切土・盛土を伴う地ならしによって耕地化した結果とみることもできよう。

SD-2~5・7~14

SD-7を除いてすべて南北にのびる小溝で、犁溝や畝の谷部、また水田の排水溝など何らかの耕作に関連する遺構であろう。そのうちSD-2~4はN12°Eの同一方向をもって1.5~1.7mの間隔で並列し、畝の谷部になる可能性が高いようと思われる。また、SD-5・8・9もほぼ真北の方向をとりつつ約1mの等間隔で並列するので、前者と多少の時期差があるとしても同様な畝谷部と思われる。SD-7は、SD-5・8・9と直接交差しないものの方向的にはほぼ直行し、それらと同時期、同性格のものではないだろうか。

SD-5・7がSB-1のSP-67・63を、SD-8がSB-2のSP-1を切り込んでいることから、後者の4本の溝がSB-1・2より新しいことは確実で、また前者の3本は建物との切り合いはないものの、SD-4がSB-1の東柱列に接近しすぎている点をみれば、ともにSB-

1・2の掘立柱建物廃絶後の耕地化に伴うものと考えてよいであろう。ただSB-3との関係については、SD-5・8・9とSD-6の位置関係から共存すると考えにくいものの、この3本の溝の方向がSB-3の南北軸とほぼ一致する点も気にかかる。一方では、同じくこの3本の溝の方向はSB-2の南北軸とも近似する方向を持ち、さらにSD-2～4はSB-1の南北軸と似た方向を示している。これらのことにもらかの意味があるのか無いのかよくわからず、結局はこれらの小溝について平安時代中期から鎌倉時代の広い年代幅を考えておかざるを得ない。

南北溝のSD-10とSD-11は、約9m離れているものの一直線上に乗る位置にあり、本来一本の溝であったかもしれない。方向はSD-5・8・9とほぼ一致し、SD-5とSD-8の中間を占める。

SD12～14は、以上の溝に比べて40～50cmとやや広い幅をもつが、深さは10cm以内とかなり浅く、長さも4mを越えない。3本ともSB-3と重なる位置にあって南北方向に平行するが、N4°WとSB-3の南北軸よりやや西へ振っている。SB-3廃絶後の耕作に伴うものであろう。

SD-6（図15）

SD-6は調査区中央部北寄りで検出した。北壁に沿う部分で東西方向から南へ曲がり、南に7m続いたあと再び西へ直角に折れ、3m伸びてさらに南へ屈曲して止まる。幅は平均20cm程度、深さも7cm程度と細く浅いものであるが、南北および東西に直線的に伸びる部分は西側に接するSB-3の柱通りに方向を同じくする。

その掘削時期については、平安時代前期と推定したSB-2の柱穴であるSP-6を明確に切り込んでおり、そのSP-6と切り合うすぐ西で13世紀頃のものとみられる土器皿の光形品（図33～40）が出土していることから、SB-3やSE-1と時期を同じくする鎌倉時代のものとみてよい。

SB-3、SE-1と密接に関連する溝とすれば、SB-3の北東側に井戸（SE-1）を含んで設けられた作業スペースを画する溝とも思われる。

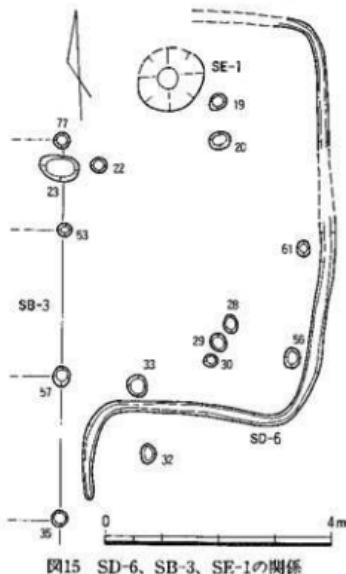


図15 SD-6, SB-3, SE-1の関係

れる。とすれば、SP-19・20、そしてSP-28・29・30などSD-6に囲まれた範囲にあるビットは、関係遺構になる可能性も考えられる。

(5)ビット(図9)

SB-1・2・3の周囲で、30個余りのビットを検出している。いずれも建物としてのまとまりをもたず、多くは径20~40cm程度の小さなものである。また遺物の検出も少なく、時期や性格は明らかにし難い。

(6)自然河道(図9)

ND-1

調査区の北東部を東西方向に横切る自然流路である。検出長は約10m、幅は平均3.5cm程度を測る。上層検出遺構より若干高いレベルで検出しており、土層断面観察の結果、微妙ながら4層を切り込んで3層が上に被っていることがわかった。つまり、SD-1を除く主要な遺構が廃絶した後の河道ということになろう。

4層上面の肩部からの深さはおよそ50cm程度で、底面は凹凸著しいものの極端に浅いところや深いところはない。埋土は極めて複雑な様相を呈し、主として指先大程の小礫を主体とする砂礫層や粗砂層が多く、部分的に細かい砂層やシルトの薄層もみられる。

ND-2

調査区北部で検出した自然河道である。あまりに湧水が激しいため全掘を断念したので、幅や深さは計測していない。調査区北壁から西壁にかけてゆるやかな弧状をなす南肩を検出しており、その延長線上にあたる調査区北東地区北西隅の壁面にもND-2の一部とみてよい砂層がある。しかし北調査区ではまったくその痕跡がみられないで、北調査区との間の未掘部分に北側の岸があることになり、とすればその幅は5m程度ということになる。

埋土は灰色の粗砂が主体で、その最上部には人頭大のシルトブロックを顕著に含む部分があり、最終的には人為的に埋められた可能性がたかい。また調査区西端近くでは南岸壁面が大きな土塊状に崩落しており、後に述べる中層遺構の大畦畔の一部や下層遺構の竪穴住居址(SA-101)の北半を、この河道が抉っていた様子がうかがえる。

遺物の出土はほとんどなく、ローリングの著しい弦生土器が若干量出土したにすぎず、存続時期の決め手を欠く。鎌倉時代の掘立柱建物(SB-3)は明らかにND-2埋没後の整地面に越てられており、また同時代の井戸(SE-1)もやはりND-2の埋土を掘り込んで造られていることから、13世紀頃には完全に埋まっていたことは確かである。つぎにSB-1・

2との関係についてみてみると、SB-2北西角のSP-21が河道南岸に接近しすぎているくらいがある。このことから同時存在は考えにくい。完全な埋め立てが行われていたかどうかまではわからないが、すくなくとも平安時代前期には川としての機能が失われていたのではなかろうか。

ND-3

調査区南部で検出した自然河道である。これもあまりに湧水が激しく企掘を断念したので、その幅や深さはわからない。およそ東から西へ流れていたものとみられるが、検出した北岸ラインは北へ膨らんで緩やかな弧状をなしている。この河道は本調査に先立って行われた試掘調査で確認され、今回調査対象から除外されたのであるが、試掘トレンチの西端部に対岸が現れていないところをみると、その幅は8mを越えるものと思われる。

埋土は、岸近くの斜面部分ではシルトや微砂の堆積がみられるものの、全体的には極めて均質の暗灰色細砂からなる。この土層にはほとんど遺物が含まれておらず、わずかに出土したものの中に黒色七器や須恵器（図37-113～115）があることから、ND-3の存在時期は平安時代中期頃まで遡る可能性が考えられる。しかし、SB-3が建てられた鎌倉時代には機能しておらず、上部の整地を受けたものと思われる。

ND-4

全体図の中では破線でしか表現できていないが、北調査区の北壁に自然河道の一部がかかっている。埋土は均質な灰色細砂で、時期、規模は不明である。

4 中層遺構

下層包含層（第8層）を覆う灰色ないし灰黄色のシルト質層（第7層）上面で水田遺構を検出したので、これを中層遺構とする。

(I) 水田遺構

中間機械掘削に先立つサブトレンチの七層断面観察から、シルト質の第7層上面に異常な凹凸があることと、調査区西壁の第8層直上にみられる暗茶褐色粘土の不可解な盛り上がりについて解釈に苦しんでいた。そして、機械掘削終了部分から検出面を清掃していく過程で、幅30～40cmで直線的に続く帯状の低い高まりがあるのに気づき、また細かく複雑な凹凸が人間の踏み荒らしたものと思われたため、これらが水田遺構ではないかと考えにいたった。しかし、残念ながらこの時点で既に第7層の一部を除去し、下層包含層である第8層の上面検出を始めていたので、調査区内の水田遺構全景を撮影することはできず、適宜検出した大畦畔・小畦畔を全体図に記入するにとどまった。（図16）

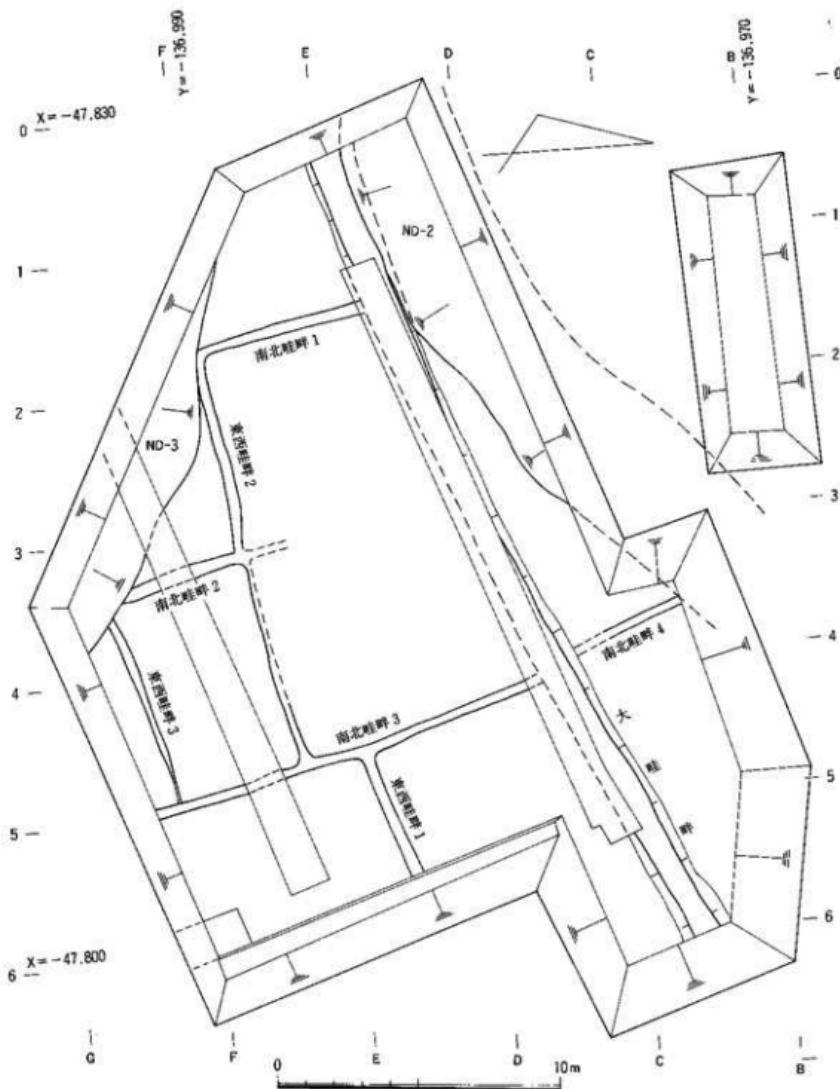


图16 中层遗构平面配置图 (1/200)

全体図をみると、北側の試掘トレントと重なるように大畦畔が東西に伸びているのがまず目につく。これは西部でわずかな湾曲を持つようにみえるものの、ほぼ直線的に調査区を東西に貫き、西端部においては自然河道ND-2によって一部抉られている。幅約1.8m、高さ約50cmあり、畦畔というより小規模な道路状遺構という方があたっているかもしれない。築土はいずれも極めて締まりの強い土で、西部では暗茶褐色の粘質土、東部では同系統の色調を示しつつやや砂質分を含む。

この大畦畔の両側には小畦畔で大小に割付けられた区画が展開する。便宜上、南北方向をもつ小畦畔のうち大畦畔の南側のものを西から南北畦畔1～3、大畦畔北側のものを南北畦畔4、東西方向のものは南北畦畔3と直行して東へのびるものを東西畦畔1、南北畦畔1と3を結ぶものを東西畦畔2、その南側で南北畦畔2と3の間のものを東西畦畔3とする。いずれも幅30～40cm、高さ3～4cm程度と残りがわるく、よほど注意しないと発掘過程で削りとばしてしまいかねない。

南北畦畔は1と3が大畦畔にとりつき、北側の4も3の延長線上にあって大畦畔に接続するようであるが、南北畦畔2については東西畦畔2と交わる部分より北にのびていたのかどうか不明である。他の部分では小畦畔が直行して四方へ伸びるところはなく、小畦畔の交点はどれもT字形をなしているので、南北畦畔2も大畦畔と接続するところまでは統一ていなかったかもしれない。もしそうとすれば、南北畦畔1と同3の間隔は約15m、大畦畔と東西畦畔2の間は西端で6m、東端で8.5mを測り、この一区画の水田面積は127.5m²でかなり大きなものとなる。それに対して東西畦畔2と3、南北畦畔2と3に囲まれた一区画は面積33.8m²程で、前者の4分の1強にすぎない。その他の区画は、四隅のいずれかが河道で抉られるか調査区外になるため面積が判明しないが、ほぼこの両者の間の数字に収まるものとみられる。

5 下層遺構

第9層、淡灰色粘質土上面で下層遺構を検出した。弥生時代中期後半（畿内第IV様式）と同後期末～古墳時代初頭（庄内式併行期）の二時期のものがある（図17）。

〔1〕弥生時代中期後半の遺構

(I) 壁穴住居址

SA-103（図18）

SK-102の北西側、調査区北壁に近いところにあるSP-118・132・189とSK-105の4つの柱穴は、それぞれを結んだ線が辺3m前後のほぼ正方形となり、その中央にSK-106があ

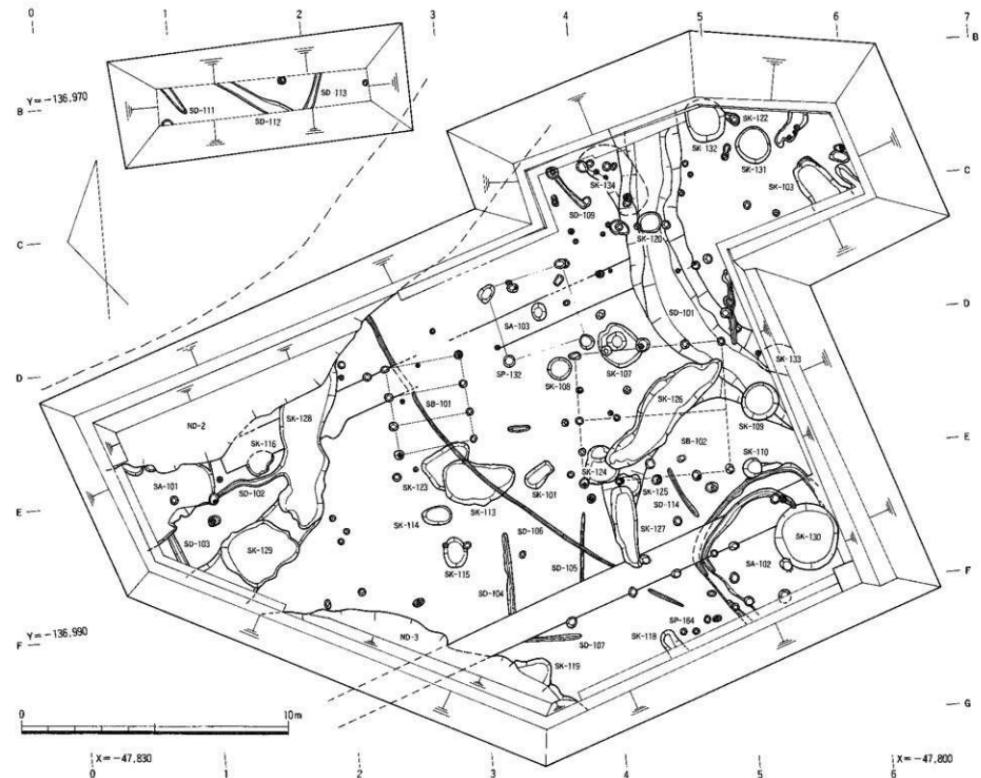


図17 下層造構平面配図 (1/150)

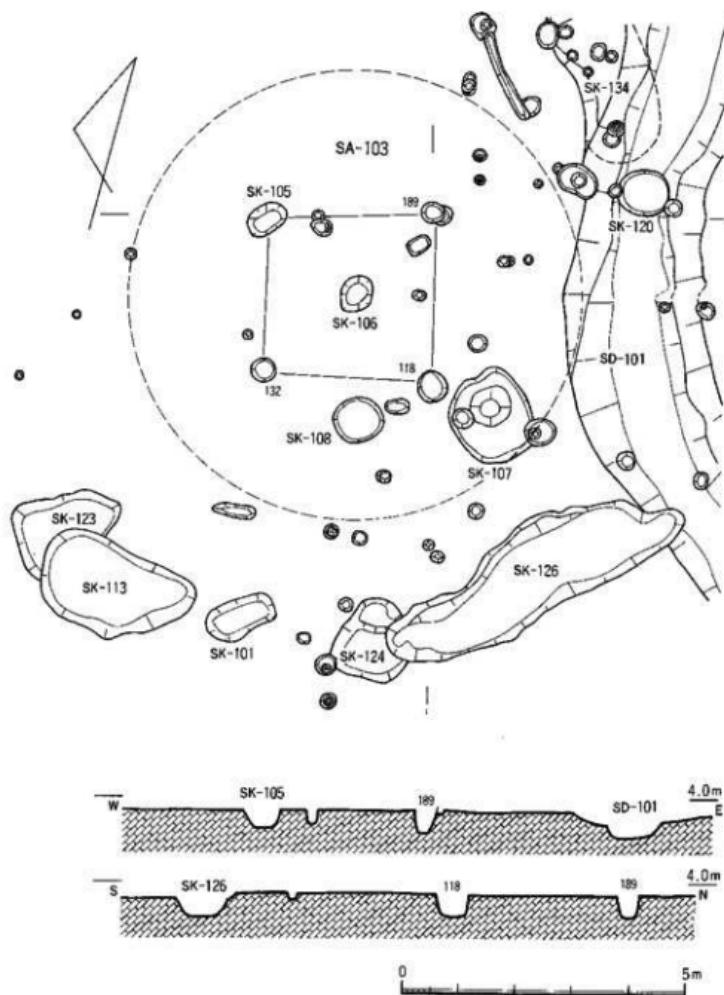


図18 SA-103推定復元平面図と周辺の土坑、溝状遺構との関係

る。遺構上面検出当初、一間四方の掘立柱建物と考えていたが、SK-123・113・124・134など不整形な浅い土坑が先の4つの柱穴とはほぼ等距離で弧状に並ぶ状況は、後述するSA-101・102を取り巻く土坑群と極めて類似する。また、それらの柱穴と土坑はあたかも竪穴住居の4本柱と中央土坑の関係にあるようでもある。そこで、これらの柱穴と中央の土坑は竪穴住居の上部が削平されて周壁溝の痕跡も残らないが、床面より下に掘り込まれた柱穴などが残ったものであろうと推定した。

SK-126については、基本的にSA-102に伴う土坑の一部であるが、その西端が不自然にSA-103の方へ屈曲しているように見える。これらの浅い土坑は、検出時の輪郭が不整形かつ不鮮明で、場合によっては複数の遺構が切り合っているかもしれない、まったく切り合いを明確にできなかったが、SK-126はSA-102とSA-103の外周の土坑が切り合って合体している可能性も捨てきれない。

なお、弥生中期の遺構として後に述べるSD-101の検出北端部で、西岸側が不自然に張り出してテラス状となることを不可解に思っていたが、これもSD-101の西側肩を切り込んだ落ち込み(SK-134)があるのであろう。おそらくこれも、SD-101の上面検出段階では明確に分離できなかったものの、SA-103に伴って外周をとりまく土坑とみることができよう。

このSK-134とSK-123・113の間隔は11.3mを測り、そのほぼ中央に先の5つの柱穴と土坑がある。この位置関係から推定して径6.5m前後の円形竪穴住居址を想定することが可能である。

削平を受けているために、当然ながら住居に伴う遺物などないが、主柱穴と考えられる4つのピットのうちの1つSP-132から弥生時代中期に測る高杯脚柱部(図43-185)が出土している。さらに遺構の切り合い関係からSD-101の埋没後につくられたことは明白であるので、住居の時期を弥生中期末頃に考えておきたい。

(2) 土 坑

SK-103 (図19)

南調査区北東地区で検出した。南側が調査区外に出るが、検出部の平面形は北西-南東方向に軸をもつ略長方形を呈する。検出長2.12m、最大幅1.22m、深さ50cmを測る。西壁が垂直に近い角度で掘り込まれており、土壤墓の可能性も考えられる。

出土遺物はそれほどまとまったものではないが、ほとんど弥生時代中期後半(畿内第IV様式)のもので占められている。(図42-156-165)

SK-107 (図19)

SK-126の北、SD-101の西で検出した。平面形は長径1.6m、短径1.4mほどの略円形で、

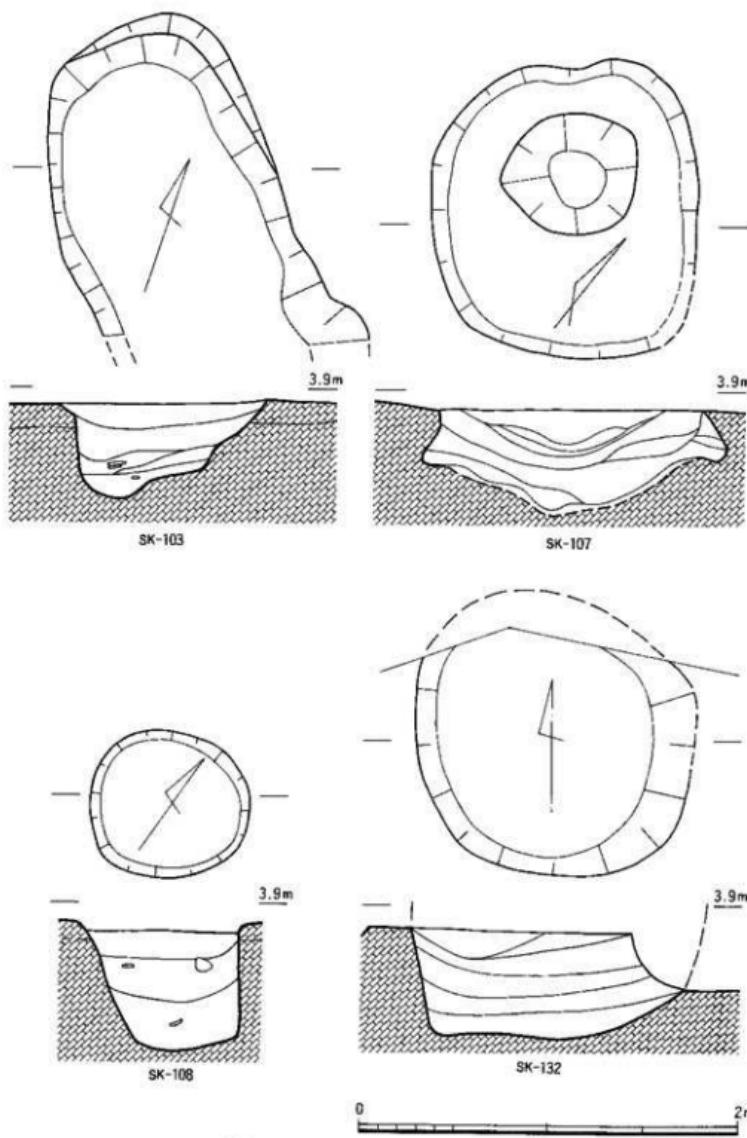


図19 SK-103・107・108・132 実測図

その埋土を掘立柱建物SB-102に伴うSP-117とSP-244が切り込んでいる。周囲の壁面は高さ30cm程にわたってほぼ垂直に掘られていたが、検出面である粘土質の第9層(厚さ10~15cm)の下の第10層が豊富に水分を含んだ砂であるために小さく崩落したとみえ、オーバーハング状態をなす部分が多くあった。底面はすり鉢状をなし、防水のためかあるいは水を溜めるためか、第9層と同質の淡灰色粘土を丁寧に貼っていた。この粘土面の最深部で、検出面からの深さ55cmを測る。

調査の最終段階にはこの粘土面を断ち割って下部の構造を確認する予定であったが、大量の湧水によって壁面の崩壊をきたし、地盤の影響もあってその作業を断念したため、不本意ながら最終的な確認ができていない。しかし、入念な粘土の塗布状況からは、その粘土面より下に複雑な下部構造があるとは考えにくく、第10層の砂層に直接粘土を貼った可能性が高い。

出土遺物は弥生時代中期後半(第IV様式)の土器(図43 176・177)で、量的には少なく、なかに小片ながらSD-101検出のものと同一個体と思われるものがあった。

SK-108(図19)

SB-102北西端の柱穴であるSP-119のすぐ西側、SK-107からも西へ1.2mのところで検出した。直徑80cmのはば円形を呈し、深さ70cmと直徑に匹敵する深さをもつ。壁面は垂直に近い角度を持ち、底面もかなり平らに造られていることから貯蔵穴の可能性がたかいが、隣のSK-107と比べて形態や構造にかなりの違いがあり、貯蔵穴としてもまったく別の目的で使用したものであろう。

出土遺物としては、弥生時代中期後半(第IV様式)に比定される土器を少量検出した(図43 173~175)。

なおSK-107とSK-108は、SA-103の竪穴住居推定範囲と重なり、存続年代も比較的近いと考えられるので、前後・共存等の関係についても若干考慮しておかねばならない。この点、SK-107はSA-103の主柱穴の1つであるSP-118と接近しすぎ、また住居内部に造ったものとしてはかなり大きく、推定範囲からはみ出し、両者共存は考えにくい。それに対して、SK-108の方は位置的にもその規模からも、SA-103の屋内施設として設けられたという可能性が充分考えられる。

SK-109(図20)

SA-102の北東、SD-101の検出部南端でその埋土を一部切り込んで造られている。平面形は直徑1.3mの円形で、検出面からの深さは47cmを測る。これも貯蔵穴かもしれないが、性格はよくわからない。

出土遺物はやはり少なく、弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器が出土している。(図

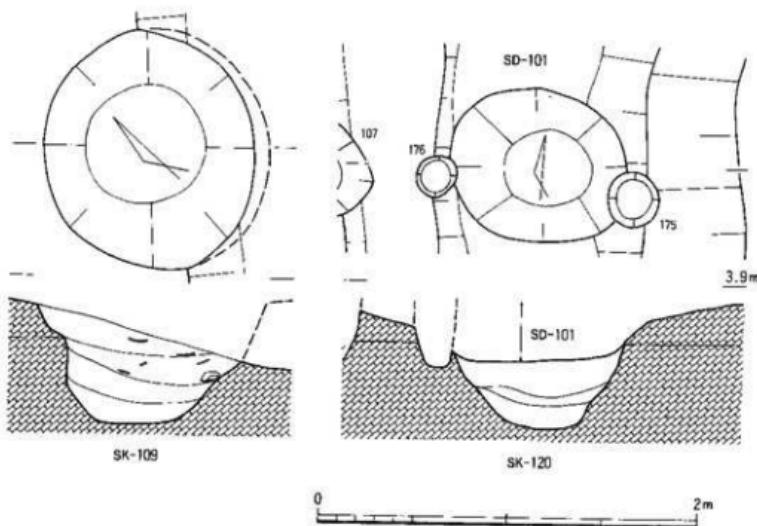


図20 SK 109・120 実測図

42 166~172)

SK-120 (図20)

SD-101検出部北半の底で検出した。SD-101上面検出時にはまったく確認できておらず、後に写真を検討してもそれらしい痕跡を見出せないので、SD-101に先行して掘られたと考えられる。底に近い部分しか残っていないが、検出平面形は長径90cmのやや楕円形をなし、SD-101肩からの深さは70cmを測る。

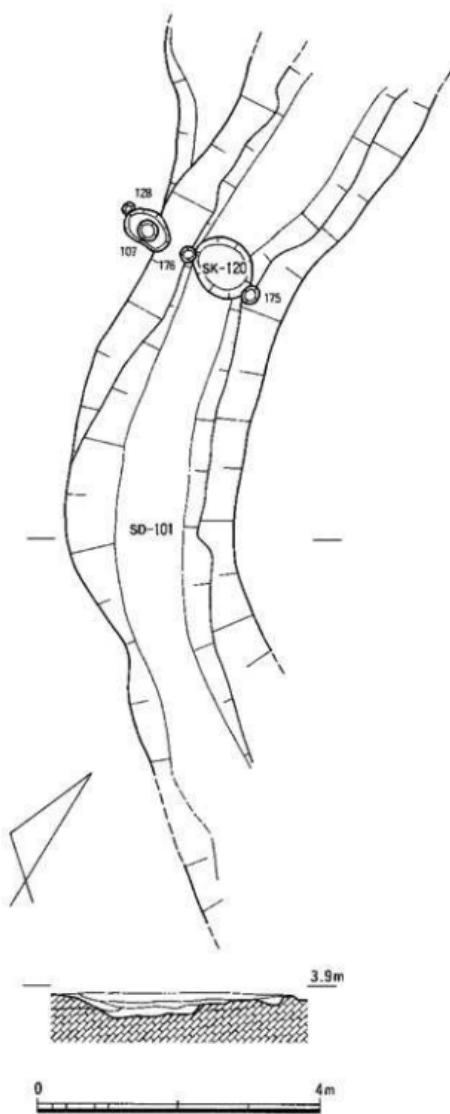
遺物は極めて少なく、弥生時代中期の甕（図40 136）が出土している。

SK-132 (図19)

調査区の北東部で検出した。北端の一部が調査区外となり、SK-122によって部分的に肩を失っているが、およそ1.4mの円形の平面をなすものと思われる。検出面からの深さは最大58cmで、壁面は直立に近く、底面は比較的平らにつくられている。

埋七は、最上部の西寄りに第9層起源の灰色粘土をブロック状に含む層があり、その下は部分的に粘土質をおびる黒色系土層が互層をなす。

遺物としては、埋七中より弥生時代中期後半の土器片が若干出土しているが、尖端に耐えるものはなかった。また最深部から少量の木片を検出した（表2 402~405）。



(3)溝状遺構

SD-101 (図21)

調査区東部で検出した。北から南へのびゆるくカーブを描いて南東方向へ向きを変える。最大幅2.46m、深さ平均30cm、検出長約14mを測り、底面の形状はだいたい緩やかなU字レンズ状断面をなすが、カーブの部分では1.2mとやや幅広の平坦部をなす。

堆土は大きく上下2層に分けることができ、上層は黒褐色砂質系の土層で、弥生時代中期後半のものを中心として多くの土器片が出土した(図40・41 124~135・137~155)。下層は暗灰色から黒灰色のシルトないし砂混じり粘土で、遺物は極めて少なかった。

土層断面の観察では明確な流水痕跡はみられないでの、用排水用の水路ではなく何らかの区画溝と思われる。検出した弧でもって円を描くと直径15mほどになり、場合によってはSK-103を取り巻く周溝の一部と見ることもできる。当調査地の東200mの第4次調査地において円形周溝墓などが検出されていることを考慮すれば、墓域の広がりを検討するうえで意味をもつものと思われる。

図21 SD-101 実測図

(2) 弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構

(1) 穴住居址

SA-101 (図22)

調査区西端部で検出した方形堅穴住居址である。ただ、北側はND-2によって抉り取られ西側は調査区外となるので全容は判明しない。

周壁溝は無いが柱穴が2ヶ所あり、その2つを結ぶ線が住居南周壁線とほぼ直交する方

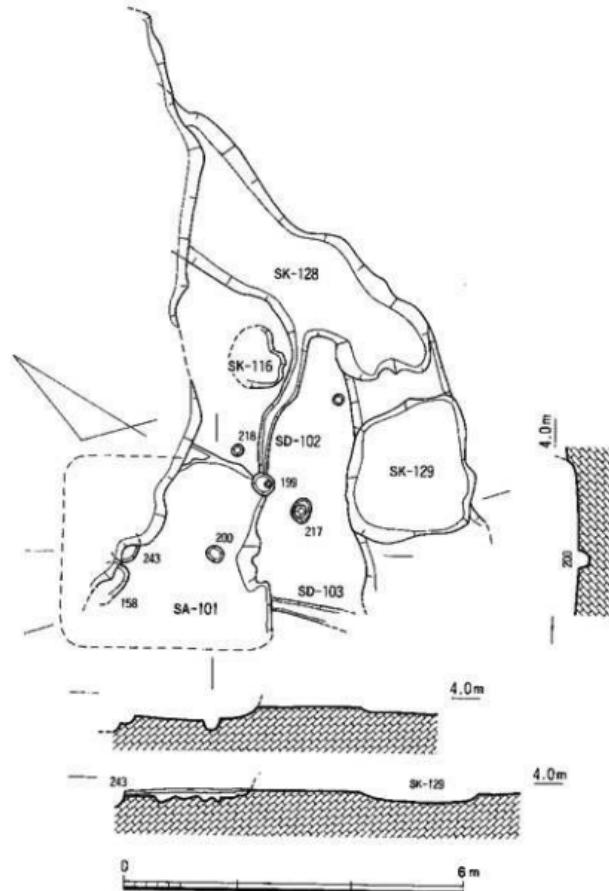


図22 SA-101と周辺の土坑、溝状遺構との関係 (1/100)

向を持つので、ともに主柱穴を構成するものである可能性がたかい。しかし、南側柱穴と南・東側のそれぞれの周壁との間隔をみると南側が90cmに対して東が1.5mとかなり広い。この周壁線と柱穴のバランスからいうと、4本の主柱で構成されるものなら東西に長い長方形の住居址ということになり、そうでなければ2本柱の小型住居址の可能性もある。いずれとも決し難いが、ここでは一応後者と仮定して図中に推定復元線を記入した。それは2つの柱穴を軸として南と東の周壁線をそれぞれ北と西に反転したもので、その結果南北3.7m、東西3.4mの方形に復元できた。

住居の外には、東側のSK-128、南東側のSK-129と、共に浅い落ち込みがあり、その間とSK-129につづく南西側も少し陥んでいて、あたかも竪穴住居をとりまくように一連につながった溝状の様相を呈している。この外周の土坑群ともいるべき施設は先のSA-103や次に述べるSA-102にもみられ、その性格として、集落そのものの立地が低湿地であるので、住居の湿気対策などがあげられるが、本来の機能については今後の課題として残されよう。

住居本体と溝状につながった土坑との間隔はおよそ2~3mあり、あるいは溝状に掘り上げた残土を盛り上げて「外堤」としていたかもしれない。さらにここには、住居本体と外周の土坑をつなぐ幅25cm程度の細い溝が2本設けられている。すなわち住居南東角から東へのびるSD-102と南辺西寄りから南へのびるSD-103で、排水溝として掘られたものであろう。

床面には原位置で残る遺物はまったく無かったが、床面直上で出土した比較的大きな土器片は、いずれも弥生時代後期末から古墳時代初頭とされる庄内式併行期のもので、およそこの頃に造られた住居とみてよいであろう。

SA-102（図23）

調査区南東隅で検出した竪穴住居址で、竪穴の壁が残らないまでに削平されていて隅丸方形の周壁溝が二重に検出された。小さい方をSA-102-1、大きい方をSA-102-2とする。住居址の南東側がどちらも調査区の外に出、全体の規模は不明である。しかも発掘床面積は、SK-130が切り込んでいることもあるって全体の2分の1ほどしか検出できなかったと思われる。南北軸が約40°北から西へ振っており、東西南北に対角軸をもつ。

SA-102-2の周壁溝は、北辺から西角にかけてが試掘トレンチによって一部削平されているが、東辺と西辺の対辺間は5.45mを測る。また西辺で1.2m程周壁溝の途切れる部分がある。溝延長線上にわずかな段差が残っており、おそらく入り口がつくられていたのである。柱穴は住居址内から9ヶ所検出されたが、そのうちのSP-150・227・211・の3本の位置関係が外側周壁溝とよく釣り合い、東側にもう1つの柱穴を想定すれば、4本柱で5.5m四方程度の隅丸方形住居が復元できる。検出面からの深さは深いところでも数cmたらず、

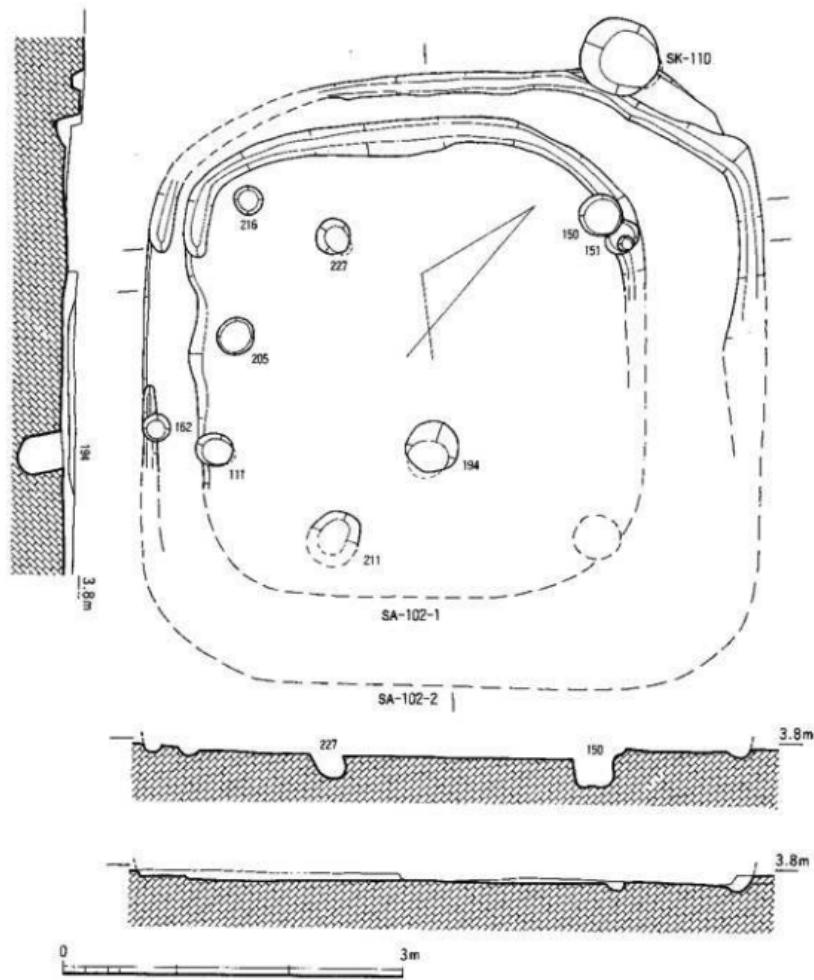


図23 SA-102 実測図

浅い部分では検出面とのレベル差がほとんど無いに等しく、明らかに上部が削平されている。

SA-102-1はSA-102-2の西寄りに完全にはまり込む形で検出された。周壁溝はやはり南から東側の半分を失い、東辺と西辺の対辺間の距離は4.55mである。北辺—南辺も同程度

の長さとすれば、かなり小さい隅丸方形住居に復元できる。西辺では1.25m以上にわたって低い段差があるだけで周壁溝がなく、SA-102-2同様に入口が設けられていたと考えられる。外側の周壁溝と内側の周壁溝は切り合わないものの、内側のものがかなり西に寄っており、北東辺では約80cmの間隔があるのに対して西端の角部分ではほとんど接するまでになっている。この住居に見合う柱穴については検出されなかった。床面のレベルはSA-102-2よりわずかに低く、それでも深い部分で検出面から10cmたらずにはすぎない。

埋土は、全体に9層起源の灰色粘土を小ブロック状に含む黒褐色粘質土で、検出面からの深さが浅いことと2つの住居床面のレベル差が極めて少ないこともあって、畦断面の観察でも両者の切り合い関係がもうひとつはっきりしなかった。しかし常識的にみて小から

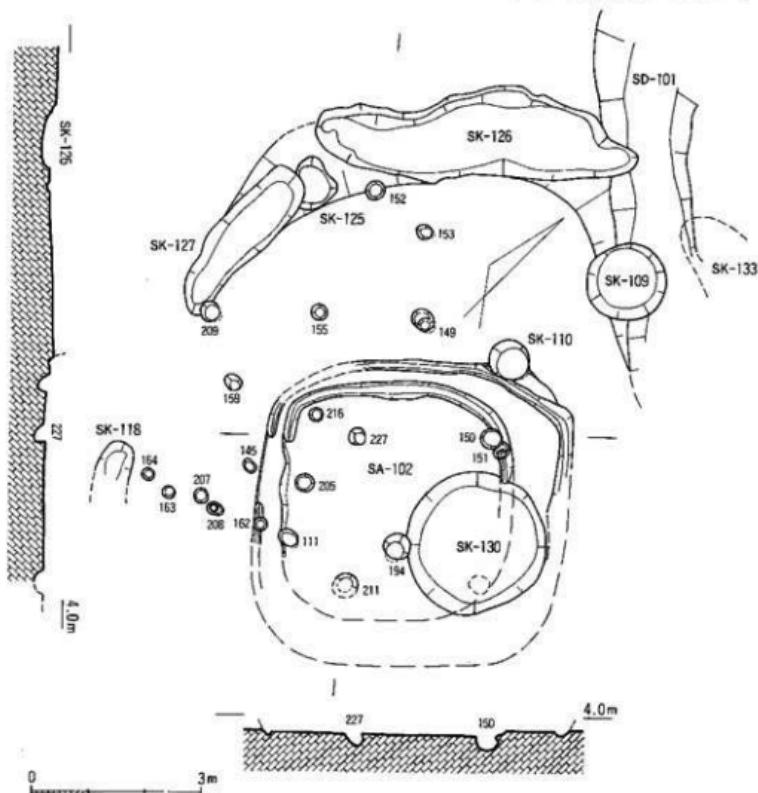


図24 SA-102と周辺の土壤等との関係 (1/100)

大への拡張による建て替えとする方が自然であるので、SA-102-1が先行するものと考えておく。

一方、住居址の北側から西側にかけて、先のSA-101でみたのと同様にSK-126・125・127・118といった浅く細長い土坑がならぶ。さらに平面図には表れないがSK-126東側の東壁に七坑状の落ち込み(SK-133)が確認されるので、これも合わせてSA-102の外周を取り巻く土坑群を構成するものと考えられる。これらの七坑については、土坑の頃で後述するように、本来は一続きの溝として掘られたものの上部が削平され、深い部分が細長い七坑として残ったものではないかと思われる。ただ西側のSK-127とSK-118の間は、約2.6mにわたって溝が途切れている。そのすぐそばに住居の入り口と見られるところがあるので、それに対応して陸橋状に溝の途切れる部分であったのかもしれない(図24)。

この住居の存続時期については、両住居に伴うと思われる遺物が皆無であったので確実なことは言えない。ただ、これらを切り込んで掘られたSK-130の遺物は主として古墳時代初頭頃(庄内式併行期)のものであるのでそれより古いことは間違いない、また方形竪穴住居の一般化するのやはり弥生時代後期から古墳時代初頭頃といわれており、SA-102が隅丸方形を呈することからやや古くあてることができ、弥生後期後半の範疇で考えておきたい。

(2)掘立柱建物

SB-101(図25)

SA-101の東側で検出した。約2.8mの間隔をもって東にSP-126・134・135・136、西にSP-130・131・138・128と4本ずつ柱穴が並び、梁間1間×桁行3間の建物を構成する。東西の四つの柱穴の間はどれも約1.1mで、南北の桁行長は3.3mを測り、桁行の柱間に比べて梁間の柱間が異常に広い。柱穴はすべて径25~30cm程の円形で、深さは検出面から30~40cmである。

柱穴からの遺物が極めて少なく、遺構の切り合い関係も見当らず、建物の年代は決めがたい。SA-103やSB-102との位置関係や第8層に含まれる遺物の下限から、弥生時代後期から古墳時代初頭の間で考えておきたい。

SB-102(図26)

調査区の中央東寄り、SA-102とSA-103の間で検出した4間×4間のやや大型の掘立柱建物である。

SA-102の北側から西に向かって、SP-147・148・154・167・156の5本の柱穴が一直線上に並び、それに対応してSP-119・244・117・169・191の5本の柱穴がある。両柱穴列は約

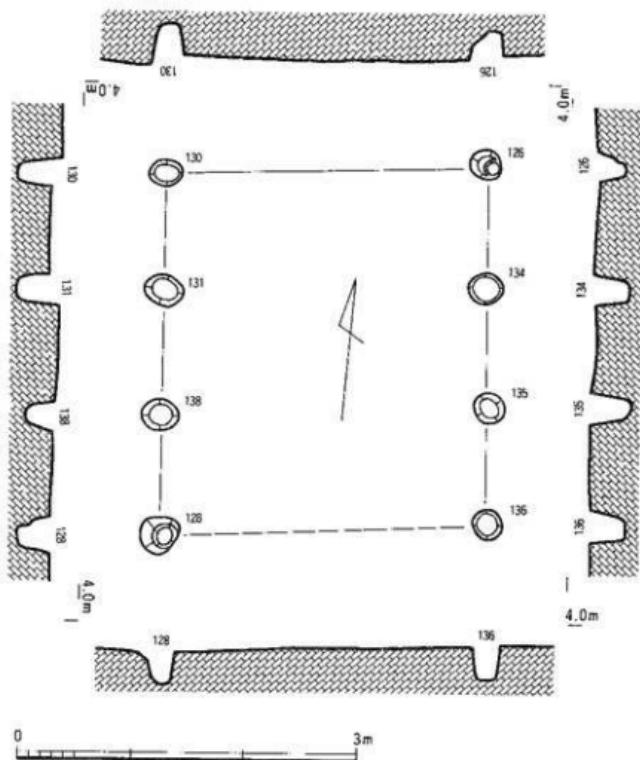


図25 SB 101 実測図

4.8mを隔てて平行し、ともに東西長5.5mを測る。それぞれの柱穴の間隔は1.3~1.5mである。また両列の中間に、東列にあたる柱穴を確認できていないが、西列はSP-119とSP-156を結んだ線上にSP-121・122・245が等間隔にならび、中央のSP-122の東側にSP-224がある。また、SP-122の西に50cm程離れてSP-123があり、建物中央の棟通り線上の建物外側と考えられることから、いわゆる棟持柱の可能性が高い。

この建物の存続時期については、これも確実に伴う遺物がないので確定的ではない。周囲の遺構の切り合いや包含層との関係から判定すると、SP-117とSP-244は、SK-107の埋土を明確に切り込んで掘られていて、それより新しいことがわかる。またSP-169とSP-191はSD-101の斜面で、SP-167はSK-125の底で検出したが、それぞれの遺構の発掘前の写真

を検討すると、確実とは言えないもののその上面から掘られている可能性が大きいように思われる。さらにSB-102とSK-126が平面的には完全に重なっていることから、SA-102やSA-103と共に存しないとみてよい。以上の点から、SB-102は周囲のほとんどの遺構より新しいものと考えて大きな誤りはないであろう。ただ、その上を覆う第8層の遺物をみても布留式期まで下るものはないので、おそらく庄内式併行期の範囲内に収まる時期の建物としてよいであろう。

ちなみに、南側柱列のうちSP-148・167・156の3本の柱穴には柱痕の木質部が残り、SP

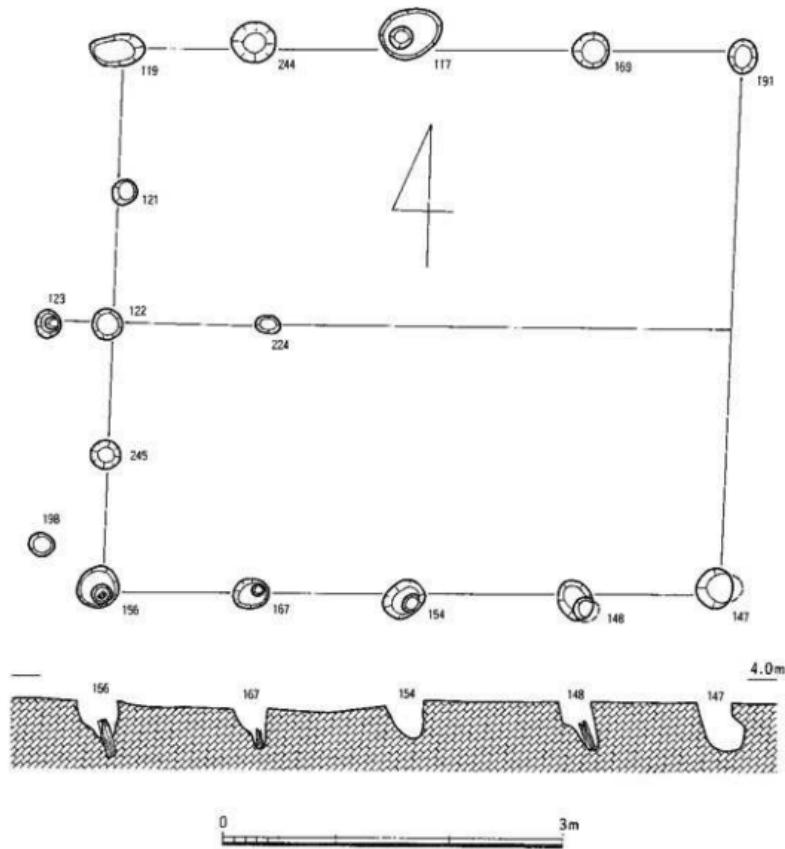


図26 SB-102 災測図

-147とSP-169からは木片を検出した(表2 412~416)。樹種同定の結果、すべてコナラ属コナラ節であった。

(3) 土 坑

SK-101 (図27)

調査区の中央部、SK-113とSK-124の間から検出した小ぶりの土坑である。北東一南西方に向く軸をもつ略長方形ないし角張った椭円形というような平面形で、長さ1.2m、最大幅66cm、深さ20cmを測る。

その位置は、先に述べたSA-103を取り巻く一連の土坑のようであるが、平面形が長方形に近く比較的深いこと、外縁が垂直に近い角度で掘り込まれていること、また上面で出土した遺物にSK-113やSK-123よりかなり新しいものを含むことから、単独の構造と見た方がよさそうである。規模がやや小さいものの、その形状からは上墳墓の可能性も捨てきれないように思われる。

出土遺物は多くないが、上面で弥生後期末頃の壺形土器などが検出されている(図47-256・257)。

SK-110 (図27)

竪穴住居址SA-102の北端部、外側周壁溝の一部を切り込んで掘られている。平面形は直径74cmの正円形で、深さ52cmを測る。切り合ひ関係からSA-102より新しく、位置関係からSB-102の付属施設としての可能性がたかい。

出土遺物がほとんどないが、弥生時代後期末から古墳時代初めと考えられる土器の小片

がわずかにみられる。

SK-119 (図28)

調査区の南端部にあり、河道ND-3のために半ば以上を失っているので全形はわからないが、長さ1.4m以上、幅1.1m以上のおおむね方形を呈するものと思われる。深さは最深部で検出面から28cmと比較的浅い。

古墳時代初頭(庄内式併行期)の土器が多く出土し

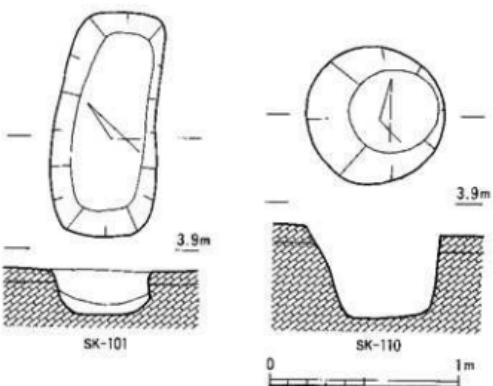


図27 SK-101・110 実測図

たが、いずれもボロボロに風化していた。無秩序な遺物の出土状況と、破片は大きいものの完形品やそれに近いものがほとんどないことから、廃棄土坑と考えるのが妥当であろう。
SK-128・129（図22）

SA-101の外周をめぐる浅い土坑群である。平面検出時は溝のように連なっており、特に深くなつた部分を対象に土坑として取り扱っているが、一連の溝状遺構となる可能性がつよい。南西側は調査区外、北側は自然河道ND-2によって切られていて、溝状に検出した長さは約9.5mである。幅は1.8m前後で比較的一定し、深さは最も深いところで20cmを測るが、SK-128とSK-129の間の浅くなつたところでも検出面から5cmある。弥生時代後期末から古墳時代初頭（庄内式併行期）の遺物を出土している。

SK-118・125・126・127・133（図24・29）

SA-102の外周を取り巻く土坑群である。特に、SK-125・126・127は検出時、先のSK-128・129と似たような状態で一連の溝状に確認した。これはSA-102を囲むように弧をえがき、おそらく溝の上部が削平されて深い部分が土坑状に残ったものであろう。SK-126の最も広いところで幅1.6m、深さは最も深いところで検出面から30cmを測る。

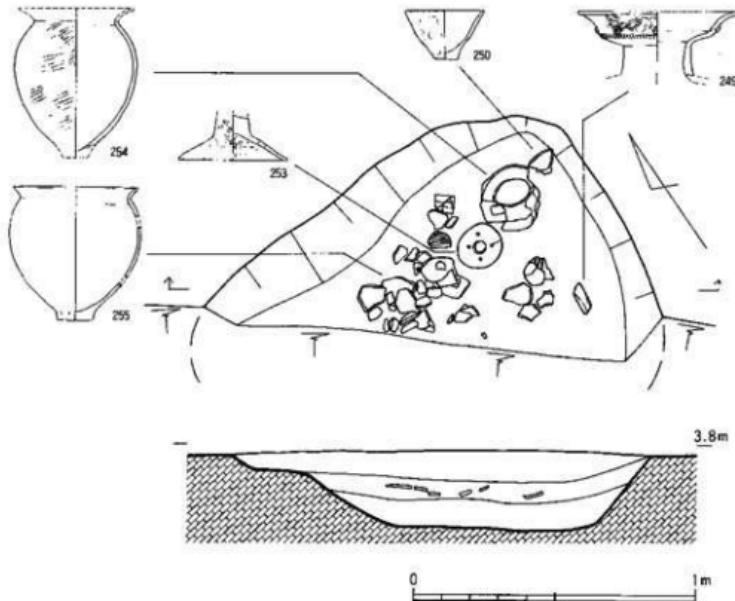


図28 SK-119と出土遺物の関係図

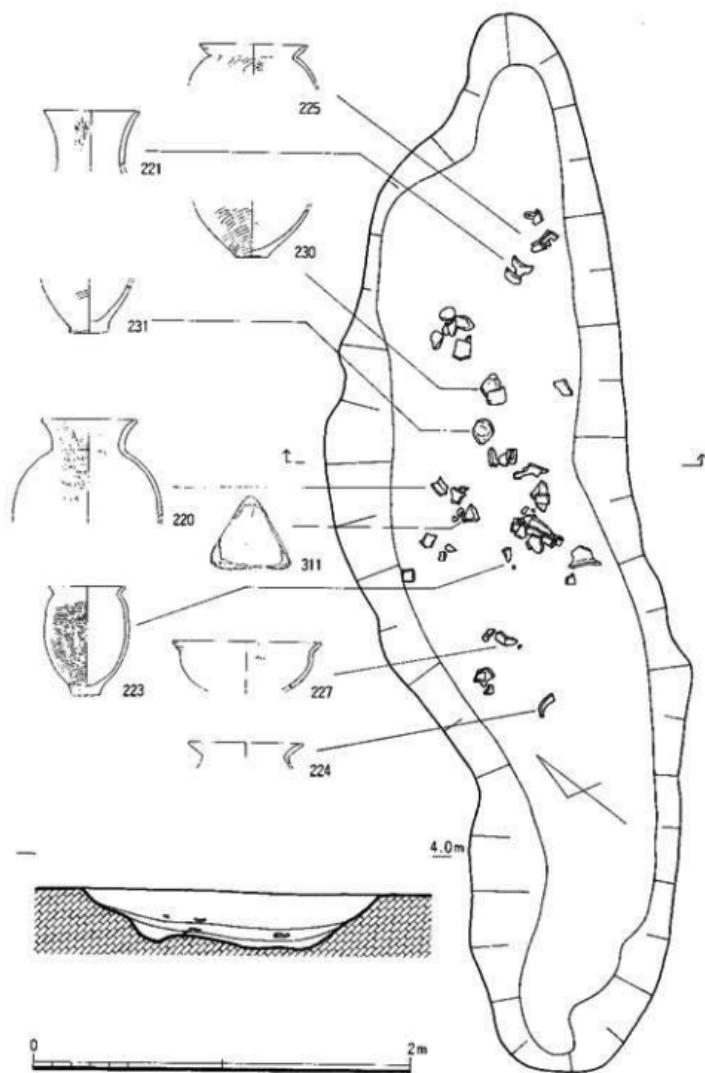


図29 SK-126と出土遺物の関係図

SK-127とSK-118の間は約2.6mにわたって途切れているが、これはSA-102の入り口に伴う通路であった可能性が高く、元々溝が掘られていなかったかもしれない。さらに平面図の上では破線による表現しかできなかったが、SK-126の東側、東壁断面に幅1m、深さ24cmの土坑SK-133を確認した。壁面沿いのサブトレーナーにわずかにかかっただけなので平面的にはまったく把握できなかったが、位置関係からみてSA-102の外周土坑群の一部をなすものであろう。

出土遺物としては、SK-126・127で比較的まとまった量の遺物が出土している（図45 217～234）。一部に弥生時代中期に遡るかと思われるものもあるが、大半は弥生時代後期末頃のものである。

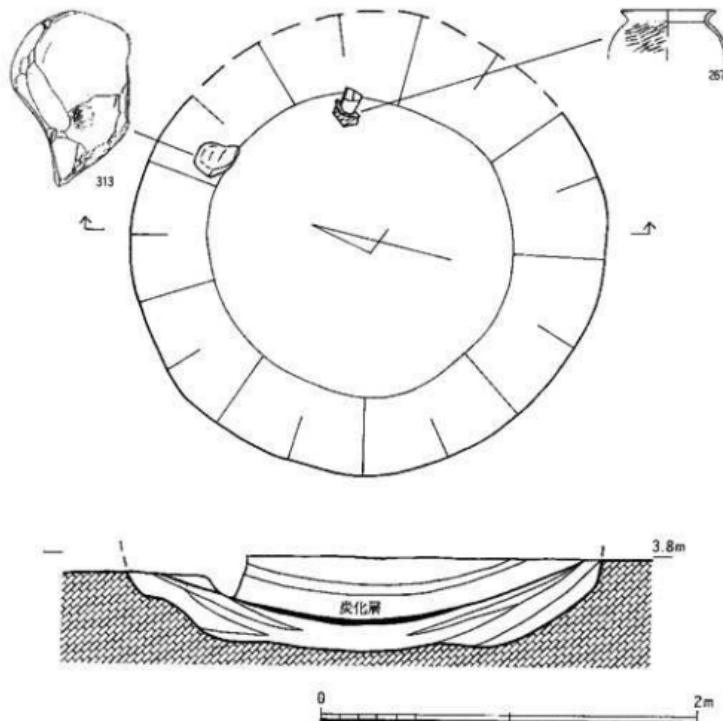


図30 SK-130と出土遺物の関係図

SK-130（図30）

調査区南東隅にあり、竪穴住居址SA-102の東半部を大きく切って掘り込まれている。比較的大きい遺構で、平面は直径2.5mのきれいな円形を呈し、検出面からの深さ52cmを測る。底は直径1.5mほどの平らな面をなし、周壁はゆるやかな弧状をなして立ち上がる。

土層断面を観察すると、中ほどに黒色灰泥じりの粘土の薄い層（炭化層）が円弧状にみられ、それを境に埋土を上下にはっきりと分層できる。上層は有機質を多く含む黒色砂質系の土層が互層をなし、下層は周壁部が暗灰色の砂層、中央に黒褐色粘土が堆積している。

遺物は上層にやや多く、いずれも古墳時代初頭（庄内式併行期）に位置づけられる土器が出土している（図48 258～282）。しかし確実に遺構に伴うといえるような出土状況ではなく、二次的に埋土に土器片が含まれた状況を呈し、少し大きめの破片が上層最下部の黒色粘土上面に貼り付くように出土した程度である。なお、底から砂岩製の大きな砾石が検出された（図51 313）。

遺構の性格としては、検出当初井戸ではないかと推定していたが、それにしては浅すぎ、底の平らな構造からもそれは考えられない。平面がきれいな円形をなし、周壁も凹凸なく均一な形状に掘られていることから、何か積極的な意味をもって設けられた遺構であろうが、その性格はよくわからない。埋土中央で検出した炭化層の検出状況から、土坑の上面にむしろか何かがかぶせられていたことが想定され、それが土坑の性格を解く鍵になるかもしれない。

SK-131（図31）

調査区北東部、SK-103とSK-132の中間で検出した。平面は直径1.3mのほぼ正円形を呈し、検出面からの深さ54mを測る。断面はU字形のゆるやかな弧状を呈し、半円形に近い形態をなす。

埋土は4層に分けられ、最下層の上面にはSK-107ほど完全ではないものの9層と同じ灰色粘土が貼られていた。灰色粘土の深さは検出面から40cmを測る。この粘土を境として上3層（1～3層）と下1層（4層）に明瞭に分けることができる。遺物を含むのは主に上から2層目と4層目で、最上層と3層目にはすくない。

特に、2層目からは、弥生時代後期後半と考えられる壺・甕・鉢各1点（図46 237・240・238）が、それぞれほぼ1個体分の破片で検出された。出土状況としては比較的乱雑に破片が入り混じっていたので、3個体分がまとめて投棄されたのかもしれないが、粘土を貼った上から検出されたことからすると、貯蔵穴として3個体の土器が置かれていた可能性もすてきれない。一方最下層にあたる4層目出土の土器は、小片ばかりでまとまった状況ではなく、凹線文を多用する土器とともに、242のように後期中頃に位置づけうる高环の完形

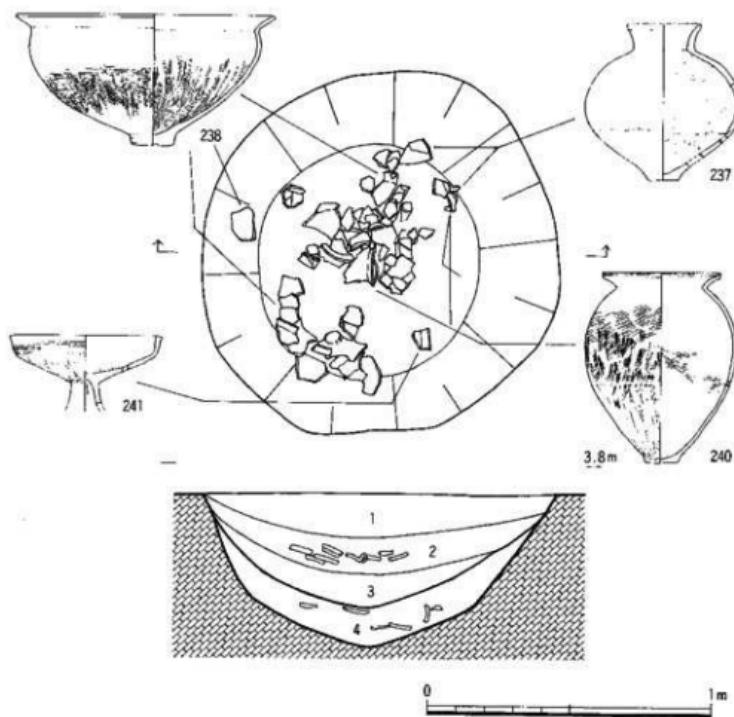


図31 SK 131と2層目出土遺物の関係図

品が出土している。

以上の状況を総合すると、SK-131はまず最下層の土器が示す年代、つまり弥生時代後期中頃に掘られ、使用されていたと思われる。その後あまり時を経ずに土坑が半ば埋まつたか、埋められたかして、粘土を貼って再利用されて弥生時代後期後半まで使用されたものであろう。

(4)溝状遺構 (図17)

SD-104・105・106・107・108・109・114

南調査区内の各所で、长短のごく細い溝が何本か検出された。ほとんどが幅10cm程度、深さ3~4cmから10cmまでのものである。あまりに浅いものなので、遺構面精査過程で途切れたりほとんど無くなってしまったものもあり、遺憾ながら最終的な遺構全景写真に写

っていない小溝があることを付記しておく。

SD-106は、調査区のほぼ中央部を北西から南東へ緩やかな弧を描いて約13mのびる。中央部でSK-113・123を切り込み、南東部ではSD-105と交差する。SA-102の西側にも試掘トレレンチをへだててその延長とみえる溝があり、これまで含めると総延長約16mとなる。横極的な意図をもって掘られた溝ではなく、何かを引きずった跡のような作業痕跡ではなかろうか。SA-102の北にあるSD-114も同種のものかもしれない。

SD-104とSD-105は、SK-127の両側にあり、長さ2.5~3m。ともにほぼ真北方向に軸をとり、約3mの間隔をもって平行する。またSD-107はその南にあって、先の2本の溝に直交する方向をもつ。要するにこの3本は北側が開いたコの字形をなしているわけで、その形に何か意味がありそうに思える。

SD-102・103

SA-101の東側と南側に伸びる幅25cm程の溝で、SK-128・129などからなる一連の遺構とつながっている。おそらくSA-101の排水溝として設けられたものであろう。

SD-111・112・113

北調査区で検出した3本の小溝である。SD-112はその中央にあり、検出長2.6m、最大幅52cmで、西北西—東南東の方向をもつ。SD-111・113はその両側にあって幅25cm程度。深さはいずれも5~10cmの浅いものである。北調査区ではこれらの溝以外には小ピットが3個検出されただけで、遺構の性格はよくわからない。

(5) ピット (図17)

その他大小のピットが多数あり、柱穴と見て差し支えない大きなものもみられるが、建物などにまとまるものはない。なお、南側の試掘トレレンチの南端にひっかかる、トレレンチの方向に一致するSP-116・210・159・227はそれに組合わさるピットが検出できなかったが、その間隔の規則性からみて樹木かなにかの構造物が想定できる。

IV 出 土 遺 物

1 上層遺構関連遺物

上層遺構面では、平安時代前期と鎌倉時代の掘立柱建物や土坑・溝など多数の遺構を検出し、須恵器や土師器の食器類・煮炊き具を主とした両時期の遺物が出土した。ここではそれらを遺構ごとに別けて概要を述べ、さらに上層遺構面を覆う第4層の遺物について述べる。また、上層遺構に先立って形成された自然河道の遺物に関してもここで紹介しておく。

(1)掘立柱建物に伴う遺物

SB-1 関連の柱穴出土遺物（図32 1～6）

1はSP-67より出土した須恵器坏で、高台部で全周の三分の二を残し団上完形となる。口縁は直線的に斜め上方へのび、平らな底部に低く外開きの高台をつける。口径16.1cm、高台径11.2cm、器高4.7cm。2はSP-63より出土した須恵器小片であるが、類似の坏口縁部であろう。

4はSP-13より出土したもので、体部から口縁部にかけてつよく外反する土師器場である。口径38cmを測り、体部外面に縦、口縁部内面には横方向の刷毛目調整を施す。SP-11より出土の3も、小片だが類似の場であろう。SP-62より出土の5とSP-10から検出した6は、共に土師器場の把手部分である。

SB-2 関連の柱穴出土遺物（図32 7～9）

7はSP-21より出土した土師器坏で、口径18.2cm、深さ5.3cm以上を測る大型のものである。口縁端部を横ナデによりわずかに上方へ突出させるが、内面に磨き調整や暗文等はみられない。

8はSP-6出土の須恵器の坏で、口径12.0cm、高台をもたないものである。

9は赤焼きの土師質土器小片である。外面に平行叩き、内面に同心円文がみられる。窯の体部と思われる。須恵器の成形技法をとった土師質に焼き上げたものである。SP-2より出土。

SB-3 関連の柱穴出土遺物（図32 10～16）

10はSP-35より出土した土師器皿である。口径10.1cm、器高1.4cmで、底部中央は若干上へ突出し、口縁部は斜め上方からつまむような丁寧なナデ調整が加えられて外面側に端面

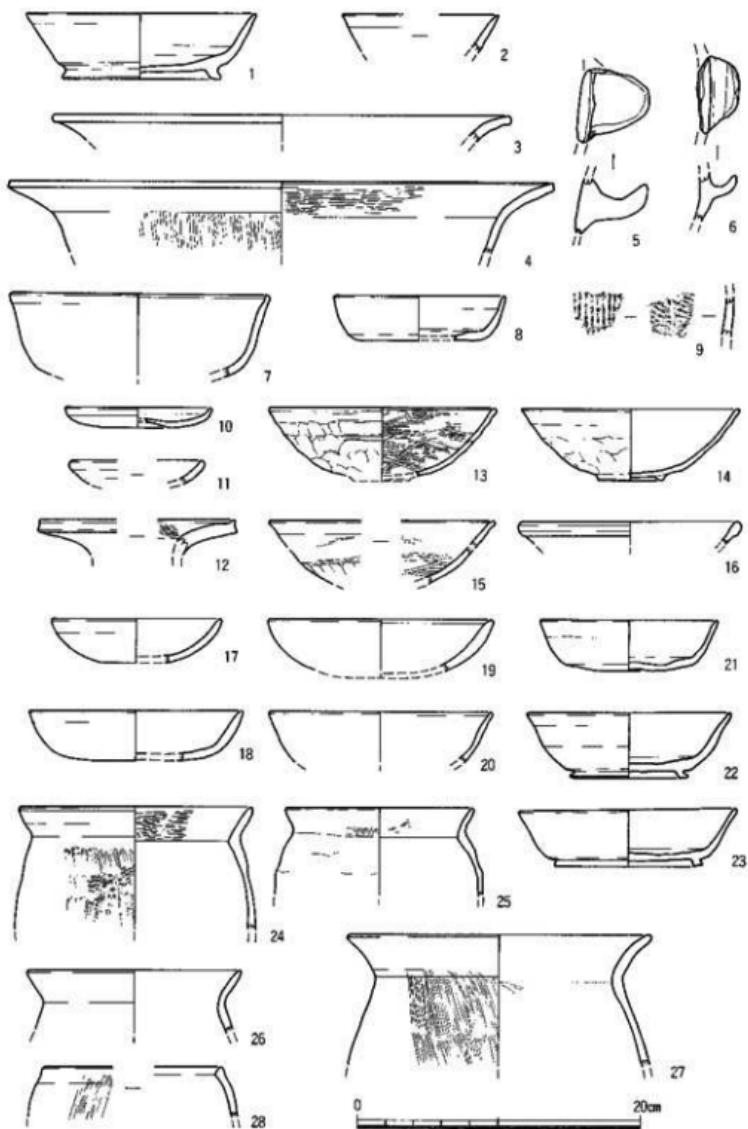


图32 SB-1·2·3、SK-1出土土器類

を形成する。11もSP-35より出土の土師器皿小片である。外面に二段ナデの痕跡がわずかに観察される。

13~15は瓦器碗である。13はSP-45より出土のもので体部の四分の一が遺存する。内面は乱雑であるものの比較的密な磨き調整が施され、口縁外周にも二段ナデの上に粗雑な磨きがあり、さらに体部外面には顯著な指圧痕が残る。14はSP-43出土で、口径15.2cm、器高5.1cmを測る。ほぼ光形に復元できたものの器表の遺存状態が悪く、調整は不明。口縁外周は二段ナデ、体部外面には指圧成形が施され、高台は断面三角形のものが貼り付けられている。15もSP-43のもので、外面にも磨き調整が施されている。

16はSP-45出土の白磁碗で、口縁部が小さく玉縁をなす。

12はSP-23より出土したもので、土師器端の口縁部であろう。明瞭な外側端面の上端を若干引き上げ、口縁上面には横方向の刷毛調整を施す。

(2) 土坑・井戸・その他ピットの遺物

SK-1 出土遺物 (図32 17~28)

17~20は土師器壊である。17は体部から口縁部にかけてゆるやかで均一なカーブをなし、20では導造りの体部から口縁部にかけて微妙なS字状屈曲を示すなど、形態的には若干のバリエーションがあり、律令的な土師器の形を残しつつもそこから少し逸脱しかけているものとでもいえようか。

21~23は須恵器壊である。22・23は低い高台をもつが、21は高台をつけていない。

24~27は土師器甕である。そのうち24と27は、口縁部の形態に差があるものとともに体部の調整に縱方向の刷毛目を多用する。26は形態的には類似するが、摩滅のため調整は不明。これらに対して25はやや小型の甕で、体部外面に指圧成形が著しい。

28は、わずかに内側してたちあがる土師器口縁部である。小片のため全容はわからないが、口縁部の内側面と外面の縱刷毛目調整が著しい。一種の鉢形になるのであろうか。

SP-8 出土遺物 (図33 29~34)

29は、口径19.6cm、器高4.1cmを測る大型の土師器壊である。外底面は径約8cmの平坦に造られているが、体部はそこから明瞭な屈曲をなさずに緩やかなカーブでたちあがり、口縁部も特に細工せず丸くまとめている。磨き調整や暗文はみられないが、内面には丁寧なナデおよび横ナデ調整が施される。30は小片であるが復元口径17cmを測る土師器杯で、体部から口縁部にかけて微妙なS字状カーブをなす。口縁内端面に沈線、体部内面に放射状の暗文がかすかに観察される。

31は、須恵器の壊で口径11.6cm、器高3.4cmを測る。高台をもたず、平らな底部から明瞭

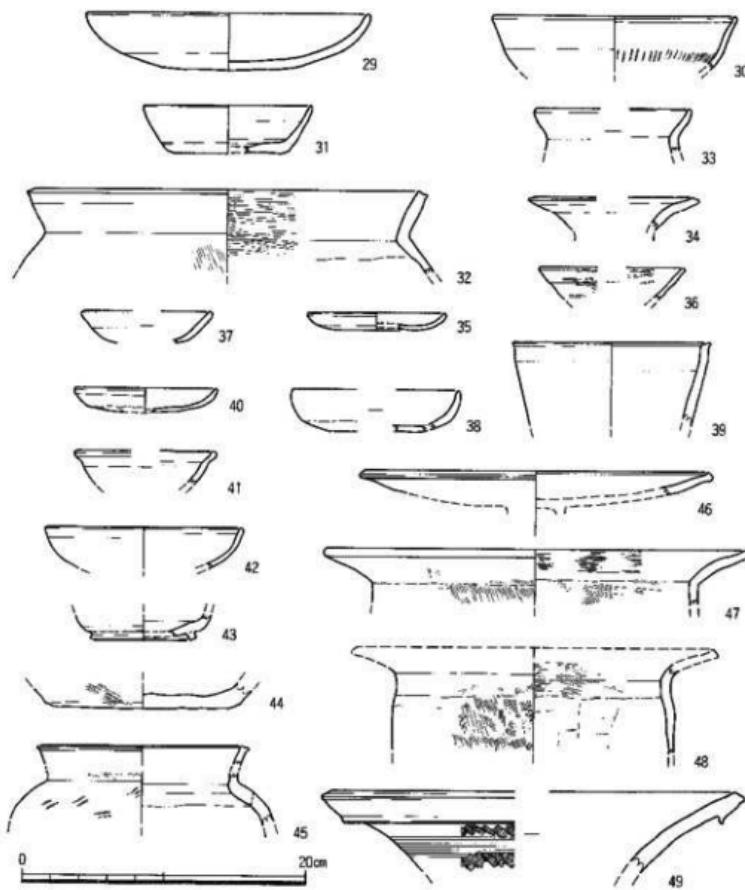


図33 SP-8・24・33・50、SE-1、SD-2・4・5・6～8・12出土土器類

な変化点をもって体部が直線的にたちあがり、尖りぎみの口縁部につづく。

32は、口径27cmを測る土師器の大きな口縁部で、把手付堀になるのではないかと思われる。くの字に屈曲してたちあがる口縁部は直立に近く、明瞭な端面をつくっている。

33・34は、土師器甕および堀の口縁部小片であろう。

SE-1出土遺物（図33 35・36、図34 418）

35・36は、井戸状遺構SE-1から出土した。35は口径9.6cm、器高1.3cmの土師器皿で、綴

やかなカーブでたちあがる口縁は、小さいながら明瞭な外側端面をつくるとともに、その下に一段の横ナデが施される。36は瓦器碗の口縁部小片であるが、内面とともに外面にも磨き調整がはっきり観察できる。

この他、図示していないが井戸底の水溜めに使用された曲物と若干の木片がある。それらについては、下層遺構より出土した木質遺物とともに樹種同定を行っているので、表2を参照ねがいたい。

曲物は取り上げ段階において不覚にも分解してしまい、図化することができなかった。厚さ5mm・幅15cmほどのヒノキの薄板を使用し、内面に刃物で1cm間隔程度の目印に直交する筋を刻む。それを挟り所とし径36cm程度にまるめ、両端は桜の皮で縫い合わせるように接合し側をつくっている。また、言うまでもないが底板は取り除かれていた。

図34の418は曲物の蓋か底のどちらかに使用された板の残骸とみられる木片で、曲物の内部に落ち込んでいた。長さ25.5cm・最大幅5.7cm・厚さ約0.8cmを測り、一方の側線が径32~33cmの凸弧状に加工されているが、本来の成形面はまったく残っていない。また、外側よりに小さな穴が二つあいているが、意図的に明けられたものではなく自然のものだろう。材質は、樹種同定をした20点のうち唯一のコウヤマキであった。

その他、曲物の内部には数個の石とともに多数の薄板片が入っていた。大きなもので長さ25cm・幅6cm、あるいは長さ37cm・幅4.3cmあり、厚さは4~5mm程度のものである。特に加工痕はみられないものの、その形状から大半は自然木ではなく人為的に加工された薄板材と思われるが腐食が進んでいる。一見しただけでも材質はすべて同じものとみえ、樹種同定を行った417・419の2点はいずれもスギという結果が出ている。

その他ピット出土遺物（図33~37~39）

37は、SB-3内北寄りのSP-50より出土した土師器皿小片である。

38は、SB-2の柱穴SP-1のすぐ北側に位置するSP-24より出土した土師器坏である。口縁部内外面には丁寧な横ナデが施されているが、暗文や磨き調整はみられない。

39は、SD-6の北に接するSP-33より出土した須恵器口縁部である。わずかな外傾を示しつつ直立に近い角度でたちあがり、口縁端部上面には明瞭な端面をつくる。いわゆるすり鉢形のものであろう。

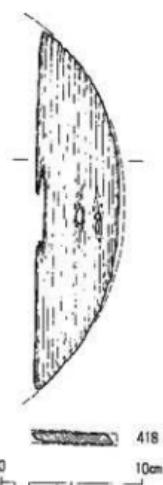


図34 SE-1 曲物の底板

(3)溝状遺構の遺物 (図33 40~49)

40は、SD-6の南部、SP-33南側あたりで出土した土師器皿である(図版8下)。底部中央を欠く以外は全形を残しており、口径9.8cm、器高1.8cmを測る。口縁部はつよい横なでにより外側に明瞭な端面がめぐり、外底面には顕著な指頭痕を残す。

41は、SD-12より出土した土師器坏小片である。体部内面には放射状暗文がかすかにみられ、口縁部は強い横ナデによって外方へ屈折するとともに端部をわずかに上へつまみ上げる。

42は、SD-4より出土した土師器坏である。体部から口縁部にかけて変化点をもたず継やかなカーブでたちあがり、端部は内外面から強い横ナデを施す。

43は、SD-2より出土した須恵器坏である。低い高台部分を残す小片で、高台径6.7cmを測る。

44は、SD-5より出土したもので、須恵器の壺あるいは甌の底部である。径12cm程を測る平底の外面には顕著に指頭痕が認められ、わずかにのこる体部下端には平行叩き成形の痕跡がみられる。

45も、同じくSD-5より出土したもので、土師器の壺ないしは広口甌形というべきものである。口縁部は直立に近く短くたちあがり、小さく円部のめぐる端面をつくる。体部は上半のみ遺存するが厚手のつくりで、球形に近いつよい内壁を示し、外面に平行叩き成形の痕跡、内面には接合痕を残している。

46も、SD-5より出土の土師器高坏口縁部である。暗文はみられない。

47・48は土師器の甌で、47がSD-7、48がSD-8より出土したものである。48は口縁部を欠くが、ほぼ同形態のものとみられ、口縁内面と体部外面の刷毛目調整が著しい。

49は、SD-8より出土した須恵器大甌の口縁部である。比較的大きい破片ではあるが、口径を計測し得ない。口縁端部外面は若干肥厚させて下部を下へつまみ出し、頸部外面には4条の範描き沈線と、それを挟む二段の横描波状文が施される。

(4)遺物包含層(第4層)出土遺物

土師器 皿・壺・高坏 (図35 50~58)

50~53は、中世の土師器皿である。そのうち50は、口縁部にいわゆるS字状の屈曲を残しており、平安時代末期のものとみられる。一群の中世遺物の中では最も遡るものである。また53の口縁部に加えられた横なでは比較的力の弱いもので、鎌倉時代でも後半、13世紀末から14世紀代に下る可能性もある。

54は、口径22.4cm、器高3.0cmを測る土師器大皿である。底部はほとんどは残っていない

が、大きく平らな底をもつものとみてよい。磨き調整や暗文はない。

55～57は上師器の坏である。55は、体部から口縁部にかけてかなり厚手に造られ、口縁内端部に端面を設けている。全体にナデおよび横ナデ調整で仕上げられ、磨き調整はみられない。一方56はかなり薄手のもので、摩滅著しいものの内面の放射状暗文と口縁内端部の沈線が確認でき、外面は体部の中程まで丁寧な横ナデ調整が施されている。57は口径17.7cmを測るやや大きなもので、内面は不明だが外面には横方向の粗い磨き調整がみられる。

58は上師器高坏で、ほとんど平坦な坏部中央と9面に面取りされた脚柱の上部を残すのみである。

瓦器 盆・碗 (図35 59～73)

59は瓦器の盆である。口径8.4cm、器高1.6cmを測り、焼成および器衣の保存状態がすぐる良い。口縁内面に圓線状の磨き調整、見込み部はジグザグ状の暗文が施され、外底面には指痕を顯著に残す。

60～73は瓦器碗である。いずれも小片にすぎないが、口径が14～15cm程のもので、69のように口縁内端部に沈線を残すものもあるが、内面の磨き調整は粗いものが多い。71～73の底部片には、見込みの暗文がジグザグ状に施され、高台は比較的低く小さいものしっかりつくられている。しかし、60のように断面が小さい三角形状をなす華奢な高台のものもある。

須恵器 坏蓋・坏身 (図35 74～84)

74～76は須恵器の坏蓋である。74は口径15.6cmとやや大きく、75・76は口径12～13cm前後を測るが、いずれも口縁端部を下方へ突出させるタイプのものである。また三点ともかなり器高が低く、つまみ部分を欠損する。

77～84は須恵器坏身である。そのうち84のみは高台をもたない小型のものだが、ほかはいずれも低い高台をそなえ、体部から口縁部にかけて直線的に斜め上へ立ち上がる。ただ、80のみは特に高台が小さく、体部の傾斜が他と比べてより直立に近いので、少し形態の異なるものであろう。

陶磁器 盆・碗 (図35 85～89)

85は灰釉陶器の碗である。口縁部に加えられた強い横ナデによって微妙な屈折をみせる。外面の釉薬は大部分剥離しているが、内面には厚めに灰釉が塗布されている。86は灰釉陶器の盆底部と思われる。外面は回転へら削りによって径4.4センチのきれいな底面をつくり、内面は圓線を一条めぐらせた上に厚く灰釉がかけられている。

87は中国製白磁の碗である。口径15.6cmを測り、いわゆる玉縁状口縁をなす。生地は胎土の粒子がほとんど認識できないほどの玻璃質に焼き上げられ、釉薬も均質に厚く施され

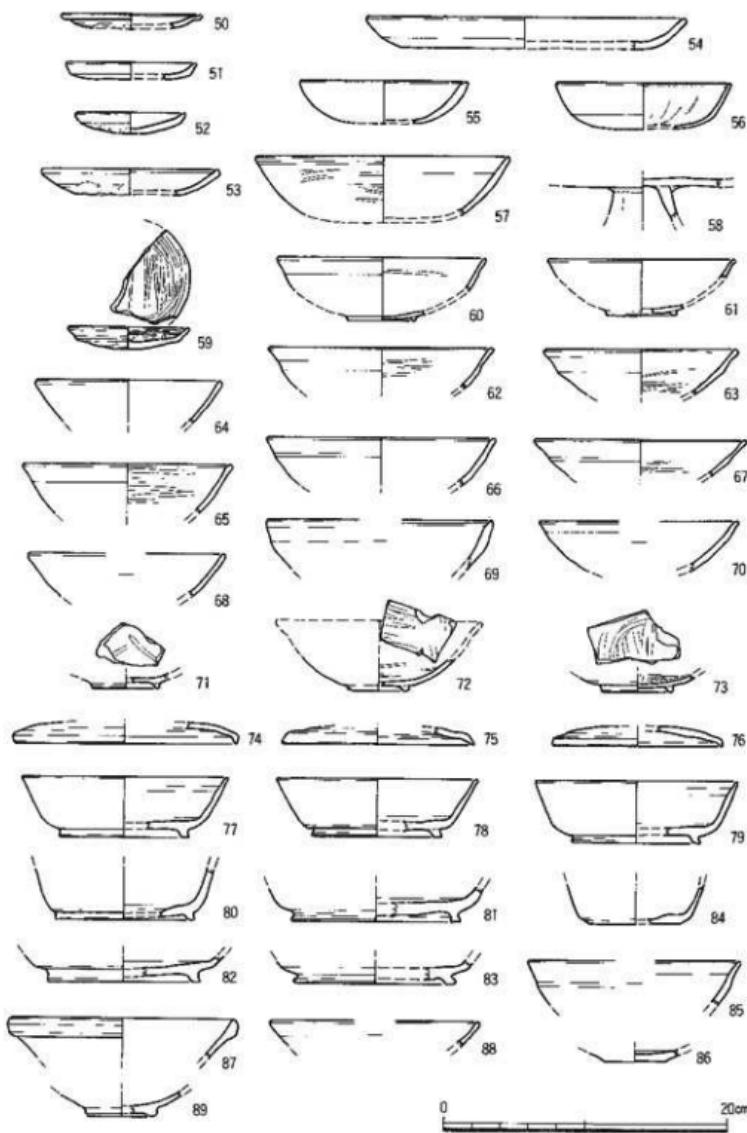


图35 第4层出土土器類(1)

ている。88は白磁の口縁部小片で、内側に薄く仕上げられている。89は碗の底部で、わずかに青みをもつ色調から青白磁とすべきものかもしれない。外面は削り出しによって低い高台がつくられ、内面はなめらかな球面状をなしている。釉薬は高台内をのぞく内外面に施され、全体に細かな貫入がみられる。

弥生土器・土師器 瓢・壺 (図36 90~101)

90~98は、土師器の甕あるいは壺の口縁部である。90のように口径35.3cmを測る大きいものから、92・96の口径21~22cmまで様々であるが、口径の小さい92・93・96は甕の可能性がたかく、口径26cm以上の90・91・94・95、小片のため口径のわからない97・98は把手付き壺であろうと思われる。口縁の形態にも色々あるが、端部の上・側・下に三指をあてて横ナデ成形を施し、明瞭な端面をつくるものが多い。特徴的なのは95で、上面側の押さえが強いためか口縁部全体が微妙なS字状のカーブをなし、端部は尖りぎみになっている。また97は口縁端部を上方へはっきりとつまみ上げて外側端面を広げており、98では逆に口縁端部を若干下方へ引き出している。調整技法は全体に横ナデを主体とするものであるが、口縁内面の横刷毛調整、体部外面の縱刷毛調整の観察できるものも多い。

100・101は壺の把手である。厚さ1.2cm程の三角形に成形した粘土の一辺を横方向に壺の体側部へ貼り付け、上面側に強い指頭圧を加えて上向きの角状に成形したものである。

99は、弥生後期末あるいは庄内式併行期に属する甕の底部であろう。

瓦質土器・須恵器・陶器 羽釜・甕・鉢・壺ほか (図36 102~108)

102は瓦質七器の羽釜口縁部である。口縁端部は内外面、特に内側に突出させて上に幅広の端面をつくり、外側面には横ナデによる中途半端な凹部がめぐるが、いわゆる階段状と呼ぶ定型化したものにはなっていない。

103は須恵器甕の口縁部である。口縁端部の外側直下に小さな凸帯を1条置き、さらにその下に2条のへらしき沈線と備先列点文をめぐらす。古墳時代のものであろう。

104は須恵器の口縁部で、端部の遺存が少ないために口径と傾きを知り得ないものの、口径30cm近いこね鉢状の器形をなすものと思われる。内外面とも横ナデにより直線的に成形・調整され、端部は強くつまんで尖りぎみにつくる。

105はいわゆる東播系の須恵器こね鉢である。口径24.6cm、比較的薄手のもので、口縁に向かってやや厚みを増し、端部は二指で引き上げて外面側に垂直方向の端面をつくる。

106は須恵器の壺・瓶の類の口縁部であろう。わずかな外反をみせるもので、端部はやや肥厚して丸くまとめている。口径10.8cmを測る。

107は直線的に外傾する須恵器口縁部で、端部は内側に傾く端面をつくる。口径13.4cmを測り、すり鉢と思われる。

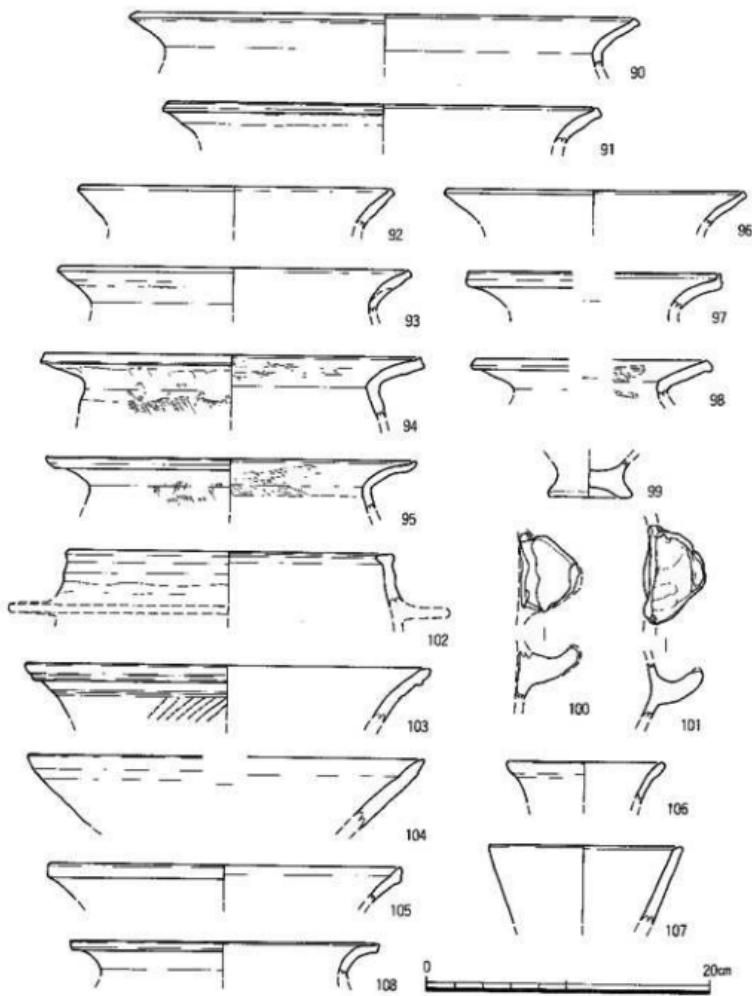
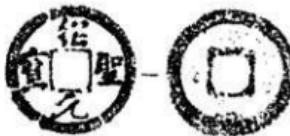


図36 第4層出土土器類(2)

108は陶器甌の口縁部である。比較的薄造りで強い外反を示し、端部は外傾する端面をつくりつつ上方へわずかに引き上げられる。全体に灰茶褐色を呈し、口縁上面は灰かぶりの跡が小さく白い斑点状をなしている。常滑窑の古い段階の製品であろうか。

銭貨 (図37 109)

北宋銭「紹聖元寶」(初鑄1094年)が1点出土した。銭文は行書で、比較的鮮明に鋤出されているが、調査地の金氣を含む地下水の影響で黄土色の鉄鏽びがかかるようにみえる。銭径23.8mm、内郭径18.9mm、重さ2.76gを測る。



109

図37 第4層出土銭貨 (1/1)

(5)河道内の遺物

ND-1 出土遺物 (図38 110・111)

110は土師器の高坏である。坏部の半分以上を残す破片で、体部は水平に近い大きな角度で開き、口縁部は小さくS字状の屈曲をみせる。脚部は付根部がわずかしか残らないが、10面の面取りが施されている。

111は上師器の口縁部で、小片のため口径と傾きを知り得ない。斜め上方に向く体部から口縁部が一旦内側へ屈曲し、さらに端部が垂直に立ちあがるように見える。大きな鉢形にでもなるのであろうか。

ND-2 出土遺物 (図38 112)

112は、弥生土器あるいは古式上師器の壺体部である。このほかにも底部が何点か出土しているが、いずれも同時期のもので、それはND-2が下層の包含層と遺構をえぐったことに起因するものであろう。

ND-3 出土遺物 (図38 113~115)

113は黒色土器の碗である。いわゆるA種と呼ぶ内黒のもので、外面は全体に灰黄色を呈

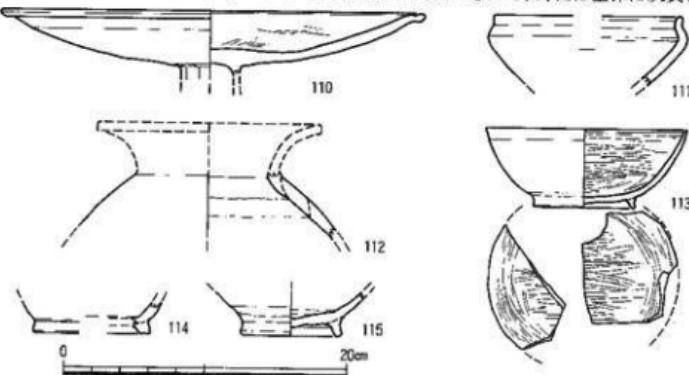


図38 ND 1~3出土器類

し指頭成形圧痕がみられる。内面の磨き調整は極めて密に、見込み部も一方向の密な磨き調整が施され、高台も8mm近い高さをもつしっかりしたものである。口径14.0cm、器高5.6cm、高台径7.0cmを測る。

114は須恵器の高台部小片である。輻の広い高台の形態から、壺ではなく瓶の類ではないかと思われる。

115は須恵器の高台付き碗底部である。貼り付けによる高台は高さ9mmほどあり、やや外開きのきわめてしっかりしたものにつくられている。また胎土に顯著な砂粒をみることができず、きわめて精選された粘土を使用しているようである。高台径6.8cmを測る。

2 中層遺構関連遺物

下層包含層である第8層直上の灰色シルト層（第7層）上面で水川跡を検出したが、そのシルト層とそれを覆う灰褐色細沙層（第6層）で、占墳時代中期あるいは後期に相当すると思われる須恵器など若干の遺物が出土した（図39）。

116は土師器甕である。口縁部と体部が接合せず、口径も計測できないが、長胴の体部からくの字に外反する口縁部がつくと思われる。口縁内面に横、体部外面に縦の刷毛目調整が施されている。

117は土師器口縁部で、やや外傾しつつ直線的に立ち上ることから甕の口縁であろう。

118の土師器口縁部小片は、大きく外傾したのちわずかに水平に引き出し、端部の上面と

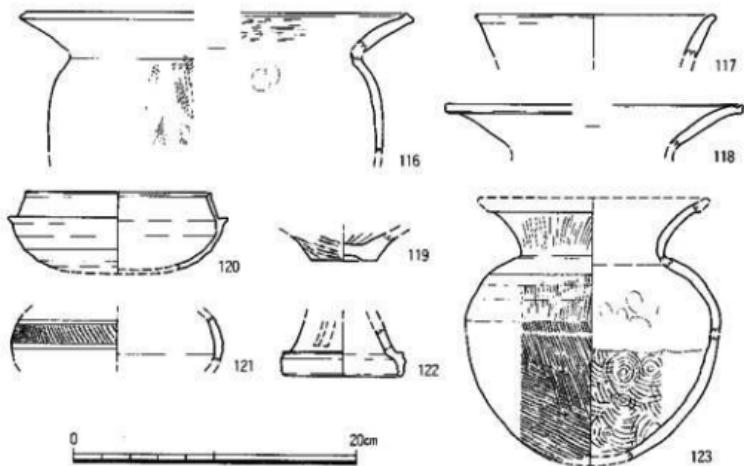


図39 第7層出土土器類

外側を二指でつまんで垂直端面をつくっている。場の口縁部であろうか。

119の底部は、外面に平行叩き成形を施しており、弥生後期末頃の甕であろう。

120～123は須恵器である。

120は口径13.0cmを測る坏身で、かなり丁寧な薄造りに仕上げられている。やや内傾する立ち上がりの端部は内側に端面をつくり、休脚部から底面にかけては入念な回転窓削りによって美しい曲面をみせている。

121は甕の体部であろうか。2条の沈線の間に右下がりの櫛先列点文がめぐる。

122は高环脚部であろう。尖りぎみの端部から垂直に約1cmたちあがり、内側に屈曲したのち内傾して斜め上方にのびる。屈曲部の外面に凸帯状のものを一条おき、脚柱部には長方形の透かしを配する。透かしは一側面が残るだけなので大きさや個数はわからないが、遺存する破片の大きさからみて三方透しであろうと思われる。

123は壺である。いくつかの大きな破片が口縁部・体部上半・体部下半の三つに分かれ、それぞれ接合しないので図上復元を試みた。体部はやや肩が張って下すぼまりの球形になると思われ、口縁部は強く外反する。口縁端部は欠損するが、遺存部上端に小さな段が観察され、折り返して肥厚させているか、もしくは口縁端部直下にめぐらした凸帯であるかもしれない。体部下半には外面の平行叩きと内面の同心円文が頗るに残るが、上半部は内外面ともナデ・横ナデによってその痕跡はあらかた消されている。特に内面は指圧痕が目立って同心円文がまったくみられないで、体部上半についてはもともと当て具を使用せずに指頭で代用したのかもしれない。頸部は内外面とも丁寧な横ナデが施されているが、外面には先行する右上がりの平行条痕が多数みられ、粗い刷毛目調整が行われているようである。

3 下層遺構関連遺物

第9層上面で多数検出した遺構には、弥生時代中期後半のものと弥生時代後期後半～古墳時代初頭の二時期ある。ここでは下層遺構の出土遺物を大きくその二者に分けて紹介し、遺構面を覆う第8層の遺物についてもふれておく。また石器および特殊な遺物については最後にまとめてのべる。

(1) 弥生時代中期後半の遺構に伴う遺物

弥生中期の遺物としては、量的に最も多いSD-101のものから紹介する。

SD-101出土遺物（図40・41 124～135・137～155）

124は壺の蓋であろう。直線的に低く大きく開き裾部に小さな円孔をあける。孔の数は不

明だが、二個一対で二方に設けられていたものと思われる。口径15.6cm。

125は水差し形土器の口縁部である。やや外開きに直立する頸部の上端を内側させて口縁とし、その一部は半月状に範囲で切り取っている。外面の口縁直下には、退化した凹線状の窪みが二段にめぐる。口径7.9cm。

126も水差し形土器であろう。やや外傾しつつ直線的に立ち上がる口縁部で、小さな円形浮文を二段にめぐらす。

127～130は広口壺に属するものの口縁部である。

127・128は強く外反する口縁の端部がやや厚みを増し、上端を上へ引き上げる。そして、127は端面に装飾を施さないが、128では3条の凹線をめぐらしている。

129は体部上半から頸部にかけて頗著な屈曲部をもたないものと思われる。口縁部は強く外反して端部を上下に少し拡張し、端面の上側に1条の凹線を配する。

130は頸部から口縁部にかけて強く外反して端部を垂下させ、口縁の上面と外側端面に小さな円形浮文を並べている。また体部にはわずかに構造文が観察でき、遺存状態が悪くわかりにくいものの籠状文のようである。下彫れの体部をもつものであろうか。口径14.8cmを測る。

なお128と130は、きわめて粒子の細かい胎土であるが角閃石・雲母粒が頗著に認められ、中河内平野の沖積地から搬入されたものとみられる。

131は復元口径27.5cmを測る中期特有の大型壺で、頸部が大きく外反したのち明瞭に屈折して口縁部が立ち上がる。頸部下端には幅2.2cm程の斜行刻目を施した凸帯をめぐらし、口縁下端の屈曲部付近には退化した2条の凹線を配している。また頸部外面には頗著な縱刷毛目調整が加えられている。

132は小片だが、内傾する口縁部の上端を外側に肥厚させ、その直下に小さな円孔をあけている。無頸壺であろう。口径12.0cmを測る。

133～135・137～139は甕である。

133・134は口径13cm前後の小型のもので、膨らみの少ない体部からくの字に外反する口縁の端部を上へ引き上げており、134ではその端面が幅広の凹線状をなしている。体部外面はともにほぼ水平の叩き成形の後縱刷毛目調整が加えられ、133では先行する叩きの痕跡がほとんど消されている。

135は口径15.6cmでやや大きく、接合できないものの同一體と認定できる体部・底部を確認したので、岡上復元を試みた。口縁端部を上へ引き上げ外側端面を凹線状とする形は134と似ているが、口縁全体が水平に近いまでの角度で開いている点では大きく異なる。体部内面の技法は全体にナテ調整を基調とするが、外面では縱刷毛目調整の後下半の広い範

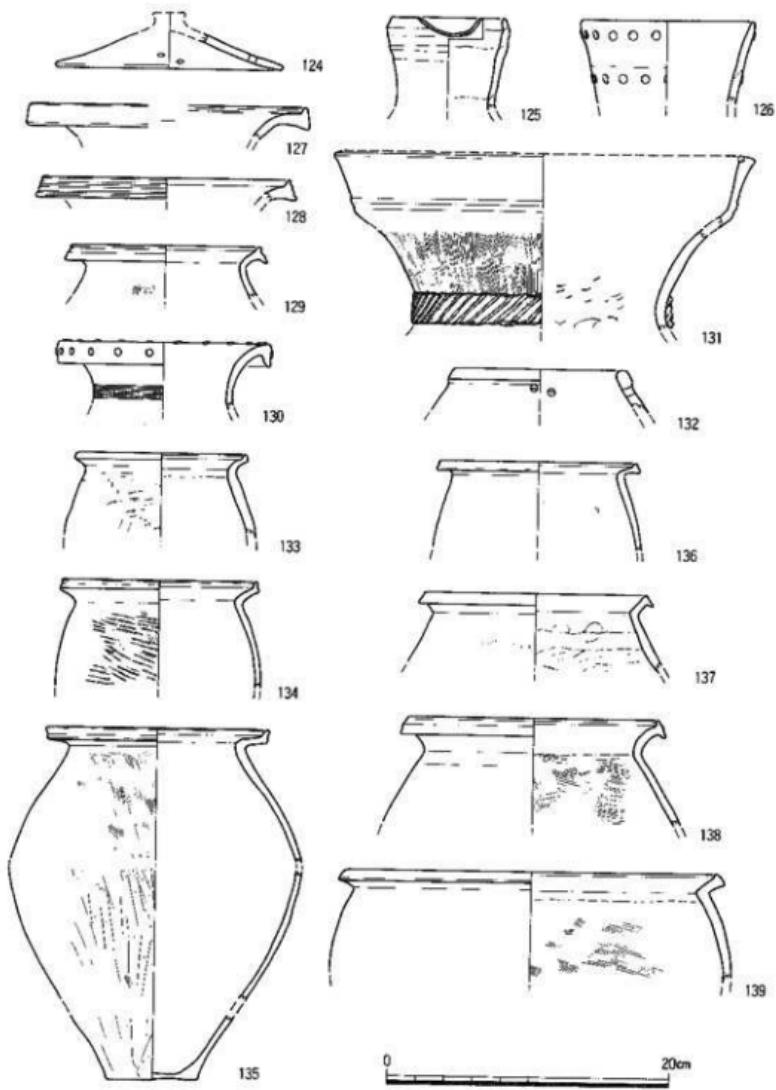


図40 SK-120、SD-101出・七土器(1)

間にわたって下から上へ範削りを加えている。

137は、あまり彎曲をもたず内傾する体部にくの字に屈曲する口縁部がのがび、その下端を下方へ引き出し、幅広の端面をつくっている。体部外面は摩滅が著しいものの縦刷毛目調整が観察され、内面は指頭成形の後、粗雑ではあるが明瞭な範削りが施されている。胎土は全体に細かく、口縁の一部に赤褐色を呈する部分もあるが大部分は暗茶褐色であり、角閃石・黒雲母の粗粒も認められるので中河内地方からの搬入品であろう。口径15.6cm。

138は、内傾する体部からはっきりした変化点をもって口縁部がつよく外反し、端部は上下に拡張する。その拡張部を上下それぞれにつまんで横ナデを加えたものか、端面に2条の凹線状陥みがめぐっている。口径17.1cmを測る。

139は、口径25.9cmにもなる大型のもので、ゆるやかに内彎する体部から口縁がくの字に小さく折れ曲がっている。外面はナデ調整を主体とし、内面は横ないしやや左上がりの刷毛目調整が施されている。

140～148は高坏である。

140は、胎土に角閃石・黒雲母の粗粒を含みチョコレート色を呈する典型的な生駒西麓の土器で、その特徴的な胎土に注目して同一個体になりそうな破片を探してみた。そして接合しえないいくつかの破片で図上復元を行ったところ、図示したように脚裾部をのぞいてほぼ全形を知ることができた。坏部は大きく開く体側部から丸みをもって口縁が立ち上がり、その端部は肥厚せずにわずかに外側へ傾く明瞭な端面をもつ。脚柱部は高さおよそ10.5cmの円筒をなす。器壁外面の調整は、坏体部下半から脚部にかけては縦方向、坏部上半(口縁部も含むか)は横方向の範磨きである。口径22.9cm、残存高18.9cmを測る。

141は、内彎しつつ立ち上がる坏体部の上端が外面にわずかな稜をつくって直立し、さらにその端部を外面側に引き出す。体部外面に横、内面に縦方向の範磨きが施される。

142は、坏部の形状が141に類似するが、体部から口縁部にかけてまったく屈折部をもたず、ゆるやかな彎曲をみせる。口縁端部は内外に肥厚してその上面に水平の幅広い端面をつくっており、外面では口縁部直下が1条の凹線となっている。脚柱部は円筒状であるが、その上下を大きく外反させ、坏部への移行も明瞭な変化をなさないようである。坏部上半は内外面とも横、坏部下半から脚柱部にかけての外面には縦方向の範磨き調整が施される。口径27.0cm、残存高14.3cmを測る。

143は垂下口縁をもつタイプのものである。摩滅が著しいので調整の詳細はわからないが、垂下部外側面の上下端にそれぞれ1条の凹線をめぐらしている。

144～148は高坏の脚裾部である。

144は、ハの字に開く脚端部を外側に拡張し、幅広い端面をめぐらす。脚部外面には顕著

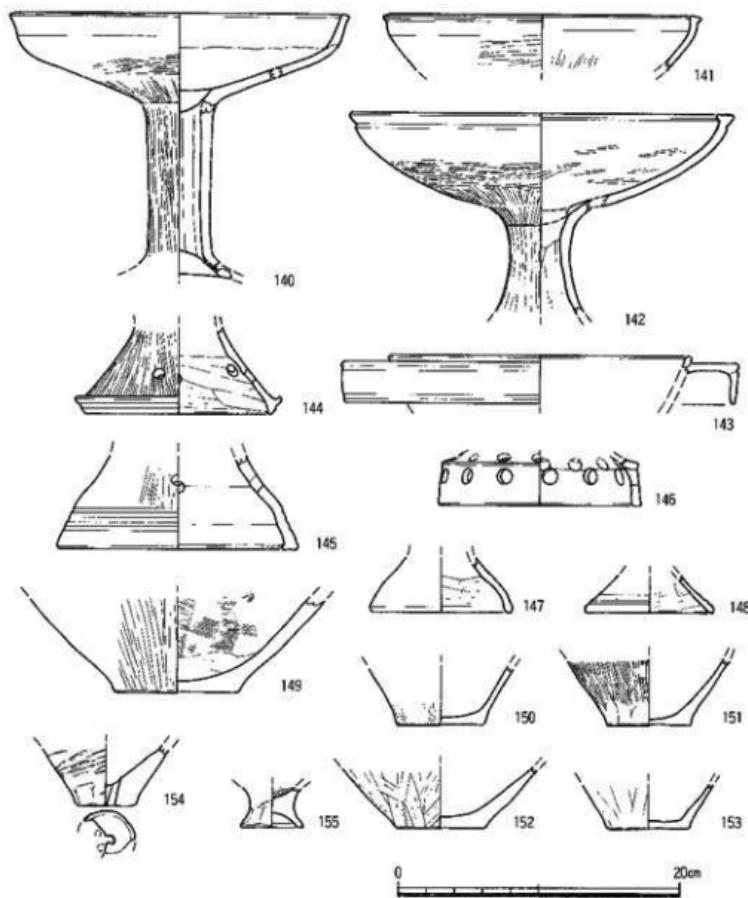


図41 SD-101出土土器(2)

な縦範磨きを施し、内面は裾端部にいたるまで横方向の範削りを加えている。円形透かしが2個残っており、その間隔から5ないし6個あけられていたものとみられる。

145は、ハの字に開く脚裾が下方へ屈折し、端部を少し内側へ引き出す。屈折部の下に明瞭な凹線3条をめぐらし、その上には円形透かしの痕跡が一個認められる。屈折部分以下は内外面ともきわめて丁寧な横ナギが加えられ、それより上の外面には縦範磨きが施されている。脚裾径14.8cmを測る。

146は高坏脚裾部とみられる小片であるが、きわめて特徴的な形態をもつ。裾部はほぼ直立し、下端から3cm程上できわめて明瞭な稜線をつくって屈曲し、脚柱部を形成するようである。稜線の上と下にそれぞれ併1cm程度の円形透しが並び、その数は一段に13~14個めぐっていたものと推定される。脚柱部がないので全容はまったくわからないが、おそらく円筒形のものであろう。脚径は14.0cmを測る。

このような形態の高坏脚は畿内地方でほとんど類例がないが、播磨・吉備など瀬戸内沿岸地方ではしばしばみられるよう、これについても西からの搬入品である可能性がたかい。

147は脚直径9.6cmの小型品で、裾は強くふんばる形をとり、内面には横方向の箝削りを加えている。

148は脚直径8.9cmとさらに小さく、ハの字に聞く形につくられ、裾端近くに2条の凹線をめぐらす。

149~155は壺あるいは甕の底部をまとめた。

149は底径8.5cmを測る大型のもので、外面に顕著な箝磨きを加える。壺であろう。

150と151は形態的に類似し、外面の縦刷毛目調整も共通する。151には底部周縁に指頭圧成形も観察される。153はよく似た形であるが、やや小型で外面に縦箝削りが施されている。これらは甕の底部であろう。

152は、形態から甕底部の可能性がたかい。外面に縦方向の粗雑な箝磨きがみられる。

以上はいずれも弥生中期後半から末頃のものであるが、SD-101の最上層からは後期に下る遺物も出ている。

154は底部に小さな円孔をあけた有孔鉢である。孔の一つは明瞭に残っているが、痕跡があと二つみられ、三孔あったようである。体部外面には右上がりの叩き成形が施され、底部周縁には指頭成形痕がめぐらしている。

155は小片であるが、底部の周縁の指頭圧によって脚台状に突出させ、外底中央は大きく窪む。鉢形土器であろうか。

SK-120出土遺物（図40 136）

SK-120は、SD-101の底で検出した土坑で、出土遺物は少なく、図示したのは1点だけである。

136は口径13.3cmの小型甕で、器形そのものは133・134と類似するが、口縁端部を肥厚させて幅の広い外端面をつくり、体部の技法は内外面とも刷毛目調整に終始している。

SK-103出土遺物（図42 156~165）

156は壺の口頭部で、直立する頭部から口縁部がつよく外反し、ほぼ水平となる端部は急

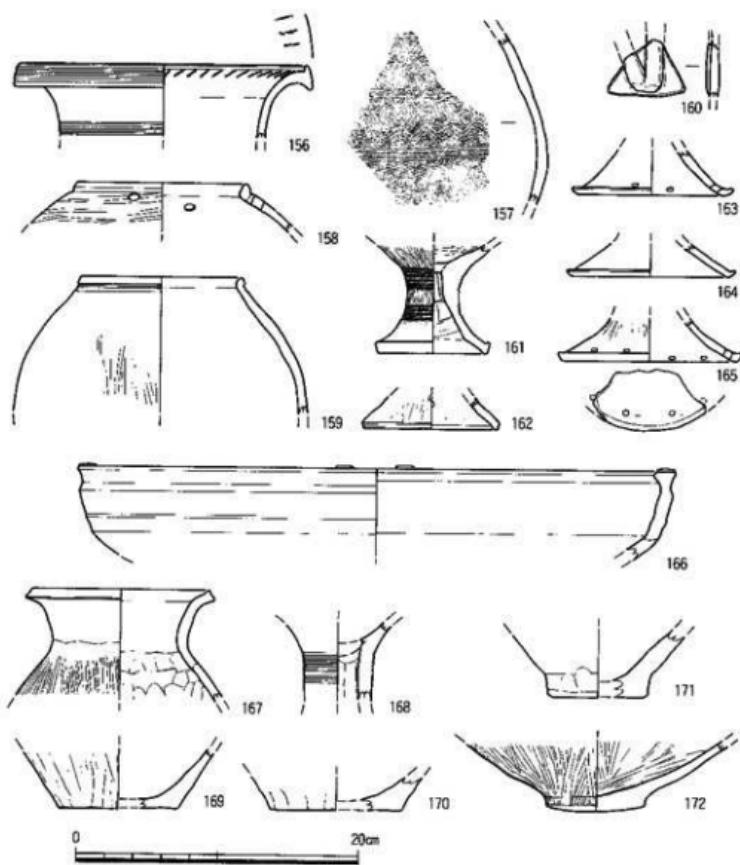


図42 SK-103・109出土七七器

激に厚みを増して上下に拡張する。その外端面に幅の狭い4条の凹線を配し、口縁上面には櫛先列点文、頭部にも櫛描直線文をめぐらしている。さらにその下、頭部から体部上半にかけて櫛描文を多用したものと思われる。口径21.0cmを測る。また、157は壺の体部片で、櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配している。その文様構成の特徴が156と共通し、胎土も酷似していることから同一個体になる可能性がたかい。なお、157の壺体部には煤の付着がみられ、要として転用されているようである。

158は無頸壺の口縁部である。強く内傾する体部上半をそのまま口縁部とし、端部は少し

上へ引き上げて内側に明瞭な面をつくる。体部外面には粗い縦磨きが観察され、口縁端部直下に紐通し用の小円孔を穿つ。口径11.9cmを測る。

159も無頸壺であるが、158と比べて体部の内傾度が小さく、やや長胴になるものと思われる。口縁端部は若干上へ折り返して突出させ、そのすぐ下に沈線状の条線が一本めぐる。体部外面には粗い縦縦磨きがみられる。口径11.3cm。

160は三角形状の破片で、壺の体部と思われる。幅1.2cm程の粘土帶をV字状に貼り付けている。何かの文様の一部らしいが、あまりの小片のためよくわからない。

161は高環脚部である。外面に脚柱部と坏部の接合変化点をつくらないならかな曲線をなし、脚裾部は小さく開いて明瞭な端側面をもつ。坏部から脚柱部にかけての外側に丁寧な縦縦磨きを施し、その後、上6条、下4条の範描沈線をめぐらしている。周径7.2cmを測る。

162～165は高坏の脚裾部である。162は裾端部をわずかに下方へ突出させ、小さな外端面に1条の沈線を配する。163～165は、ハの字に開く裾の端部を斜め上方へ引き上げた形態が共通し、165には裾端近くに小さな円孔をめぐらす。163にも同じ部分に円孔がみられるが配列はわからない。また164は、暗茶褐色を呈し角閃石・黒雲母の粗粒を含む生駒西麓の土器である。

SK-109出土遺物（図42 166～172）

166は口径42cmを測り、大型の高坏あるいは台付鉢と思われる。直立する口縁直下の内外面に強い横ナデを加え、その上に幅の広い水平面をつくる。面には大きな円形浮文を並べているが、その個数や配置はわからない。口縁立ち上がり部の上下端が横ナデにより幅広の退化四線状をなすほかは、何ら装飾的要素をもたない。角閃石・黒雲母の微粒子を顯著に含み、中河内地方沖積地の土器とみられる。

167は広口壺の類に入るものであろうか。やや外開きに立ち上がる頸部から、内面にわずかな稜をつくって口縁部が外反し、口縁端部は拡張せず、明瞭な端面をなすのみである。また、肩の張らない体部は外面に縦縦磨き調整を施すが、内面には顯著な指圧痕と接合痕がみられ、内外とも器表の凹凸が激しい。口縁部の成形がややいびつであることも含めて、かなり粗製の土器といえる。口径13.3cmを測る。

168は高环脚柱部である。四線文あるいは櫛描直線文風に範描き沈線を7条並べている。

169～172は壺・甕の底部である。169は体部の外側下端に顯著な範削りを加えているが、それだけでなく外底面にも範削りがみられる。172では内面・外側ともにきわめて密な縦縦磨き調整が施されている。大型の鉢であろうか。

SK-108出土遺物（図43 173～175）

173は、口径21.5cmを測る中型の甕である。口縁部はくの字に屈曲して厚みを増し、端部を少し上へ引き上げるとともに、端面下端に細かな刻み目を加えている。体部は内面が指頭痕を残すナデ調整を主体とし、外面は丁寧な継刷毛調整が施されるが、その上端は横ナデによって痕跡が消されている。

174の甕は、やはりくの字に屈曲する口縁の端部を肥厚させ、端面に1条の凝凹線をめぐらす。体部外面には叩き成形の痕跡が認められ、その上に継刷毛調整を施している。

175の底部は、体部下端の底部周縁に明瞭な指圧成形痕がみられる。

SK-107出土遺物（図43 176～177）

176は壺口縁部の小片であるが、粗粒の黒雲母・角閃石を含む生駒西麓の土器で、つよく外反する口縁の端部を斜め下方へ引き出している。

177は、推定口径16cmほどになる大型の水差し形土器と思われる。口頸部の中程に、構先の刺突による斜格子文をめぐらし、その上に3本+α、下にも5本+αの凹線を配している。明るい淡黄褐色の色調を呈し、器壁の保存はきわめて悪い。SD-101から同一個体とみられる頸部の破片が出土している。

SK-113出土遺物（図43 178～181）

178は、ラッパ状に大きく外反する壺の口頸部で、口縁端部を斜め下方へ引き出して端面に円形浮文を置く。円形浮文は3個一対で2単位が残るが、その間隔から8方向に配されたものとみられる。口径20.2cm。灰茶褐色を呈し、雲母や角閃石は目立たないが、中河内沖積平野部の土器と思われる。

179もまた、178と比較的類似する壺と思われ、こちらは雲母・角閃石の顕著なチョコレート色の胎土をもつ生駒西麓の土器である。体部上端から頸部と、口縁端部の下側に付加した粘土帯の部分のみが残っている。

180は大型の高壺あるいは台付鉢とみられるもので、壺下部から脚柱部にかけて残っている。胎土に顕著な砂粒が少なく、器表が淡赤茶色、器肉が淡黄灰色のサンドイッチ状を呈する特徴的な土器であるため、破片でも他と区別しやすい。そのため、SK-113と第8層だけでなくSK-124からも、同一個体とみられる破片が、検出された。脚部に径1cm程の透しが1個残っているが、それ以外に装飾的なものはなく、遺存部分では壺部内底の大きな粘土板のみが目立つ。

181は壺の底部と思われ、底部周縁に指圧痕がめぐる。

SK-124出土遺物（図43 182～184）

182は壺の蓋であろう。直線的に大きくひらき、蓋の端部を面取りする。その端端に小さ

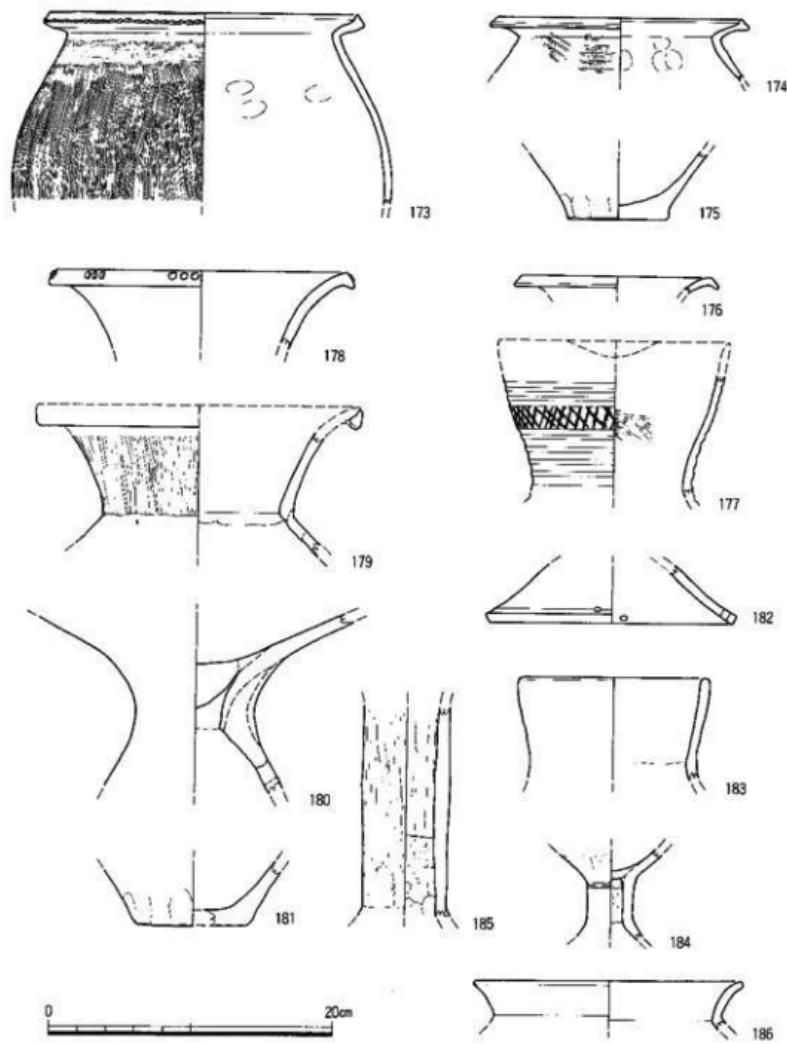


図43 SK-107・108・113・124・132、SD-109出土土器

く2個一对の円孔をもつ。口径17.0cmを測る。

183は短頭壺とすべきものであろうか。ほぼ直立する頭部の上端をそのまま丸くまとめて口縁部とする。摩滅のため調整等不明。口径13.0cmを測る。

184は小型の高杯で、脚柱部から坏部下端を残す。脚柱は高さ3cmほどの円筒状をなし、その上下が大きくひらいて坏部と据部へ移行する。坏部内底は粘土塊を充填し、脚柱上部には2~3条の中途半端な篦引き沈線が施されている。

SP-132出土遺物（図43 185）

185は高杯脚柱部で、太さ5.5cm、残存長15cmほどの筒状を呈す。外面はかなり摩滅・剥離が進んでいるものの細かな縦篦引き調整が認められ、内面は上5分の3に明瞭な絞り口を残すが、下部は横方向に篦削りが加えられている。脚柱下端は、外面に粘土紐を繰ぎ足して据部を成形した接合痕がわずかながら確認され、その作業に伴うものか内面には指圧痕がみられる。角閃石・黒雲母を含む灰茶褐色を呈し、中河内沖積地の土器と思われる。

(2)弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構に伴う遺物

SA-101および関連遺構出土遺物（図44 187~213）

SA-101の床面遺物は皆無であったため、埋土中より出土したものと関連遺構の遺物を掲げておく。

187~192は住居址埋土中の遺物である。

187は、SA-101の埋土がND-2に七塊として崩落した部分から出土した壺の口頭部である。体部上端からやや内傾ぎみに短く立ち上がる頸部と、比較的明瞭な屈折部を境として直線的に大きくひらく口縁部からなる。口縁端部は下端を下方へ引き出し、斜め下向きの幅広い端面をつくっている。その端面には叩き成形の跡らしき右上がりの乱雑な条痕がみられ、端面の上下端にも叩き板の跡のような不規則な刻み目状の痕跡が残っている。また頸部から口縁部にかけての内面には、ほぼ全体に幅の広い縦磨きが施され、頸部外面にも縦方向の磨き調整がみられる。口径16.8cmを測り、器表は淡灰褐色、器肉は灰黒色を呈する。口縁部の形態は通常の壺内の壺に類例を見ないもので、どちらかというと東日本の色彩がつよい。限定的なことは言えないが、おそらく愛知県以東の地域からの搬入品か、もしくはその強い影響を受けてつくられたものではないかと思われる。

なお、192は187に比較的近接して出土した底部で、胎土と器面の状態が187と酷似し、同一個体の可能性がたかい。木葉痕を残す径4.5cmの底部が大きく突出し、周縁には指頭痕がめぐる。体部外面には叩き成形の痕が残ってその上を丁寧にナデ消しており、内面は顕著な刷毛目調整が施されている。

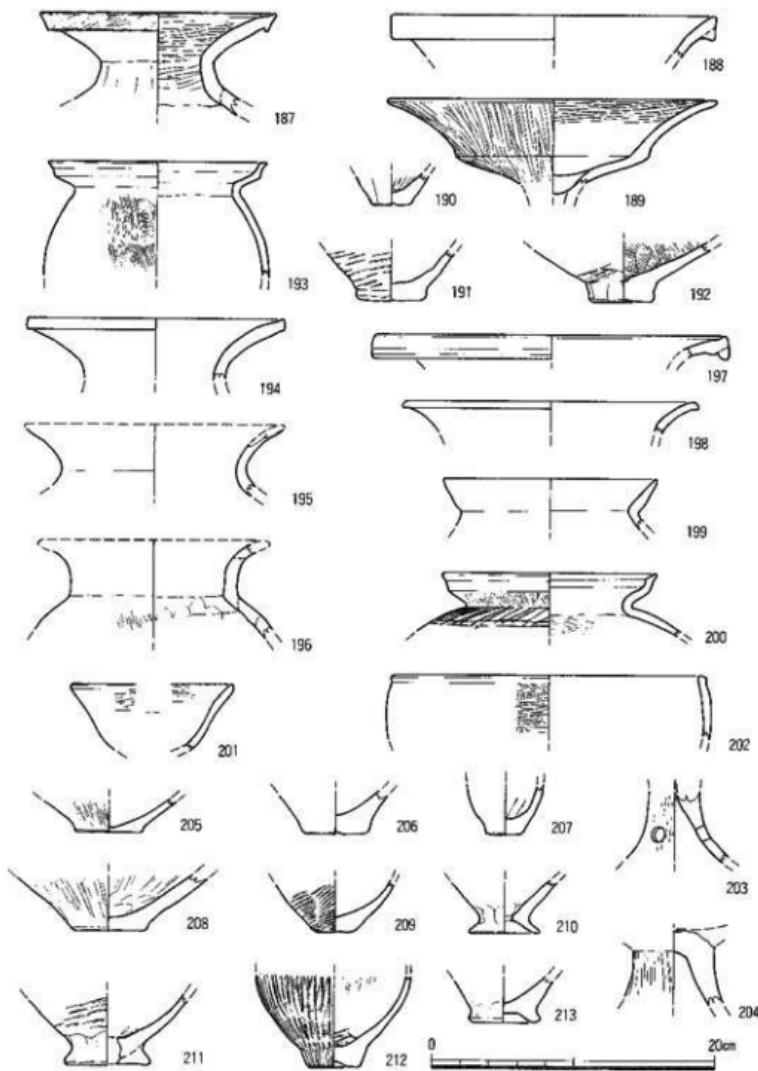


図44 SA-101、SD-102、SK-128・129出土七器

188の壺口縁は、大きくラッパ状にひらく口縁端部を折り曲げつつ若干の粘土を足し、下方へ断面三角状に拡張をしたものである。弥生中期に遡るものであろう。口径22.7cmを測り、粒子の粗い角閃石・黒雲母を含むチョコレート色をした胎土をもつ生駒西鏡の土器である。

189の高杯は、187と同様ND-2への崩落土から検出した破片と第8層から出土した破片が接合した。脚部をまったく失っているものの壺部は全体の4分の3が残る。口縁立ち上がり部の長さと外反度がきわめて大きく、内底には粘土塊充填を行っている。また外面全体は総、口縁内面は横の範磨き調整が著しい。口径23.0cm、庄内式期に下るものであろう。

190は底径2.4cmのごく小さい底部で、鉢形土器と思われる。191の底部は外面上に顕著な叩き目を残す。甕であろう。

193は、SD-102より出土した甕である。体部はあまり肩の張らないもので、外面に総刷毛調整が明瞭である。体部と口縁部のつけ根に頸部にあたるごく短い直立部分のあるのが特徴的で、口縁部は大きく外反したのち稜をつくって斜め上方へ立ち上がる。口縁端部はつよい横ナデによって外側へ若干引き出しているため、側面が幅広の深み状となり、上面は水平をなす。口径15.2cmを測る。いわゆる受口状の口縁部であるが、畿内のものとは通有性がなく、口縁下の頸部直立部や口縁下半の大きな開き具合に特徴がある。丹波あたりからの搬入品の可能性がある。

194~213は、SK-128・129より出土したものをまとめた。

194~196は甕の口縁部で、短く立ち上がる頸部と大きく開く口縁部となる。195と196は口縁端部を欠損するが、肥厚・拡張せず装飾性のないものとみられる。

197は水平に近い角度をもつ口縁部小片で、下側に粘土帯を継ぎ足して垂下させ、外側に端面をめぐらす。口径24.6cmを測る。

198は外反して開く口縁部小片であるが、比較的薄づくりで、甕の口縁部と思われる。

199も甕で、くの字に屈曲して短くのびる口縁は急激に厚みを減じる。

200は、体部がかなり張りのつよい球形に近いものと思われ、肩部に先を尖らせた鋭い工具を使用して斜線文をならべ、その下に半裁竹管を使ったような2条の平行沈線がめぐる。口縁部はつよく外反した後、外面に稜をつくって立ち上がり、端部をつよい横ナデでもって斜め外上方へ引き出す。口縁下半外面には顕著な総刷毛調整痕が残り、口縁端部上面は内傾する明瞭な面をつくる。口径15.0cmを測る。近江南部からの搬入品であろう。

201は高杯の口縁部であろうか。内鬱する体部の上端がわずかな屈折をみて外反する。口縁部内外面に横範磨き調整が施されている。

202は弥生中期に遡る鉢形土器の一種と思われる。若干の内鬱傾向をもちつつ直立する口

縁部で、上端に外傾する端面をもち、外面は細かな横凹磨きが施されている。

203は高杯脚柱部で、3方向に円形透かしを穿つ。

204の脚柱部は最小径5.4cmとかなり太い。

205~212は壺・甕・鉢等の底部である。205・208は、体部の外傾度が大きく、外面に縱凹磨きを施しており、壺の底部と思われる。207は体部径5.5cm前後ときわめて小型のコップ状を早する。211は底部周縁に粘土を付加して、周囲から指頭圧を加え底部を大きく突出させる。体部外面に明瞭な叩き痕を残し、内面は範調整ののち、丁寧なナデを加えている。鉢形土器であろうか。209・210・212・213も鉢と思われる。209では底部周縁の叩き成形痕が丸みをもたず多角形状を呈している。212は叩き目が完全に直立する方向で施されている。210・213では、底部周縁に強い指頭圧成形が加えられ、脚台あるいは高台状に近い形状となる。

SA-102および関連遺構出土遺物 (図45 214~234)

SA-102は、深さが10cmに満たず、遺物の残存状況が悪く、埋せより出土した3点を図示し得たにすぎない。SK-126・127からは比較的多くの遺物が検出されてたので、あわせてそれを掲げる。

214は住居址埋土より出土した壺口縁部である。口縁は大きな角度で開き、端部を斜め下方へ折り曲げ、その下へ若干の粘土を付加して厚く肥厚させている。口縁端面はかなり内傾する幅広い面をなし、その端面と内面上端に同一意匠の細かな波状文をめぐらせ、口縁上端に小さな円形浮文をならべている。口径21.4cmを測る。胎土に微細な雲母・角閃石を含み、灰茶褐色を呈する中河内沖積地の七器と思われる。なお、この土器は弥生中期に遡るものであろう。

215・216も同じく埋土中より出土したものである。甕あるいは鉢の底部とみられ、216では明瞭な叩き成形痕を残している。

217~234はSK-126・127から出土したものまとめた。

217~220は壺である。

217は強く外反する口縁部が、肥厚しつつやや下を向く端部を形成し、その上側を少し突出させる。側面には退化した凹線を2条めぐらしている。口径20.7cm。

218は頸部から口縁部にかけて変化点をもたず強く外反する。口縁端部は肥厚させないで上端を上へ少しつまみ上げ、端面には1条の緩凹線を配する。紐通し用の小円孔が2個残っているが、そのうち一つは貫通していない。

219は頸部から口縁部にかけてよく外反し、口縁端部を断面三角状に下方へ突出させたもので、幅広い外端面には装飾はない。口径17.0cmを測り、粗粒の角閃石・黒雲母を含む

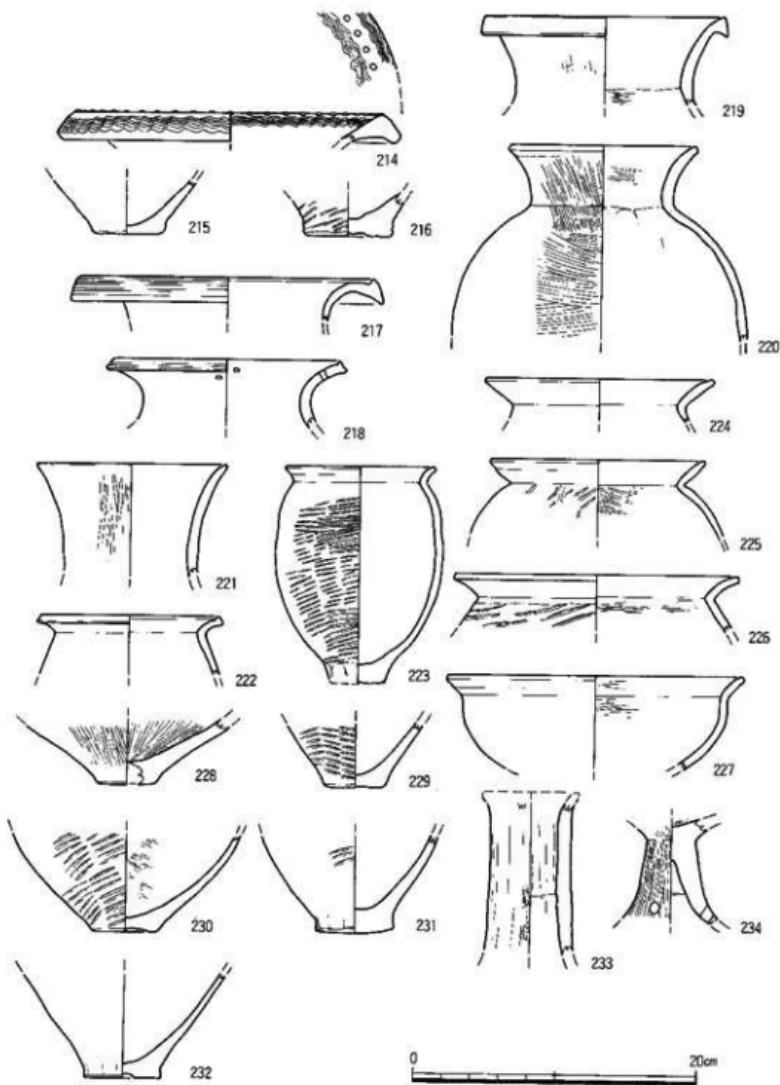


図45 SA-102、SK-126・127出土七七器

でチョコレート色を呈する典型的な生駒西麓の土器である。

217~219は弥生中期（第IV様式）に遡るものであろう。

220は、球形に近い体部から立ち上がった口頸部がよわく外反するもので、ほとんど装飾性がない。体部外面は上端に縦刷毛が残るもの、以下はすべて横刷毛調整が施され、内面は全面的に指頭成形痕がみられる。また頸部外面には縦籠磨きを加えている。口径13.0cm、残存高14.5cmを測る。

221は長頸壺の口頸部である。長く立ち上がる頸部は少し外反し、口縁端部を尖りぎみにつくる。摩滅が著しいものの外面の縦籠磨き調整が観察される。口径13.2cm。

233は、当初弥生中期の高環脚柱部かと考えたが、細頸壺の頸部とみたほうがよさそうである。口縁端部を欠き、径5.8cm前後の円筒状をなす。外面は縦刷毛調整のち、縦籠磨きが加えられ、内面には棒状工具による成形痕がみられる。

222は小型の甌で、弥生中期のものであろう。内傾して肩の張らない体部から口縁部がくの字に屈曲し、わずかに外反しつつ口縁端部を上へつまみ上げる。口径12.4cmを測る。

223は小型の甌である。卵形の体部に小さく外反する口縁部がつき、底面は大部分破損しているものの指頭圧により成形されたしっかりした平底をもつようである。体部外面にはおよそ横方向の叩き目をそのまま残しているが、器面に凹凸があり口縁の形状もいびつで、かなり粗雑なつくりとなっている。口径10.5cm、最大腹径12.0cm、器高15.4cmを測る。

224~226はやや大きい甌で、球形に近い体部から内面に明確な陂をつくって外反する口縁がつく。225・226は体部外面に叩き目（右上がり）が残り、内面は横方向の刷毛凹調整が施される。また口縁端部は224~225では丸くなっているが、226は明確な端面をつくっている。

227は鉢形土器である。内傾して立ち上がる体部から、弱くくの字に屈曲して外反する口縁部がつく。体部上半から口縁部にかけての内面には横刷毛調整が施されている。

228~232は甌・鉢等の底部である。そのうち228は、比較的小さな底部から低角度で大きくひらく体部がたちあがる。内外面ともに縦方向の丁寧な籠磨き調整が施されており、鉢の底部と思われる。229・230は外面の叩き目を残し、231でも摩滅著しいが叩きの痕跡がみられる。これに対して232は内外面ともナデ調整で仕上げられ、底部周縁を指頭圧でやや突出させている。

234は円錐状にひらく高環の脚柱部で、小さな円形透かしを三方にあけている。

SK-131出土遺物（図46 235~245）

SK-131では、薄く粘土を貼った層の上下から遺物が出土したが、特に上層で完形に復元できるものがまとまって検出されている。まず上層の遺物から紹介する。

237は壺である。多くの破片があるが全体をうまく接合復元できなかったので、主な破片から推定岡上復元を行った。体部は張りのつよい偏球形に近い形状で、小さいが明瞭な底部がつく。口縁部はわずかに外反しつつ短く立ち上がる簡素なものとし、口縁端部もやや尖りぎみとして丸くまとめるのみである。外面は体部から口縁部にいたるまでナデ・横ナデ調整で仕上げ、体部内面は下部三分の一が刷毛調整、それ以上には指圧痕が目立つ。口径10.2cm、推定腹径22.0cm、推定器高21.8cmを測る。

238は大型の鉢である。大きく突出する底部から内側して立ち上がる体部の上端をわずかに内傾させ、口縁部がくの字に屈曲して斜め上方にのびる。体部下半は内面に縱籠磨きを放射状に施し、外面も横刷毛目のうち粗い縱籠磨きを加えている。体部上半は内外面とも横ナデ調整を施して外面の刷毛目を消し、内面にはさらに縱籠磨きを行っているようであるがこちらは摩滅のため痕跡程度にしか観察できない。やや赤みを帯びる特徴的な胎土で、休側部に大きく黒斑がある。またわずかながら煤の付着が認められ、煮炊きに利用されたらしい。口径35.7cm、復元器高18.6cmを測る。

240は壺である。倒卵形の体部に突出度の少ない底部をもち、口縁部は内面に鋭い棱をつけて外反する。口縁部は上方へはっきりとつまみ上げ、外側端面に2条の疑凹線をめぐらしている。体部外面にはその上半（肩部）と下端（底部周縁）に明瞭な叩き口が残るが、口縁部の付近は横ナデによって消去し、体部の中位から下半も弱いナデのうち縱刷毛調整を加えて叩き目を消している。内面もナデ調整を主体としつつ刷毛目も観察されるが体部中位の刷毛目と下位の刷毛目、そして内面の調整に使われた刷毛はそれぞれ原体が違うようである。つまり体部中位内外面では外面の刷毛がかなり網筋であり、一方外面下位の調整に使用された刷毛は筋目の山立たないもので、中途半端ながら削りを意識したようなつよい力が加えられているかにみえる。口径16.2cm、復元高27.1cmを測る。

244は壺の底部と思われ、外面に叩き目が見られる。

241の高坏は、坏部上半から口縁部にかけての破片が上層から、脚柱部上半から坏部下半におよぶものが下層から出土し、色調や調整が酷似するので同一個体と見なして岡上復元を行った。口縁部はやや外傾し、厚みを増しつつ直線的にたちあがり、端部に明瞭な面をつくるとともに外側面には籠描きによる疑凹線を4条めぐらしている。体部は内外面とも縱方向の籠磨きを放射状に施す。口径19.8cmを測る。

下層より出土した土器では、242の高坏を除いて他はいずれも破片が小さい。

235は水差形土器と思われ、やや外傾して直線的にたちあがる口縁部の外面に疑凹線文を幾重にもめぐらしている。

236は壺形土器であろう。おそらく外傾して短くたちあがる頸部から、内面に明確な棱を

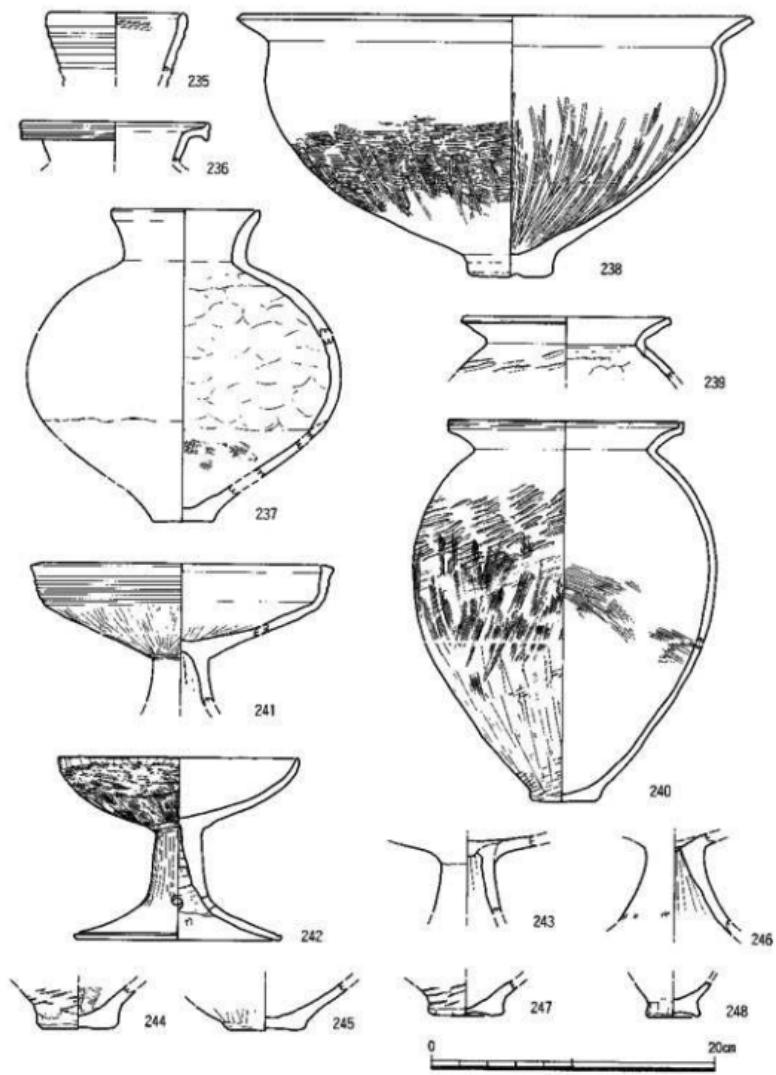


図46 SK-131・122出土土器

つくって口縁部が外折し、端部は上下に拡張して外側端面に2条の窓凹線を配する。

239はくの字に屈曲する甕の口縁で、端部に明確な端面をもつ。体部は張りの強いものらしく、内面に指圧痕が顕著で外面の叩き目は半ばナデ消されている。口径14.4cmを測る。

242は、下層の土器のなかで唯一完形に復元できたもので、口縁部が内側してたちあがる浅い碗形の坏部をもつ高坏である。坏部は、口縁部を指押えて成形したのち外面に継ぎの刷毛目調整を加え、そのうち口縁部に近い上半のみに横方向の刷毛目調整を施す。脚部は細目の脚柱部から裾部へつよく外反してのび、端部の上面に1条の沈線をめぐらしている。脚柱部には継ぎの箇磨きを加えるが、裾部へ屈曲する部分には指圧痕がのこり、円形透かしを四方に配する。裾部全体が不定方向のナデ調整によって仕上げられ、口縁部も含めて横ナデ手法のまったく用いられていないためか、全体に粗雑な印象を受ける土器といってよい。口径16.7cm、脚径14.7cm、器高13.0cmを測る。

243は高坏の脚柱から坏部下端の部分で、脚柱部は円錐状につくられ、坏部内底中央は粘土塊充填が行われている。

245は、低角度で大きく開き外面に磨き調整がみられることから壺の底部と思われる。

SK-122出土遺物（図46 246～248）

SK-122は、弥生中期のSK-132を切り込んで掘られた小さな土坑で、少量の弥生時代後期の土器が出土している。

246は高坏脚柱部で、上部が大きくすぼまり柄に向かってつよく外反する。

247は甕、248は鉢の底部であろう。

SK-119出土遺物（図47 249～255）

SK-119は調査区の南部にあり、ND-3によって遺構の半ば以上を抉られているが出土内式併行期の土器が多く出土した。ただしいずれも保存状態が悪く、器表風化著しい。

249は二重口縁形態をもつ甕の口縁部である。直立する頸部から内面に稜をつくって一旦外反したのち再びたちあがった口縁部が強く反り返る。口縁部外面には粗雑な波状文が施されるがこれがきわめて怪奇なもので、原体の軸線を頻繁に動かし、描き継ぎや描きおしも多く、弥生中期の精美な波状文と対照をなしている。また口縁立ち上がり部の下端には竹管文付円形浮文を8個ならべ、さらにその下の稜部には刻みをめぐらす。口径22.2cmを測る。

250は小型の鉢である。小さな底部から斜め上方へ真っすぐのびる体部をそのまま口縁部とし、端部にのみ弱く横ナデを施す。体部外面には全面に指圧痕が残り、内面はナデ調整とする。口径10.7cm、器高7.1cmを測る。

251は周縁に指圧痕を加えて底部を突出させたもので、小型の壺か鉢になるであろう。

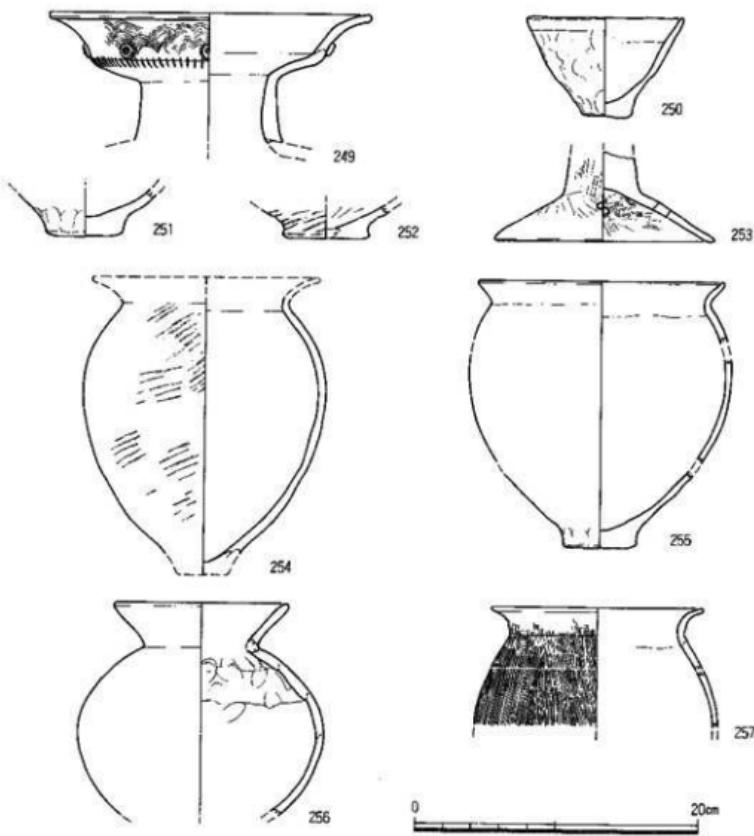


図47 SK-101・119出土土器

252は外面に明瞭な叩き目を残す。体部の開き具合からみて球形胴に近い甕と思われる。254の甕は、口縁部と底部を欠損するのが体部の大部分は残っている。しかし摩滅・風化が著しく、技法的には体部外面の叩き目がわずかに認められるにすぎない。

255も破片の数は多いが、うまく接合復元することができず、やむなく図上復元となつた。口縁部はくの字に屈曲し、底部は指頭圧により突出させているが、器表はほとんど剥離していて成形・調整技法はわからない。口径16.9cm、復元器高19cm程度を測る。

SK-101出土遺物（図47 256～257）

SK-101はSK-113とSK-124の間で検出された土坑で、内部よりの遺物は少ないがその上

面で2個体の土器がまとめて出土した。

256は底部を欠き、休部と口縁部も接合面をもたないが、胎土・色調がまったく一致するので図のように復元した。休部は球形に近く、直線的に斜め上方へ短くたちあがる口縁部がつく。体部内面上半には指圧痕が著しく、他はナデ・横ナデ調整を主体として仕上げられている。口径12.0cm、最大腹径17.4cmを測る。

257は、甕の体部上半から口縁部にかけてのものである。休部は外面に縱刷毛調整を施し、一部口縁下半にまでおよんでいる。口縁部は内面に明確な稜をつくらないまま強く外反するもので、横ナデ技法により成形・調整され、端部は厚みを減じつつそのまま丸くまとめている。口径14.6cmを測る。

SK-130出土遺物（図48 258～282）

SK-130はSA-102を切り込んで掘られた正円形の大きな土坑である。埋土の中程にある黒色灰を含む薄い粘土層を境として上層と下層にわかることは先に述べた。しかし、遺物を検討したところ上層の土器と下層のそれでは顕著に差を見いだすことができなかったので、ここでは両者をまとめて紹介する。

258は大型の壺であろう。直立する頸部から内面に稜をつくって口縁部が外反する。口縁端部は上下に大きく拡張し、幅広の外側端面には竹管付円形浮文を上下二段にならべるが、その間隔・個数は不明。径1～2mmまでの顕著な砂粒を多く含み、赤みがかった特徴的な胎土をもつ。口径20.3cmを測る。

259の壺は、直立する頸部から口縁部がつよく外反し、端部に向かってやや厚みを増す。口縁端面には細く中途半端な、箇書き沈線を2条めぐらしている。口径13.6cmを測る。

260もよく似た状態であるが、口縁端部を欠き、頸部の直立がより目立つ。

261は甕の体部上半から頸部にかけてのものである。最大腹径26cm程度に対して頸部径は8cm程度と、頸部の縮まりがつよい。体部外側は全面に縱箇書きが施され、内面はナデ調整を主体とする。

262はごく小型の壺である。ほぼ球形の体部に中央を窪ませた小さな平底をもち、口縁部はわずかに外傾して短く立ち上がるのみである。体部外側下半に磨き調整が施されているものの、成形・調整は全体にかなり粗雑で、口縁の横ナデも粗く、立ち上がりの高さが場所により不揃いとなっている。口径7.2cm、器高7.7cmを測る。

263と264はともに小片ながら、近江産甕の体部片と思われる。ともに箇描の文様をもち、263では弱い箇描直線と列点文を交互に2段配置し、264では先に200で見たのと同じ鋭利な工具による斜線文と箇描列点文を重ねている。

265の口縁部は器台ではないかと思われる。斜め上方に大きく開く筒部から口縁部が屈折

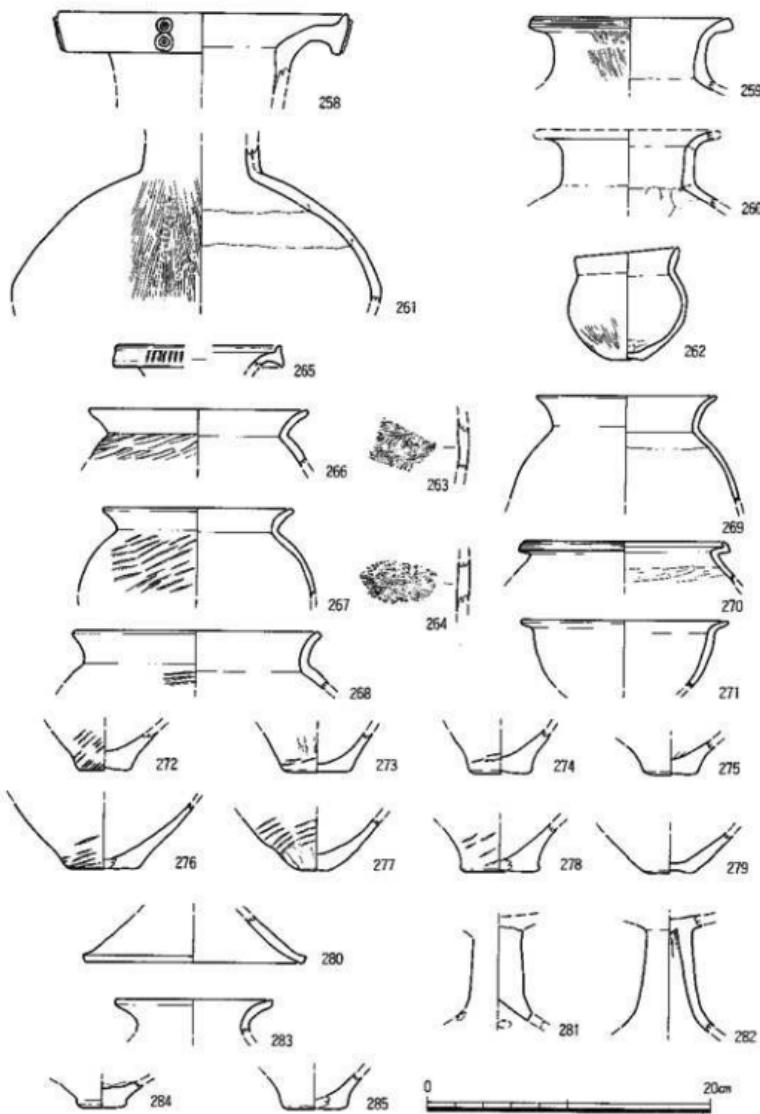


図48 SK-130、SP-147・164・167出土土器

して水平方向に短くのび、端部は上下に拡張して端面に描画列点文をめぐらす。

266と267はよく似た形態の甕である。球形に近い体部の外面に右上がりの叩き目を頗るに残し、内面はナデ調整とする。口縁部は内面に明晰な稜をつくってくの字に短く外反し、端部は面をなさず丸くまとめる。口径は266が15.3cm、267は13.2cmを測る。268も類似形態の甕であろうが、口径17cmほどとやや大きい。

269の甕はやや形態が異なる。体部はあまり肩の張らないもので、口縁は直立ぎみに立ち上がった後強く外反し、端部はまるくまとめる。器表は全面的に摩滅していて、成形調整技法についてはほとんどわからないが、全体に薄造りで、口縁部については比較的丁寧な横ナデ調整が施されているようである。体部に叩き成形が加えられたかどうかはわからないが現状ではそれらしい器表の凹凸はみられず、内面にのみ指圧痕らしい痕跡が認められる。口径12.4cmを測る。

270は甕口縁部の小片である。彎曲少なく内傾する体部上端から、口縁部が鋭角に外反して短く水平にのび、端部を上方へ引き上げる。やや内傾する口縁端面には2条の縦凹線をめぐらしている。口縁部から体部外面にかけては丁寧な横ナデ調整が施され、内面には横方向の箇削りが加えられているようである。

271は鉢である。内彎しつつ立ち上がる体部の上端をよわく外側へくの字に折り曲げて口縁部とする。器表の摩減著しいが、体部外面に叩き目の痕跡がわずかに認められる。

272~279は壺・甕・鉢等の底部である。だいたいのものが外面に叩き目を残すが、275と279ではその痕跡がまったく無い。特に279は直線的に開く薄めのつくりが特徴的で、細頸壺である可能性がたかい。274・276は叩き目の上にナデ調整を加えているようで、これも壺かあるいは鉢になるのではなかろうか。また273は叩き目の上に刷毛調整を施し、277は底部の周縁に指頭成形と弱い箇削りを加えて尖底化、あるいは丸底化を図っている。なお、274は角閃・黒雲母の石微粒子を含んで灰褐色の色調を呈し、中河内沖積地の土器と思われる。

280は高環脚壺部であろう。大きくひらく壺端部に小さく面取りしている。

281と282は高環脚柱部である。281は完全な中実で、壺部へ移行するあたりに円形すかしをあけている。それに対して282は比較的薄造りの中空で、上端の環部内底中央には粘土塊を充填しているとみられる。

なお、SK-130の上層より出土したものは260・261・265・266・268~270・275・276・280・282、下層の遺物は258・259・262~264・267・271~274・277~279・281であるが、その他に下層より出土したものとして313(図51)の砂岩製砥石がある。

SD-109出土遺物（図43 186）

SD-109は、調査区の北端部、SD-101の西側にある細く短い溝で、変形土器が1点出土した。

186は比較的大型の甕と思われ、口縁部がくの字に屈曲して斜め上へのび、端部近くは外反する。横ナデによる成形・調整が行われているとみられるが、摩滅のためよくわからぬ。口径18.8cmを測る。

その他のピット出土遺物（図48 283～285）

ピットは多数検出されているが、出土遺物は少なくいずれも小片にすぎない。ここではSB-103に伴う柱穴のものを含め3点のみ紹介する。

283は、調査区南壁沿いのSK-118の東に接するSP-164より出土した。つよく外反する口縁部の端部をかるく面取りしたもので、甕あるいは小型の壺になるかもしれない。口径10.9cmを測る。

284はSP-147、285はSP-167より出土したもので、ともにSB-103にともなう柱穴である。形態からみて284は壺、285は甕の底部と思われる。

（3）遺物包含層（第8層）出土遺物（図49・50 286～310）

286は口径28.8cmに達する大型の壺で、直立する頸部から口縁が大きく外反し、縦口縁をなす端部に粘土を付加して大きく上下に拡張する。やや外傾して幅3.5cm程もある外側端面には、その下年に備び波状文をめぐらした上に円形浮文（個数不明）が貼り付けられている。器表の剥離が著しいため技法の詳細はわからないが、口縁内面に横方向の箇磨き、頸部外面には横ナデ調整が施されている。

287は無頸壺である。つよく内傾する体部の外側に粘土を繕ぎ足して断面三角状に肥厚させ、口縁部としている。その口縁部成形にともなう強い横ナデによって、内側にかすかな稜ができ、肥厚部分の上面はほぼ水平をなす平坦面、さらに外側面には駆凹線が1条めぐることとなっている。口径内径12.4cmを測る。

288は、径1.4cmの小さなボタン状とでもいうべき形であるが、壺蓋のつまみ部分であろう。わずかに残る斜面部には箇磨き調整が加えられている。

289は、小型の甕である。口径15.6cm、最大腹径13.1cmと口径の方が大きく、あまり張らない体部から口縁部がくの字に曲がって斜め上方へのびる。摩滅・剥離のため器表はほとんど残っておらず、わずかに口縁部の横ナデが痕跡程度に確認されるだけである。胎土に角閃石・黒雲母を多量に含んでチョコレート色を呈する生駒西麓部の土器である。

290・291は鉢形土器で、幸いともにはば完形に復元することができた。290はおよそ半球

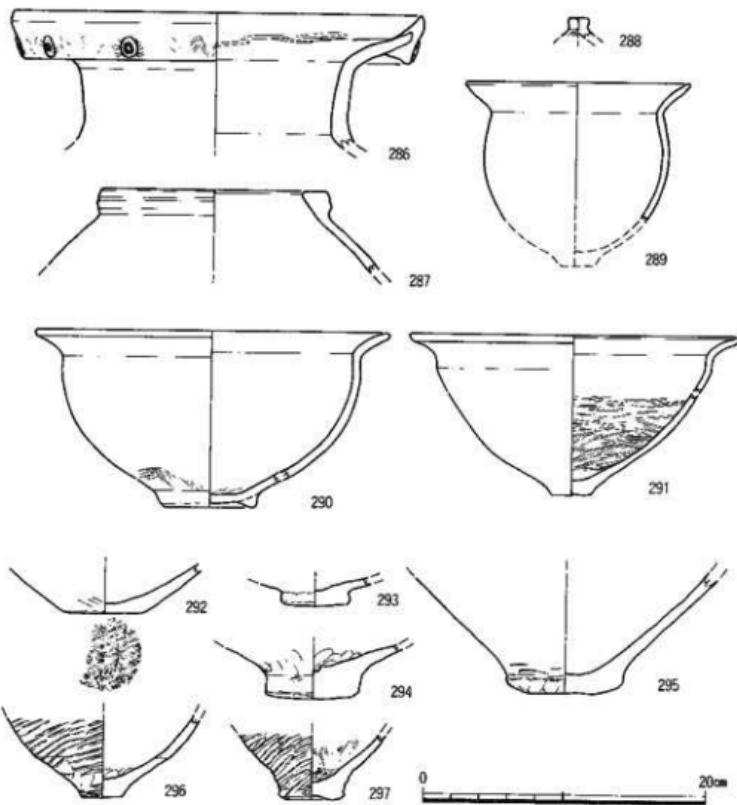


図49 第8層出土土器(1)

形の体部からよわくくの字に外折する口縁部がつき、底部はリング状の粘土紐を貼り付けて高台状としている。体部の大半と口縁部は器表の摩滅が激しく、技法の詳細はわからないうが、外面の底部周辺には叩き目がわずかに残っており、その上に縱方向の箒磨きを施している。また内底面には指押えの痕跡が認められる。口径24.6cm、器高12.5cmを測る。

291は体部下半がかなりすぼまりぎみに造られ、小さな平底の底部をついている。やはり器表の摩滅・剥離が著しいが、体部内面には横方向の箒磨きが観察され、外反する口縁の端部は少し上へつまみぎみにつくられている。口径23.2cm、器高11.4cmを測る。

292~297は壺・甕等の底部を一括した。

292はほとんど突出しない薄い平底に造られ、外面はわずかに叩き目の痕跡がみられるが、ほとんどナデ調整によって消される。また底面にも叩き目が残っている。293・294は反対に底部の突出が大きく、体部が低角度で開くとともに、294では内底面に顕著な指圧痕がある。295は底部全体の成形がかなり粗雑で、体部内外面は剥離著しいが外面では叩き成形の上にナデ調整が加えられているようである。これらは体部の調整にナデを多用し、叩き目を消すことが共通しており、その形態からも壺底部の可能性がたかい。

296・297は叩き成形の跡が顕著に残り、甌と思われる。296では体部下半の張りがつよく、周縁に強い指押えを加えて底部の縮小化を図っているように見える。また同じ作業にともなうものが内底面にも指圧痕が残る。279では体部下端の底面際まで明瞭な叩き目が残っており、底部の突出が目立つ。

298～310は、器台あるいは高坏の各部分を集めた。

298は弥生中期の大型器台になるであろう。大きくひらく口縁部の上部を下方へ折り曲げて垂下させ、上端に幅1.2cm程の水平面を造っている。また垂下する外側端面には4条の凹線をめぐらし、さらに3本1単位の棒状浮文を貼り付ける。浮文の絶倒数はわからないが現状で6単位は確認され、復元すれば20単位程度もあったのではないかと思われる。おそらく上下が大きくひらく筒状の器台で、凹線文を多用し、大きな凹窓をもつものではなかろうか。口径26.9cmを測る。なお298については、同一個体とみられる大きな口縁部片がSK-103からも出土している。

299も器台の口縁部と思われる。薄造りで大きく開く口縁部の端部を若干上へつまみ上げ、端面に凝凹線状の凹部を1条めぐらす。外面には縦方向の笠磨きが施されている。口径18.2cmを測る。

300は小片ながら弥生中期の大型高坏であろう。直立する口縁部で上端は外側へ少し肥厚させ、外面に3本1単位の棒状浮文を配している。

301も中期の高坏で、碗状の体部上端に水平縁を付けその端を垂下させるが、垂下部は短く1.1cm程にすぎない。水平縁の外径で24.3cmを測る。

302は弥生後期後半の典型的な高坏で、比較的多くの破片を回収したので、坏部と脚柱部、脚柱部と脚鋸部のそれぞれで明確な接合面をもたないものの、図上復元によりほぼ全形を知ることができた。坏部はわずかな彎曲をみせつつひらく体部と外面に明確な稜を持つて強く外反する口縁部からなり、脚部は上のすばまる筒状の脚柱部とまっすぐに大きくひらく鋸部からなる。脚柱部と坏部下端の外面に縦範磨き調整がみられ、坏部内面にも磨きが施されているとみられるが、摩滅のためそれ以上の詳細はわからない。口径23.8cm、脚径15.2cm、復元器高15.1cmを測る。

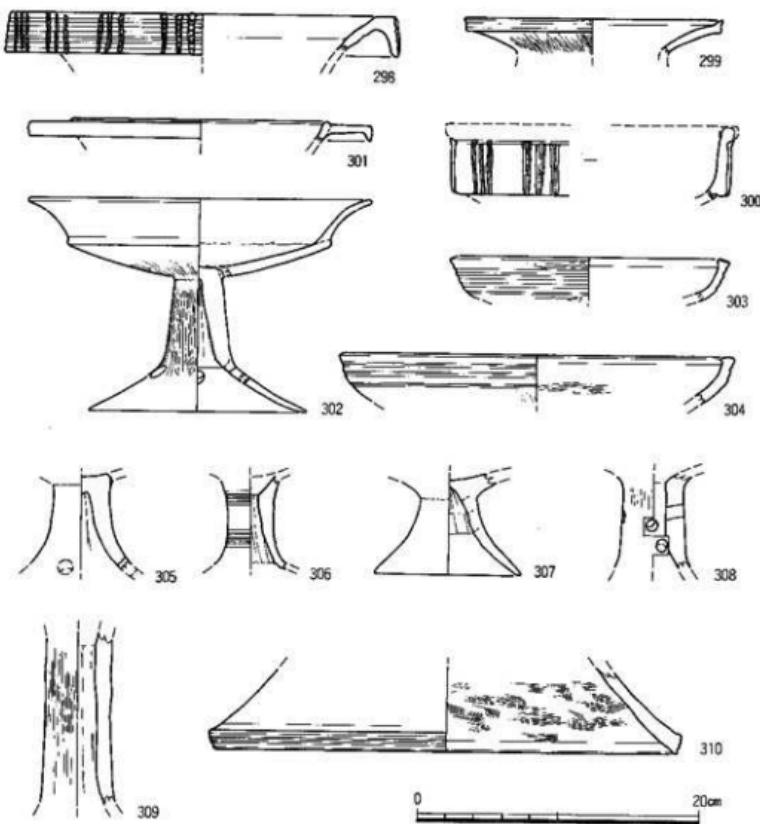


図50 第8層出土器(2)

303と304は口径に差があるものの形態のよく似た弥生中期の高坏である。303の方が小さく口縁部の立ち上がりがつよいが、ともに碗形の坏部で、口縁端部をわずかに肥厚させ、その外面直下に303で4条、304では3条の円線文をめぐらす。また器面調整にはともに磨きが多くされ、前者の外面に横方向、後者では坏部内面に横、同外面には縱方向の箋磨きが施されている。303は口径18.3cm、304は口径27.3cmを測る。

305は、細く紋られた脚柱部から明瞭な変化点をもたずに裾に向かって外反し、円形透かしを三方にあける。

306の脚柱は外側線が下方のみならず上に向かってもひろがり、最も細くなるのが脚柱の

中央やや下である。外面に上下それぞれ4本の籠描き沈線を櫛描文風にめぐらしており、上端中央には粘土塊を充填した痕跡がみられる。

307は太く低い脚柱で、裾部の反りも少ない。透かしは無く、また摩滅著しいため技法的には内面の絞り痕以外観察できない。

309も高环脚柱と思われるが、細長い円筒状を呈する。太さ4.6~4.8cmとかなり細いが、厚みのある器壁なので全体に重量感がある。外面は細い縱窪磨き調整が施され、内面には明瞭な絞り痕跡が残る。

308は器台の筒部であろう。太さ4.2~4.6cm程の円筒状で、器壁が1.2cm程度とかなり厚い。径0.8cm前後の円形透かしを4方にあけるが、その位置が上下ばらばらで、4つのうち2つは貫通していない。おそらく上部は直線的に大きくひらいて端部を拡張する口縁部がつき、下部はやや外反する裾部となるのであろう。

310は弥生中期の大型器台裾部と思われる。外反度は少ないが下方に向かって厚みを増しつつ大きくひらくもので、やや外傾する端面には細い凝凹線が3条めぐっている。内面下端から外面にかけては横ナナド調整を主体とし、内面には刷毛目調整が全面に施されている。樞端径32.6cmを測る。

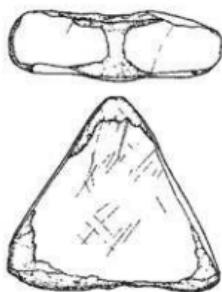
(4)石器および土製品

砥石4点、浮子を含む軽石5点、石鎌1点、削器1点などの石器の他に緑色片岩(13×7.5×5.5cm大)1点、ガラス質安山岩の小片2点の石材が出土した。また、土鍊1点も出土した。なお、SK-108から花崗閃緑岩(8×7.5×5.5cm大)、SD-101から多孔質の凝灰岩質砂岩(5.5×3.5×3.5cm大)の火を受けた礫が1点ずつ検出された。

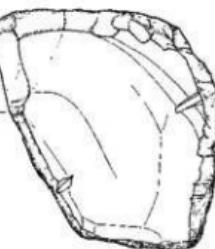
ここでは主な石器と土鍊を図示して解説する。

砥石(図51 311~315)

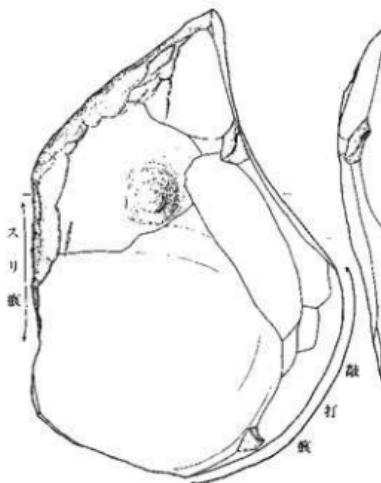
311は、SK-126から出土した中砥である。中生代の砂岩を用材とする。刃辺が10.8cmから11.3cmの正三角形に近い形状をなす。厚みは3.5cmをはかる。図の下側の側面を除く4面に研ぎ作業面を認める。下側の側面には研ぎの作業の痕跡は見られないが、一部に敲打したような跡があり、すべての面が使用されたと考えられる。各作業面は平らではなく、図の表面を例に取ると、面の中央部が深さ3mmほど窪み、各側面に接する部分も辺に平行する作業によって窪む。特に、図の左側は辺から1.5cmの幅をもって中央部の窪みとの間にかすかに稜線を認めるほどである。側面でもその中央が窪むほか、三角の頂点に向かう反りもあり、波打つような様相を呈す。また、図の表面の三角頂点にはひっかきの線状痕が数条見られる。図表面の裏側の面は、研ぎに使用されたのち、敲打に用いられており、面の三



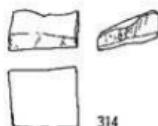
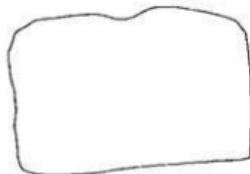
311



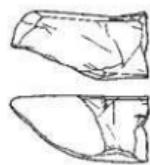
312



313



314



315



図51 石器類(1)

分の二ほどが剥離し、研ぎ面を失っている。

312は第8層から出土した中砥である。311より日の粗い和泉砂岩と思われる砂岩を用材とする。一辺が6.2cmから12.3cmの不整な四角形を呈する。大きな素材を手頃な大きさに分割して得たものであろう。作業の痕跡は、図の表面に顕著に残り、中央が深さ6mmほど窪む。表面の各辺には、辺に直交する独立した研ぎ作業の痕跡があり、辺の棱がとれて丸みを帯びる。直交する研ぎの単位は、線状のものも認められるが、5mmほどから親指の幅ぐらいたまでの。さらに、図の左上角には、その角を中心にして回転させた円錐形の磨き痕が見られる。その磨き面の幅は角から2.7cmと3.8cmをはかり、穴を磨くような作業に用いたとみられ、その基底径5cmから推して、環状石斧のようなものを対象としたものと想像される。

313は、SK-130の底から出土した中砥である。312と同様の砂岩を用材とする。いびつな扇形を呈し、図の左上側面と左下側面の2面に使用痕がみられないほかは、すべてに作業痕が認められる。作業痕には研ぎ・磨きのほかに円形凹みと敲打痕がある。研ぎ・磨きの痕跡は、図の表面と裏面にともに深さ8mm、図の右上側面に深さ14mmと顕著な中窪みの面がみとめられ、随所に大小さまざまな面が観察される。左側面には素材から剥離した面が残るもの、親指幅の磨き痕がV字にみられるし、辺に直交する研ぎの跡も認められる。図の表面中央には直径30mm、深さ5mmの凹み痕があり、四石（叩き台）としての使用も確認できる。敲打痕跡は、図の右下側面の弧の部分全体に顕著にみられ、裏面の研ぎ面にも先の尖ったものを叩いたような跡が認められる。さらに、図の右下側面の一部に火を受けたと思われる少し焼けた跡がある。火を扱う施設の際に置かれたことがあったと想像される。

314は、C3区の第8層から出土した。細かい火山灰を多く含む凝灰岩を用材とした仕上砥である。一面の幅2.8cmから3.6cmの方柱状の砥石であったと思われるが、小口を残して折損した断片である。各側面ともよく使用されているが、面の窪みは目立たない。小口にも筋状の擦り込みがいくつか残る。

315は、SK-131から出土した凝灰岩の石材である。一面の幅3.0cmから3.6cmの方柱状で、小口の一方は破断して失っている。図の上面に平滑な部分があり、仕上げ砥石として使えるが、研ぎの痕跡を積極的に見いだせない。自然石の可能性大である。各面に細い条線を認めるが、これは節理が表面におよんだものである。一部に火痕を認める。

浮子（図52-316、図版37-316・510～513）

軽石を用材とする。軽石は、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・土層に集中して検出され、SD-102(316)、SK-129(510)、D4区第7層(511)、B4区第8層(512)、E5

区第8層(513)からそれぞれ1点ずつ出土した。しかし、確実に浮子として使用された痕跡や加工痕が認められるものは316と513の2点である。

316は、長さ7.8cm、幅5.8cm、厚さ3.9cmの正面觀が不整な三角形を呈する。もともとは扁円形であったらしく、図の裏面を刃物で切って平らに整え、左側面と右側下半部を擦って形を整えている。図の上面にも刃物で切って調整した跡が認められる。右側面中央に紐かけ用の深い筋目を切り込み、上面にも背後にかけて鋭い切り込みがあり、紐ずれの跡が上面から表面と右側面から表面にかけてみられる。この紐ずれの交点となる表面中央に、上端径17mm、下端径8mm、深さ11mmの貫通しない凹みが彫り込まれている。重量は84gをはかる。水に浮かべて計測した結果、浮上部分の容積1cc、水中部分の容積72ccで、わずか1gの浮力効果しかない。

513は、一辺2.5cmから3.5cmまで、長さ6.8cmのいびつな方柱状を呈す。各側面は刃物で切ったり、擦ったりして調整する。上半分、特に上端から2cm以内の各四角に紐かけ用の筋目が2条ずつ切り込まれ、紐ずれの跡が残る。浮力効果は316と同じようなものである。
石鎌(図52 317)

石鎌はE5区第8層から出土した1点のみである。安山岩を用材とし、平基有茎式に分類される。鎌身は二等辺三角形を呈し、全長47mm、身長37mm、基幅22mm、柄長10mm、柄幅6mmをはかる。厚さ4mm弱の薄手の横長剣片を素材とし、表面、裏面ともに刃をつける細部調整を連続しておこなう。柄の成形は主に表面側の細部調整によっている。重さは4gである。

石材片(図52 318)

E5区第7層から出土した凝灰質泥岩である。節理に沿って割れた長方形の石で、一方の小口側を欠失する。図の上面からの加擊によって割れており、欠損は当時のものと思われる。長さ5.0cm、幅2.1cm、厚さ1.1cmをはかる。有馬層群中に含まれる石材で、石器の用材として近隣から持ち込まれたものであろう。

削器(図52 319)

安山岩製で、SK-103から出土した。厚手、大型の剣片を素材とする。主剣頭の打点付近を一頂点とする略三角形を呈する。図の下側は折損して邊をなす。表面は、左上の邊を整形のため打ち擗いたのち、そこを打面として強弱不統一な剣離を連続して加える。裏面は、左邊(表面から見て右邊)に対して細部調整を連続して加え、刃をつける。刃付は側面図が示すように片面のみで、表面は先行する大剣離面を利用する。略三角形の頂点付近にみられる幅広く深い剣離は、細部調整よりも後である。

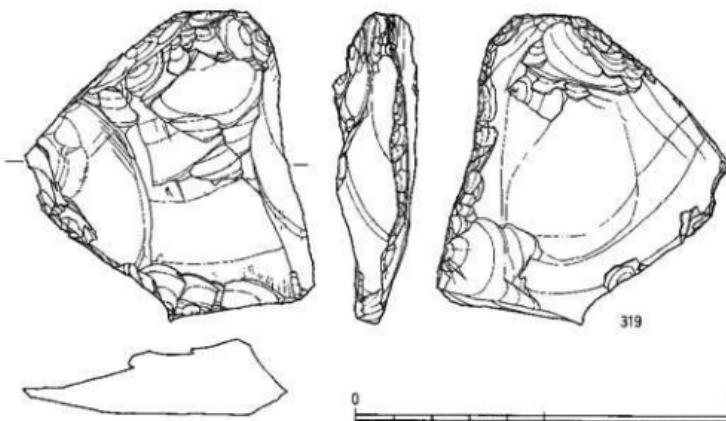
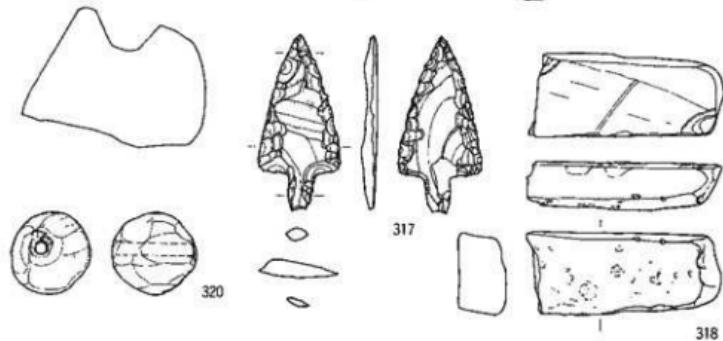
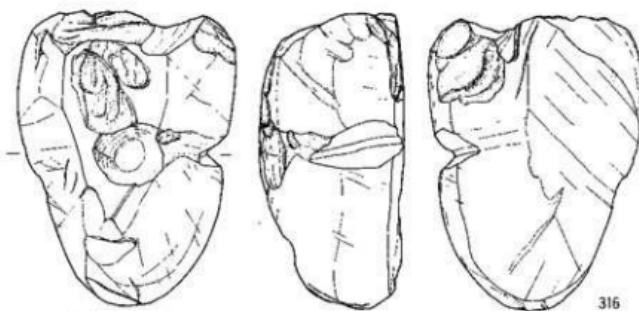


圖52 石器類(2)

土鍤（図52 320）

SK-130から出土した。径21mmの球形をした土製品である。直徑3mmほどの貫通孔があり、孔の周辺の表面に紐ずれのような痕跡がかすかに見られる。上鍤は、孔とする軸に粘土を巻いて作ったとみられるが、軸が棒のように固くて長いものであれば手のひらで粘土を球に丸めこむことはできないので、軸の長さが球の大きさを越えないか、紐のような柔らかいものを芯として丸め、のちにそれを引き抜いて孔を開けたと考えられる。重さは9gである。

(5)木質遺物

下層造構のいくつかから木質遺物が出土している。大半は加工痕のみられない自然木片であるが、上層のSE-1の曲物等も含め取り上げたものすべてについて樹種同定を行った。次節に所見を付した一覧表（表2）を掲げているので御参照いただきたい。

表2にあげたもののうち412～416はSB-102に伴う柱穴より出土した柱根で、そのうち414～416については柱穴断ち割りにより検出した。5点の樹種がいずれも「コナラ属コナラ節」と一致することは留意すべきであろう。ただ、それぞれの遺存状態は極めて悪く、柱としての成形面を残しているものは皆無であるのであえて図示しなかった。大きさは、416が長さ36cm・太さ9cm、414は長さ25cm・太さ7cmを測り、この2点がやや大きい。他の3点は腐食が進んで長さ10数cm・太さ5cm以下の木片になっている。

V 木質遺物の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1 試 料

試料は、服部遺跡(第5次調査)から出土した木質遺物20点である(表2)。このうち、試料401は平安時代前期、試料402~416は弥生時代末~古墳時代前期、試料417~420は鎌倉時代である。

2 方 法

カミソリを用いて新鮮な木材の基本的三断面(木材の横断面・放射断面・接線断面)を作製し、生物顕微鏡によって60~600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比で行い、分類は同定レベルによって属、亜属、種の階級で示した。

3 結 果

樹種同定の結果を表2に示す。以下に同定の根拠等を記載し、図版に各断面の顕微鏡写真を示す。

a. モミ属 *Abies* マツ科

図版38上

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

b. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科

図版38中

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直・水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞か

ら構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には著しい鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりアカマツに同定される。アカマツは、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は重硬な良材で水湿によく耐え、広く用いられる。

c. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

図版38下

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が広く、樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で広く用いられる。

d. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

図版39上

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりコウヤマキに同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽・耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

e. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

図版39中

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が

みられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型でほとんどが1分野に2個存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

f. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版39下

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

g. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版40上・中

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列し、早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

h. ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 図版40下

横断面：小型の道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を越えるも

のもある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅であるが2列幅のものが多い。以上の形質よりヒサカキに同定される。ヒサカキは本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

i. ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科

図版41上

横断面：年輪のはじめに中型の道管が、やや疎に配列する環孔材である。孔圈部外では小型の道管が単独あるいは2～数個放射方向に複合して散在する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織はほとんど平伏細胞であるが、上下の縁辺部は直立細胞である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりウコギ属に同定される。ウコギ属にはオカウコギ、ウラジロウコギ、コシアブラなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木または低木である。

j. 不明

図版41中

横断面、放射断面、接線断面共に木本の形質を呈していない。

4 考 察

弥生時代末から古墳時代前期の木質遺物(試料402～416)は、モミ属、アカマツ、コナラ属コナラ節、コナラ属アカガシ亜属、ヒサカキ、ウコギ属と同定された。いずれの樹種も温帯の照葉樹林域に分布するため、木遺跡周辺の森林から採取することが可能である。コナラ属コナラ節は、弥生時代から古墳時代の遺跡において柱材に用いられる傾向がある。

鎌倉時代の木質遺物(試料417～420)は、ヒノキ、スギ、コウヤマキで、いずれも針葉樹である。中世においてコウヤマキがまれに柱材に使われた例はあるが、やや珍しい出土例といえる。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.
島地謙・伊東隆夫(1988)日本のお出木製品総覧、雄山閣出版、259p.

表2 木質遺物の樹種同定結果

番号	地区	遺構・層位	所見	樹種	種(和名/学名)
401	E-2	SK-1北下	細い棒状自然木 4片に折損	不明	unknown
402	B-5	SK-132南や	長い棒状自然木 細い棒状自然木一端をハモノで斜めに切断 細い棒状自然木3点ハモノで削った跡あり	モミ属	<i>Abies</i> <i>Eurya japonica</i> Thunb. <i>Eurya japonica</i> Thunb.
403			細い棒状自然木3点ハモノで削った跡あり	ヒサカキ	
404				ヒサカキ	
405			自然木片	ウコギ属	<i>Anthopanax</i>
406	E-5	SK-130東や下層	小さい棒状木片2点(長) (短)	コナラ属アガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
407				コナラ属アガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
408	E-5	SK-131南半層下層	木片2点	コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
409	B-4	SP-183	先の尖った木片2点	モミ属	<i>Abies</i>
410				モミ属	
411	D-0	SA 1底面	木片1点	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.
412	D-4	SP-169	棒状木片1点	コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
413	E-4	SP-147	木片1点	コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
414	E-4	SP-148	柱頭	コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
415	E-4	SP-167	柱頭	コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
416	E-3	SP-156	柱頭(太い)	コナラ属コナラ属	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
417	C-2	SE-1	若い棒状木片4点	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
418	C-2	SE-1	若い板状木片多數	コウヤマキ	<i>Sciodaphys vericillata</i> Sieb. et Zucc.
419			蓋か? 円錐状 長方形	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
420	C-2	SE-1	曲物 多数の破片に分解	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.

VI まとめ

1 各遺構の存続時期と前後関係

今回の調査地点では遺構面が上・中・下とした3面あり、上層と下層の遺構面においてはそれぞれ二時期にわたる遺構が検出された。出土した遺物によりそれを整理すると次のようなになる。

下層	I-1期	弥生時代中期後半
	I-2期	弥生時代後期後半～古墳時代初頭
中層	II期	古墳時代後期
上層	III-1期	平安時代前期
	III-2期	鎌倉時代

三枚の遺構面で検出されたすべての遺構のうち、遺物が出土するなどして時期の推定できるものは上記の五時期のいずれかに属し、第4層や第8層の遺物包含層から出土した遺物を検討した結果でも大きくはずれるものはない。

これらの主な遺構について、検出面ごとに整理して変遷を示すと図53のようになる。以下、それぞれの時期の遺構と遺物について若干の所見を述べてまとめとする。

弥生時代中期後半

まず、I-1期とした弥生時代中期後半の遺構は、削平された竪穴住居址と思われる。SA-103周辺の柱穴、SK-103・107・108・109・113・120・123・124・132・134などの土坑群、周溝墓の可能性が考えられるSD-101がある。いうまでもないがすべてが同時併存したわけではなく、すくなくともSA-103とSK-107、SD-101とSK-109・120の併存は考えられない。ただ、SD-101とSK-109については前者が先行するようであるが、その他については調査概要の項でも述べたように前後関係の確証をみいだせない。

一方、出土土器からみれば、弥生中期の土器には横描文や四線文を多用したものが少なく、かつて『⁽¹⁾弥生式土器集成資料編』で紹介された西ノ辻遺跡N地点の土器群に近似するものが多い。

西ノ辻遺跡（東大阪市）N地点の土器群は、端的にいえば中期的な器形と技法を残しつつ横描文・四線文や浮文などの装飾性をほとんど排除している点に特徴があり、中期の土器から全体に簡素な後期の土器への移行を示すものとして、中期末（IV様式末）の位置づけがなされている。しかしながら、西ノ辻N地点の土器群と類似する土器様相がひとつの

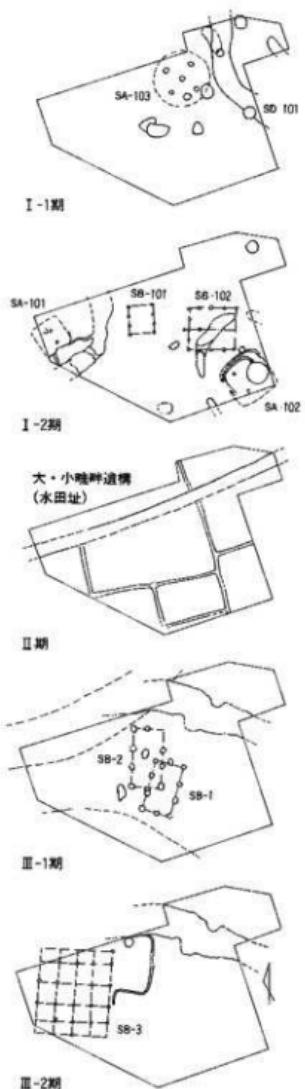


図53 遺構変遷図

様式として成立するほど一般的な広がりをもっているわけではないので、個別的な土器の比較から西ノ辻N地点のものに類似する土器を中期末とする場合が多いように思える。

たとえば140の高環などがその典型といえ、円筒状の脚柱部と环内底の大きな円板充填は中期そのものといえるが、口縁端部を肥厚させず側面に凹線をめぐらさない环部は、後期始め頃のものに近い。166の大型高环も、口縁上面に円形浮文をならべるだけで側面の描文や凹線文はない。壺や甕においても口縁部の装飾をもたないものが多く、西ノ辻N地点の土器に近い様相をみてとることができる。

以上のことからI-1期における集落の存続期間は、弥生時代中期後半でも米の方に中心があるようと思えるが、比較的近接する時期の中で上にみたような遺構の切り合いがあるということは、弥生中期後半の中でもそれなりの時期幅をもって集落が存在したことを示しているのであろう。

また、SD-101がSK-103を取巻く周溝とすれば、円形周溝墓の可能性を考慮しなければならない。近年、円形周溝墓の検出例が増えている中で、周辺地域の事例ではそのほとんどが弥生時代後期末から庄内式併行期に属するものであることが指摘されている。豊中市教育委員会が実施した脇部遺跡第4次や豊島北遺跡第3次など近接地の調査で検出された円形周溝墓も弥生時代後期水のものである。⁽¹²⁾ SD-101とSK-103は弥生中期の終わり頃の遺構である点、特に留意が必要で、結論は今後の調査または類例をまたねばならない。

ちなみに、弥生中期の遺構と遺物は服部遺跡における従来の調査では検出されていない。これまでの調査が遺跡推定範囲の北側および東側に偏っていたからなのかもしれないが、本調査における大きな成果のひとつといってよい。

弥生時代後期後半～古墳時代初頭

I-2期とした弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての遺構は、堅穴住居址SA-101・102、掘立柱建物SB-101・102、SK-101・110・118・119・125～131・133の各土坑、SD-102～109の溝状遺構がある。

これらのうち、SA-102（建て替えを含むためSA-102-1・SA-102-2と区別する）を切り込んでSK-130が掘られ、SB-102はSA-102の外側をめぐる土坑群SK-125・126と重なり、SB-102の柱穴がSK-125を切り込んでいる。さらに北西から南東へ細長く伸びる小溝SD-106はSB-101を完全に横切っているなど、それぞれの遺構が前後関係にある。一方SK-128・129とSD-102・103はSA-101の、またSK-118・125～127・133はSA-102の外部施設として造られたものと推定され、当然ながらそれぞれの同時存在が考えられる。

出土土器の面からみると、この時期の遺構で最も古くなりそうなのはSK-131である。埋土が明確に上下に分層でき、上層から壺・甕・鉢各1点のまとまった遺物が出土し、下層からも完形に復元できる高環が検出されている。このうち下層の高環（242）がわずかに古い様相をもちV様式の中壺頃に比定されるが、上層のもの（237・238・240）もあまり隔たることなくV様式の後半に考えられ、庄内式併行期まで下る遺物は含まれていない。

SA-102の床面・埋土からはほとんど遺物が出土していないが、その外部施設と考えられるSK-126・127までまとまった土器が出ている。なかには中期に遡るものや後期中頃の土器もあるが、おおむね弥生時代後期末に収まるものが多い。

SA-101では、埋土より出土した高環（189）が明らかにV様式より後出の特徴をもつ。SK-128出土の近江産甕（200）は庄内式併行期とされるもので、209～213の甕と鉢の底部もV様式にはあまりみられないつくりになり、タタキ成形も独特である。このような点から、SA-101の存続時期はSA-102よりも新しいとみることができる。ただSA-102-2とした拡張後の住居と共存する時期がなかったかといえば、それについては何の確証もなく、両住居の併存期があった可能性も充分念頭に置いておかねばならない。

掘立柱建物については、再三述べているようにSB-102が堅穴住居址SA-102の廃絶後に建てられたことは明らかである。遺物の面からその存続時期を特定することができないが、SA-102を庄内式併行期に少しかかるぐらいまで存在したと考えれば、必然的にSB-102も庄内式併行期以降（古墳時代前期）に下る建物とみななければならない。

SB-101は他の遺構と明瞭な切り合い関係なく確實に伴う遺物もないので、相対的な前

後関係さえ論じにくい。ただ、遺構面を直接覆う第8層の遺物をみても、布留式土器はいうまでもなく、細筋の叩きと内面籠削りを施したいわゆる庄内甕が軽片さえ含まれていなことは重要で、下層遺構面のすべての遺構の下限は河内庄内甕の浜津流入より以前に取まる可能性がたかい。したがって、その前提でいうならばSB-101も庄内式併行期の前半までの範囲で考えてよいであろう。また消極的な理由ではあるが、SB-101がSB-102やSA-101・SK-128と適度な間隔を開けるとともにSB-102と比較的近い方向性で建てられていることから、その両者と存続時期を同じくする可能性はたかいように思える。

SA-102を切り込んで掘られた大きな七坑SK-130では、出土土器の数はかなりあるものの個々の破片が小さく、必ずしも良好な一括資料とはいえない。ただ細かく観察すれば、甕の体部が球形に近いものとなっていることは明瞭で、277のように底部周縁に指押えと削りを加えて尖底化をはかっているものがあること、備描文を施す近江甕の存在、わずかな平底を残す小型直口甕など、おおむね庄内式併行期のものとみて差し支えないであろう。その点、SA-102を切り込んで造られた遺構として矛盾ないが、あまり大きく期待を離てたものではない。SA-102焼絶後の遺構として掘立柱建物SB-102と極めて近い時期になることは多言を要さず、SB-102の存続期間内にSK-130が掘られたという可能性も充分考えられる。

他の遺構で遺物から時期を推定できるものとしては、SK-101とSK-119がある。

SK-101では比較的大きな破片で甕と甕が1点づつ出土しているが、256の甕はほぼ球形を呈する体部と短く直線的にひらく口部が特徴的で、庄内式併行期まで下る可能性もあるが、刷毛目調整を多用する甕(257)との共存を考えてV様式末あたりにおきたい。

SK-119では、249の二重口縁装飾甕や253の高環脚部が明らかに庄内式併行期のもので、他の甕・鉢もその時期と考えて矛盾ない。

以上の点をまとめ、I-2期に属する遺構のうち主なものをあえて三段階ぐらいに区分し、前後関係を示すとつぎのようになる。

第一段階 SK-131

第二段階 SA-102、SK-101・126~128

第三段階 SA-101、SK-128・129、SB-101・102、SK-119・130

古墳時代後期

II期とした古墳時代後期の遺構は、大小の畦畔を伴う水田遺構である。

千里丘陵以西の西浜津地方では、水田遺構の調査例はまだ少ない。遺構の性格から、直上に洪水砂が被るような状況がなければ、平面発掘はもとより土層断面観察でも水田と認識しにくい。また、通常は遺物の出土が極めて少ないので、試掘調査に際して遺跡と

認定されずに終わってしまう場合が多いだろう。水田の存在がある程度予測できる場合も遺構が水田のみという場合は発掘調査の対象とならないことが多いというのも実情ではなかろうか。本調査においても、上層と下層の遺構面は試掘結果から事前にわかっていたものの水田面の存在がまったくの予想外であったことは既にふれたとおりである。

さて、今回の調査で検出した水田面は、水田遺構としてとりたてて大きな特徴のあるものではないが、「大畦畔」としたものは畦というよりも道状遺構と呼ぶにふさわしく、いさか注目してよい。「道」の概念は極めて広く、「けものみち」のことばからもわかるように人間だけでなく大型野生動物さえ特定のルートを歩き続ければ道はできる。しかし遺跡の発掘調査では、大地にある程度の工作を加えたものでなければ「道」として検出可能な遺構とならない。主なものをあげれば、①切り通し道、②土を盛り上げた道、③側溝で区画された道の三つぐらいが想定でき、近年の大規模な発掘調査では古代の官道をはじめとしてそのような工作を加えた道遺構の検出も増えている。

「大畦畔」は上記の②に該当する小規模な道である。今回の調査範囲だけではその性格を推定することは難しいが、両側に水田のひろがる中を東西に貫いている状況から、畦畔としての性格を持ちつつも現代人の語感でいえば「農道」「里道」のような小規模な道であったことが想像される。単に村と村をつなぐ道であったかもしれないし、低地の水田開拓に先立って設けられた開発道というような意味を持っていたことも考えられる。

いずれにせよ平野部の遺跡においては、集落近辺に水田のみでなくこのような造成道路が検出されることも充分念頭に置いて今後の調査を進める必要があろう。⁽⁴⁾

なお、この占墳時代の水田や道遺構は洪水によって埋没し放棄されたようであるが、その後、平安時代の遺構が形成されるまでは砂質土層の複雑な堆積に終始し、安定した耕作面・生活面がない。ND-2・3・4のように狭い範囲に新旧の河道が集中していることからみれば、奈良時代を前後するころには自然環境が不安定で洪水を繰り返し、耕地化できなかったのかもしれない。

平安時代前期

III-1期とした平安時代前期の遺構は掘立柱建物SB-1・2と土坑SK-1があり、SD-6以外の小溝のうち何本かはこの時期になるかもしれない。

SB-1とSB-2はともに二間×三間ではほぼ同規模であるが、柱穴の切り合ひ関係から前者の先行することがあきらかで、SK-1はそのいずれかにともなう土坑ではないかと思われる。

出土遺物としては、SK-1から少しまとまった量の須恵器・土師器が出ている。器種としては須恵器・土師器とともに碗皿の類いをまったく含まず、壺主体である。その壺が、須恵

器では高台の矮小化や消滅と蓋がみられないこと、土師器では磨き調整や暗文がほとんど施されないことなどが特徴としてあげられる。全体として律令期的な器種構成を残しつつその末期的な様相を持っているといえ、およそ9世紀頃のものと考えたい。

SB-1・2の柱穴やSP-8からも少量の遺物が出土しており、中に少し遡るかと思えるものがあるものの、それほど大きな時期幅があるとも考えられない。第4層の遺物も平安時代のものについてはほぼ同じような内容をもっており、これらの遺構が9世紀頃の比較的短い期間に形成されたことを裏付けている。

一方、自然河道ND-1は最終的な肩が第4層を切っているので、室町時代頃まで河として存続したと思われるが、その最深部で平安時代前期に属する高坏(110)が出土している。あまり摩滅しない大きな破片であることから、河道としての形成がSB-1・2の存続時期か、その後ぐらいで遡る可能性も考えられる。ND-2・3は、両者とも比較的均一な砂で埋まっているのであまり長い期間存続した河とは思えない。そのうちND-2は平安期以降の遺物をまったく含んでおらず、ND-1に切られていることなどからみて、おそらく平安時代前期にはすでに機能していなかったのではないかろうか。また、ND-3は、SK-1などよりわずかに新しく10世紀代に入るとみられる碗形態の黒色土器・須恵器が出土していることから、SB-1・2の存続期間も存在していたのではないかと思われる。いずれにしろこの二つの河が、次の鎌倉時代にSB-3が建てられるころには完全に埋まっていたということだけは間違いないまい。

鎌倉時代

III-2期とした鎌倉時代の主な遺構は、掘立柱建物SB-3と井戸SE-1、小溝SD-6である。

SB-3は、梁間三間、桁行四間の二面庇付と推定されるかなり大きな建物で、東西8.5m、南北10.0mを測り、建坪は85m²ある。その北東側に1.5m程離れて設けられた井戸SE-1を北半部に取り込むような形で、SB-3の東側を凸字状に区画しているのがSD-6である。

出土遺物をみると、SB-3の柱穴やSE-1・SD-6などより出土したものは比較的共通した様相をもつ。土師器皿は口縁部にていねいな一段ナデが施されて端面をなすものも散見し、瓦器碗はほとんどがいわゆる「和泉型」と思われるが、内面の磨き調整が比較的密に施され、口縁部外面に二段ナデと粗雑ながら磨き調整の残るものがある。これらの特徴をみるとおよそ13世紀の前半を中心とするものようで、鎌倉時代でも初頭から前半期に形成された遺構ではないかと思われる。

第4層の遺物はやや時期幅がみられ、土師器皿50のように明らかに平安時代末に遡るも

のある一方で、鎌倉時代末まで下るかと思われる53のようなタイプもある。瓦器碗は摩滅した小片が多く詳細はわからないが、遺構出土のものと比べるとやや新しいものが多いようである。

掘立柱建物SB-3が何十年にもわたって使用されたとは思えず、建て替えられた様子もないが、以上のような鎌倉期の遺物の様相をみると、遺構面自体は鎌倉時代のほぼ全期間を通じて生活面として続いているように思われる。第4層に南北朝時代から室町時代に下る遺物は含まれていないので、おそらくそのころまでに居住地としては放棄されたのであろう。

2 搬入土器について

下層の遺構・包含層から出土した遺物のうち、河内の上器をはじめとする在地でつくられたものではない土器が含まれていることは出土遺物の項で既に述べた。その問題について若干ふれておく。

この「在地産ではない」土器は、通常搬入土器と呼ばれることが多い。土器の運ばれ方が、人の移動・移住や商品流通、また政治的な支配関係などさまざまな歴史事象を反映しているであろうことは、これまでたびたび論じられており、近年の考古学上のおおきなテーマのひとつとなっている。⁽⁵⁾

今回の腹部遺跡の調査で出土した「在地産でない」と考えられる土器を図54に集めた。いうまでもなくこれらは、図化した上で本書に掲載した資料の中から抽出したもので、一部同一個体と思われるもの、搬入品という確証のないものも含んでいるが、全部で23点ある。そのうち、上の15点が中河内の上器である。

河内の上器については、角閃石・黒雲母を含んで暗茶褐色（チョコレート色）を呈するものが早くから注目されているが、いうまでもなくこれは河内全域に一般的な胎土ではなく、西ノ江遺跡など東大阪市を中心とする生駒山西麓部に限られる上器で、最近は「生駒山西麓の上器」「生駒西麓産」と呼ばれることが多い。これに対して生駒西麓からさらに西へ下った瓜生堂遺跡など沖積地の土器は、全体に胎土の粒子が細くなるのにあわせて角閃石・黒雲母も細くなり、色調はわずかに緑がかったような淡灰茶褐色のものとなる。仮にここでは両者をあわせて、中河内の上器と呼んでおく。もちろん、この言葉は中河内の土器すべてがこの種の胎土をもつことを意味しているのではない。

この中河内の上器、とりわけ生駒山西麓の上器が特に注目されるのは、その胎土・色調が極めて特徴的であるからであって、壺や甕の体部小片のようなものでも識別できるため特に目立っているということは注意しておかねばならない。つまり、たまたまわかりやすい

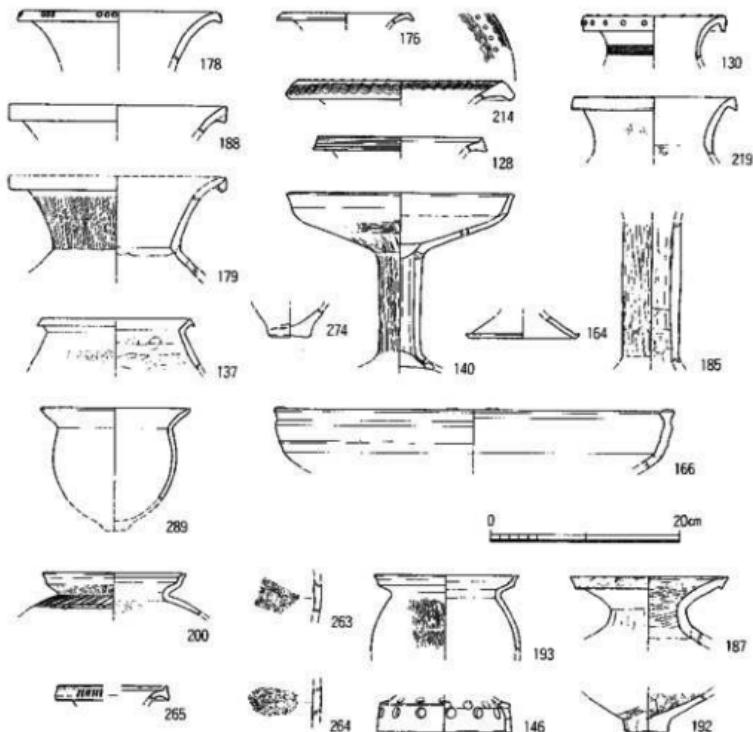


図54 摂入土器

から注目されているという面があることは否定できず、畿内とその周辺部における中河内の土器の移動が、北河内・南河内をはじめとして大和・和泉・山城・摂津など他地域の土器の移動ときわだった差をもっているのかどうかは、今後の検討課題として考えてみる価値があると思う。

中河内の土器における胎土の特徴は、まさしく角閃石・黒雲母という有色鉱物種を多量に含むことによるものであることはいうまでもない。それは、元をただせば中河内の地質構造に起因している。すなわち、角閃石を含む花崗閃緑岩等を起源とする砂礫が純粹に天成された極めて特殊な地質・地形環境が生駒西麓地域にあることに由来する。あえていうなら、生駒西麓地域と類似環境のものに角閃石を多量に含む砂礫や粘土のあるところなら、チョコレート色の生駒西麓の土器とおなじものがあっても何ら不思議ではない。比較的早

くから河内の土器の胎土に酷似するとして注目され、播磨などにもたらされて「雲母土器」⁽⁸⁾と呼ばれている東讃岐の「下川津B類土器」もその一例であろう。

図54に掲げた中河内の土器15点のうち、中期のものが13点を占める。さらにそのうち壺は1点のみで、壺8点、高杯4点であり、壺が突出して多いことは特筆してよいと思う。また収録した中期の土器は、庄内式併行期の遺構や包含層から出たものも含めて80点あるが、そのうち13点が中河内の土器ということは、該期の土器全体の約16%を占めていることとなる。図化したごく一部のなかでのデータなので、必ずしも全体の様相を示すものとはいえないが、参考としておく。

近江の土器は4点ある。壺の体部小片である263と264は同一個体の可能性が高く、265は近江の土器という確証はないが、200は庄内式併行期の典型的な南近江の壺である。⁽¹⁰⁾淀川にそって北摂方面までは近江の土器が比較的多くもたらされているようであるが、千早丘陵を越える西摂地方には少ない。あるいは該期のものとしては西端の出土例になるかもしれない。

193は特徴的な口頭部の形態から丹波亀岡盆地あたりの土器ではないかと考えているが、未確認である。⁽¹¹⁾

146の異様なほどに円孔を空けた脚部については、まったく同じというわけではないが、龍野市の斐久山・前地遺跡で凹線文を多用しつつたくさんの円孔をめぐらした類似形態の脚部が出土している。厳密には搬入品という確証がないが、この方面からもたらされた可能性は高いように思える。⁽¹²⁾

187と192は同一個体と思われる。やや内傾する短い頭部、直線的に大きくひらく口縁部、斜め下向きの口縁端面など、畿内の壺ではほとんど見ない形態で、いかにも東国の大壺という印象がつよい。具体的な故地を限定することができないが、愛知県以東の土器ではないかと思う。あるいは、近江あたりで東国の大壺厚な影響のもとに作られたものという可能性も考えられる。

以上、腹部遺跡の調査で出土した「在地産でない」土器をみた場合、中河内の土器が弥生時代中期に意外なほど入っていること、庄内式併行期には東の地方と交流がありそうだということなどが判明した。

註

- (1)小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡N地点の上器」『弥生式土器集成資料編』、I 1968
- (2)伊丹市口酒井遺跡や神戸市東灘区深江北町遺跡などで弥生時代末期～庄内式併行期の円形周溝墓が検出されている。
- (3)近藤 広「土器からみた湖南的要素と湖東的要素 - 弥生時代後期後葉から古墳時代前期を中心

に『滋賀考古』第7号 1992

近藤 広「受口状口縁をもつ近江型土器の再検討—近江南部の受口状口縁甕を中心に」『滋賀考古』第12号 1994

このほかにも、近江の土器に関してはいくつもの論考が発表されている。

(4)当調査会が1994年に実施した神戸市東灘区本山中野遺跡の調査においても、低湿地につくられた造成道路二本と手を加えられない自然発生的な道を一本検出している。

浅岡俊夫・古川久雄・梅川光隆・古環境研究所『神戸市東灘区本山中野遺跡—道路状遺構の調査一』六甲山麓遺跡調査会 1995

(5)土器の移動に関する論考は数多いが、以下にそのごく一部をあげる。

米田文孝「搬入された古式土師器—浜津垂水南遺跡を中心として」『関西大学考古学研究室設立参拝周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室編 1983年

米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』第1集 考古学を学ぶ会 1985

阿部嗣治「土器の移動に関する一試考」『東大阪市文化財紀要』I 関東大阪市文化財協会 1985

森岡秀人「土器の交流」『考古学ジャーナル』252号 ニューサイエンス社 1985

国下多美樹「近江型甕についての一試論 弥生時代中期～後期の山城と近江の交流関係ー」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会編 1986

松下 勝「播磨のなかの四国系土器」「今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢」今里幾次先生古希記念論文集刊行会 1990

波辺 分「長越遺跡における土器の搬入形態」「今里幾次先生古希記念 播磨考古学論叢」同上

森岡秀人「土器の移動 1西日本」「占墳時代の研究 6 土師器と須恵器」雄山閣 1991

(6)河内の土器一生駒西麓の土器に関する論考は数多い。

藤井直正「河内の土器」「河内考古学」2 1968

佐原 真「大和川と淀川」「古代の日本」5 近畿 角川書店 1970

菅原正明・西宮克彦・佐原真ほか「生駒西麓の土器」「東山遺跡」大阪府教育委員会 1979

西宮克彦・菅原正明「統生駒西麓の土器」「大阪文化誌」関大阪文化財センター 1982

秋山浩二「河内からもち運ばれた土器—山城・乙訓出土の生駒山西麓出土土器ー」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古希記念事業会編 1986

(7)生駒西麓地域の地質環境については、註6文献中の西宮克彦氏の論考に詳しい。

(8)松下 勝「播磨のなかの四国系土器」(注5に同じ)

(9)大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII 下川津遺跡 第2分冊』香川県埋蔵文化財研究会 1990

⑩注3に同じ

⑪森岡秀人氏教示。

⑫岸本道昭ほか「養久山・前地遺跡」(龍野市文化財調査報告15) 龍野市教育委員会 1995

同書43ページ第25図61の土器。

図 版



遺跡周辺鳥瞰遠景（南から）



同上（南東から）



発掘調査地区鳥瞰遠景（南から）



発掘調査地区鳥瞰近景（東から）



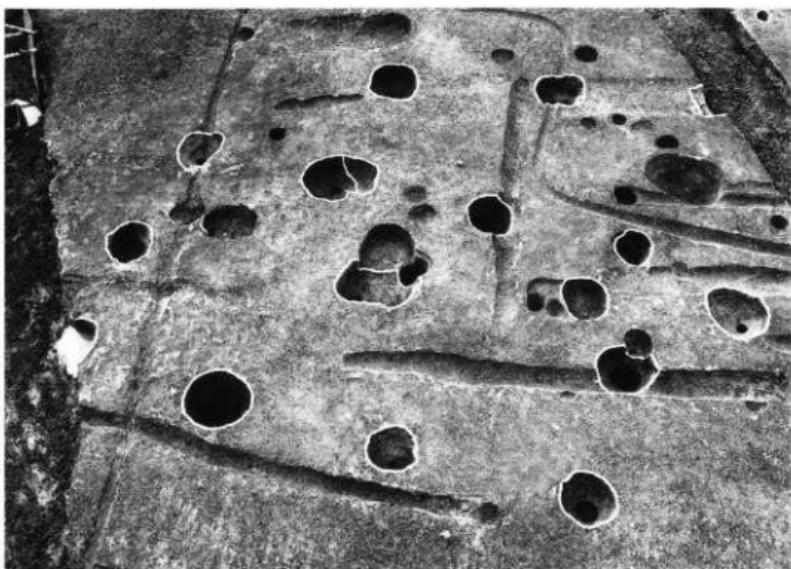
上層造橋垂直全景



上層造橋鳥瞰全景（南から）



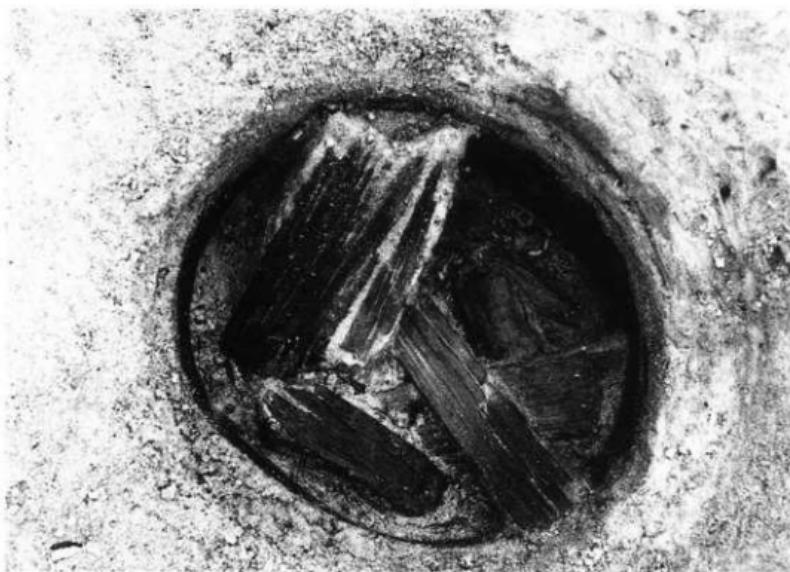
南調査区上層遺構全貌（西から）



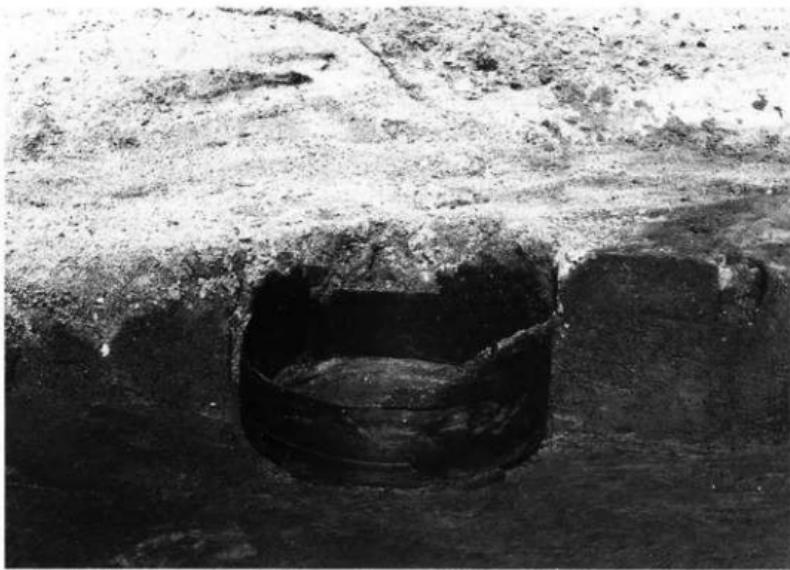
SB-1、SB-2 全景



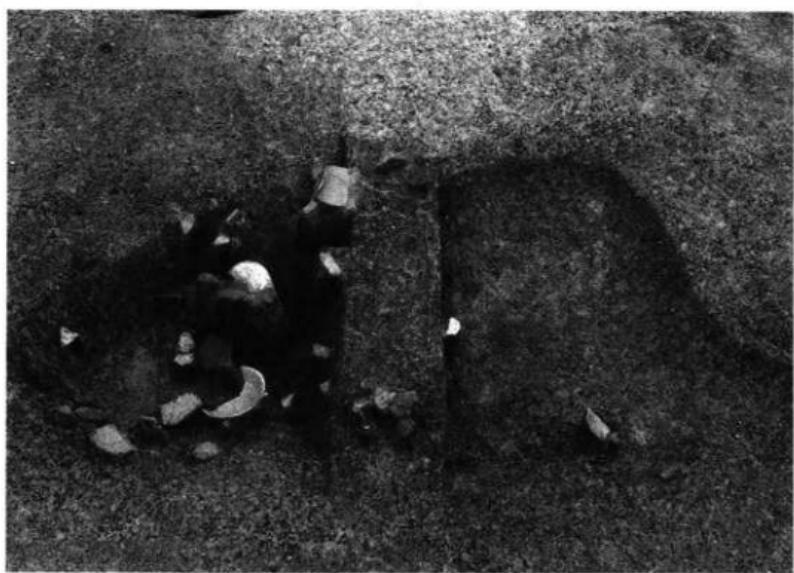
SB-3 全景



SE-1 平面



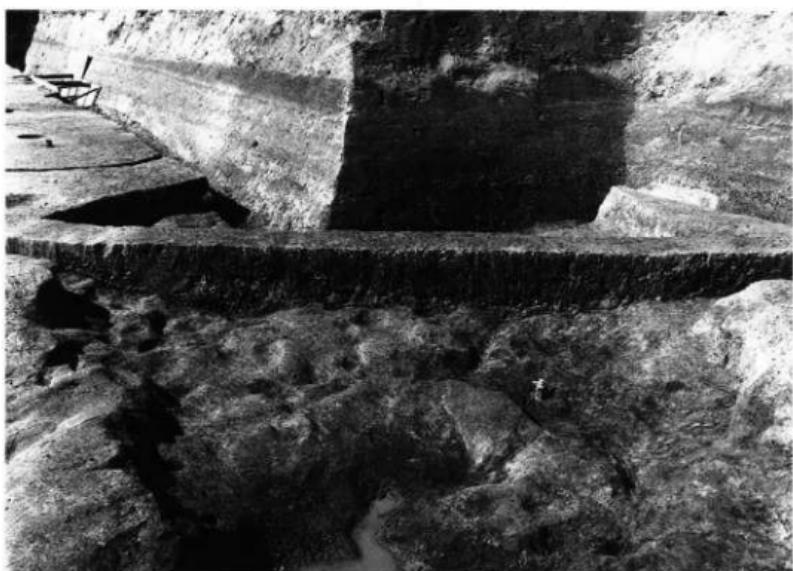
SE-1 立面



SK-1 平面



SK-1 遺物出土状況



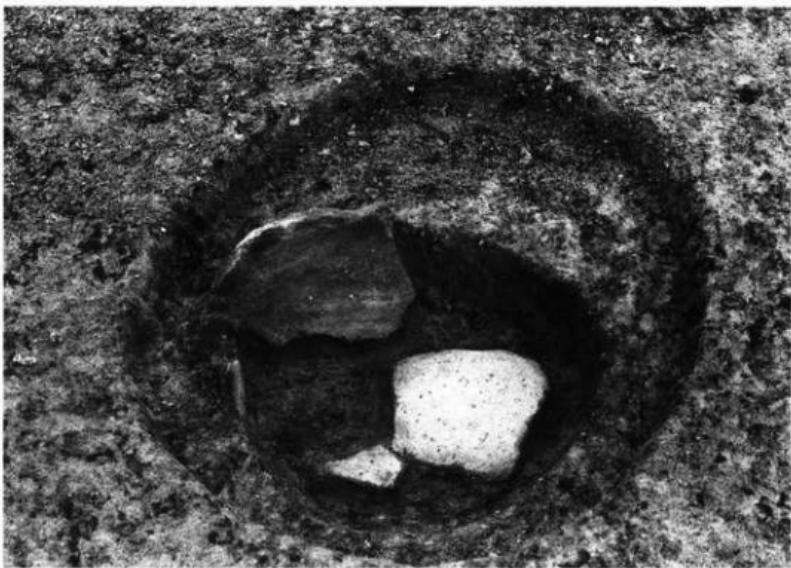
ND-1 断面



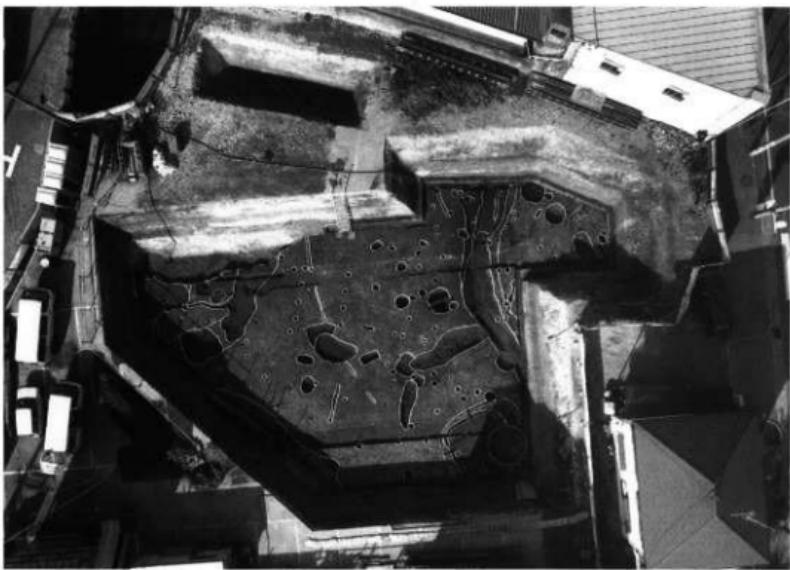
SD-6 土師器 (40) 出土状況



SP-43 瓦器碗 (14) 出土状况



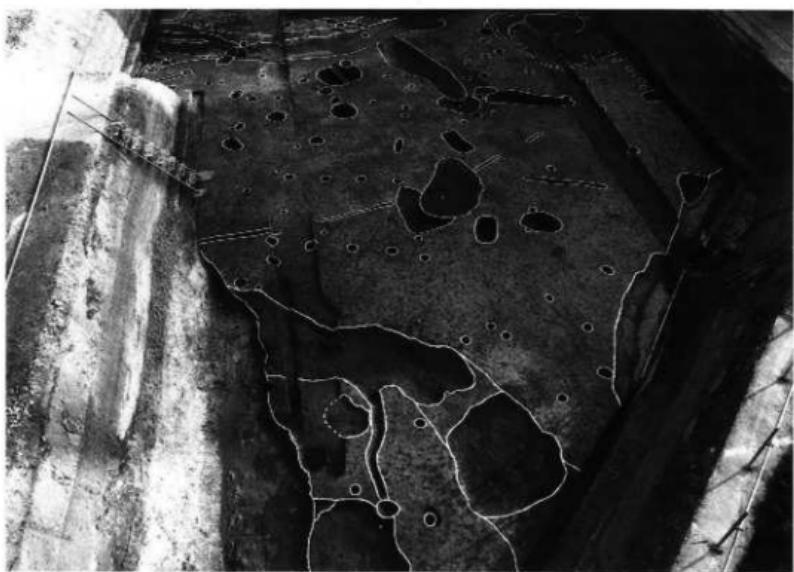
SP-47 遺物出土状况



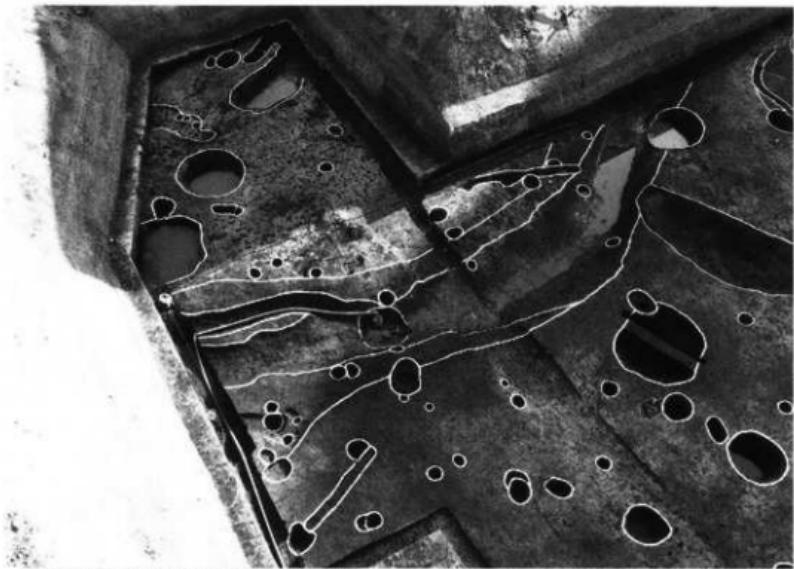
下層遺構垂直全景



下層遺構鳥瞰全景（南から）



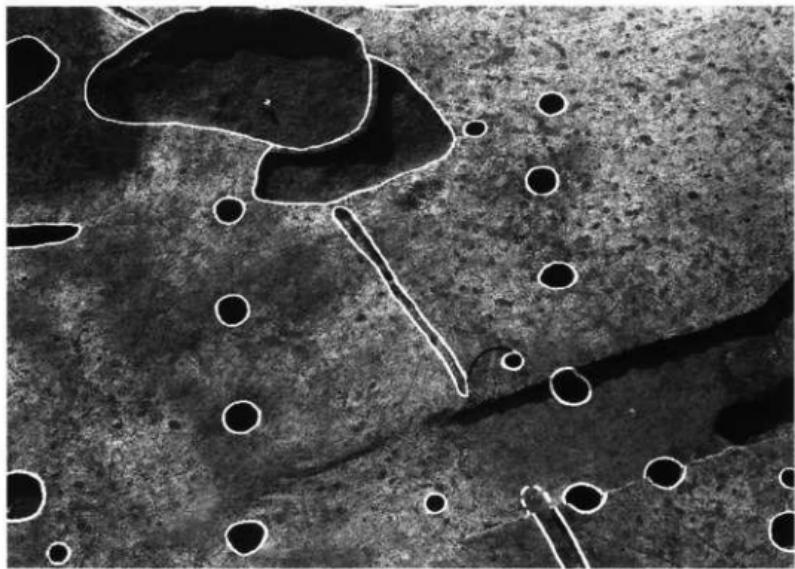
南調査区下層造構全景（西から）



南調査区下層造構北東地区全景（西から）



南調査区下層構造中央地区全量（北から）



SB-101全景（北から）



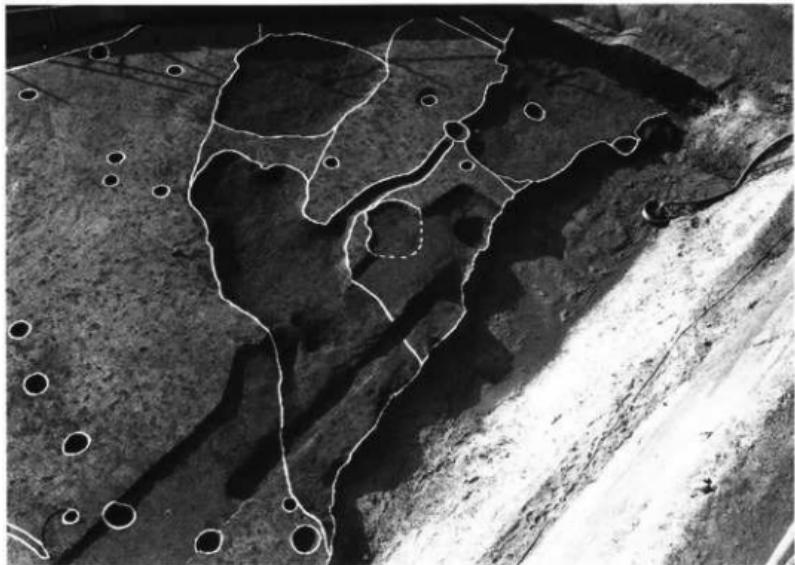
SD-101全景（北から）



SD-101断面



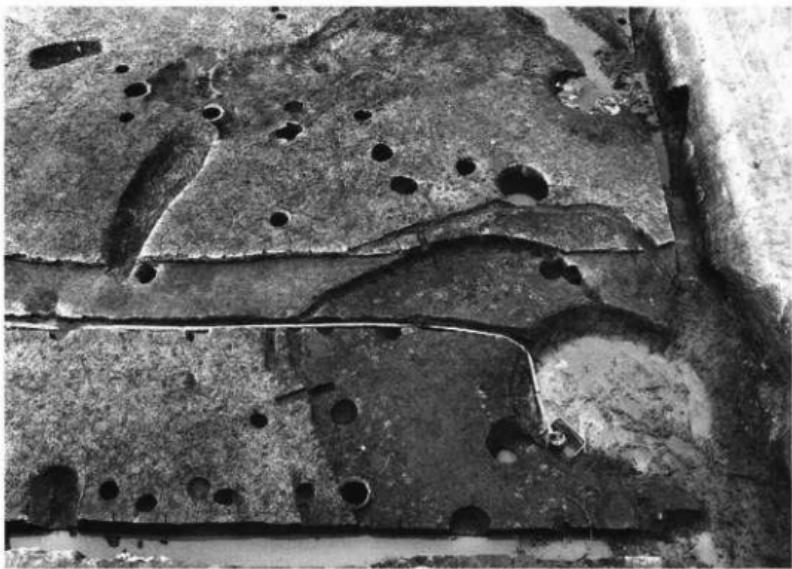
SA-101近景（東から）



SA-101、SK-128・129、SD-102・103全景



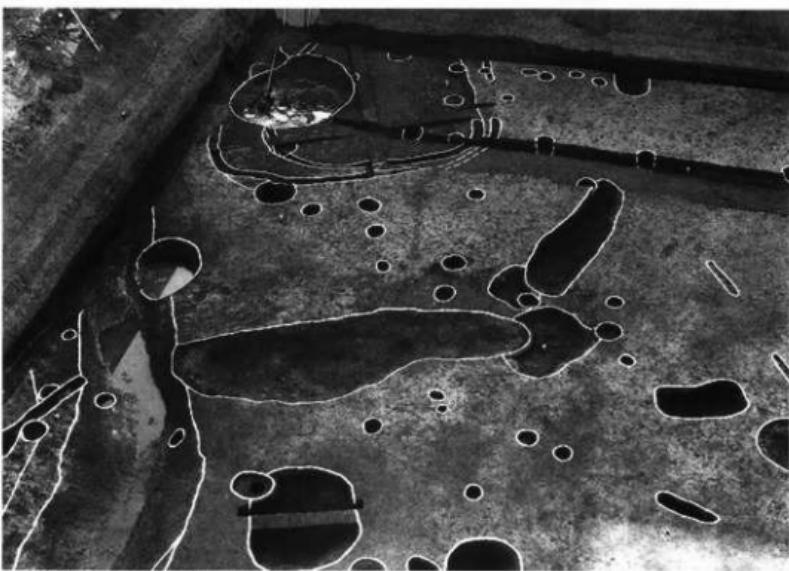
SA-102とSK-130検出状況



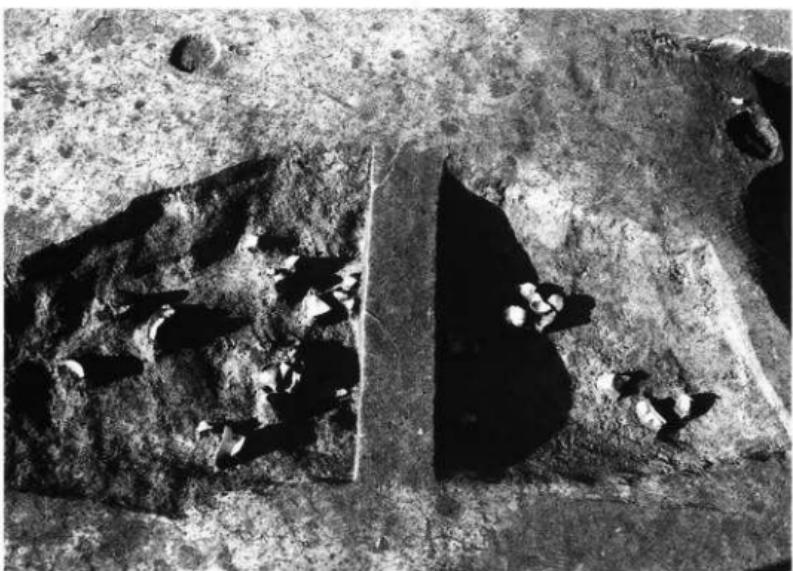
SA-102、SK-130、SK-126・127など発掘後全景（南から）



SA-102、SK-130とその周囲（南東から）



SA-102とその周囲（北から）



SK-126全景



SK-126遺物出土狀況



SK-127完掘状况



SK-101上層遺物出土狀況



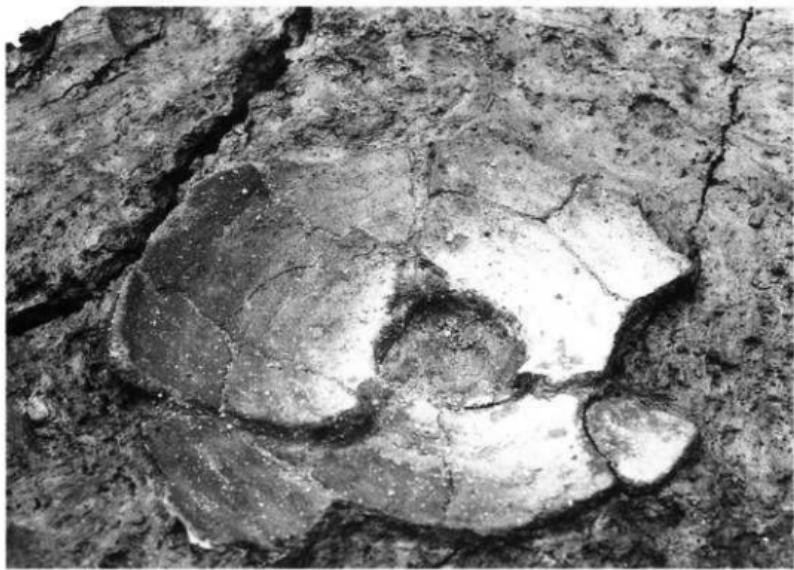
SK-130半掘断面



SK-130完掘状況



SK-130中間風化面の遺物出土状況



SK-130同上遺物(261)出土状況(部分)



SK-131全景および上層遺物出土状況



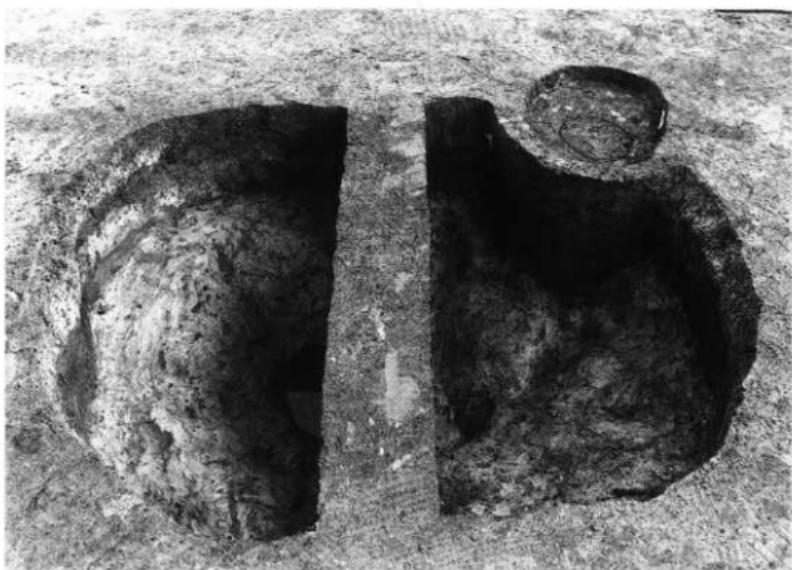
SK-131断面



SK-131遺物出土狀況



SK-131遺物出土狀況（部分）



SK-107平面



SK-107半縱斷面



SK-119遺物出土状況



SK-109



SK-132半掘断面



北調査区（トレンチ）下層遺構検出状況（東から）



21



23



31



1



40



14



291



262



290



250

SB-1・3、SK-1・119・130・131、SP-8、SD-6、第8層出土遺物



249



189



302



242



253



212

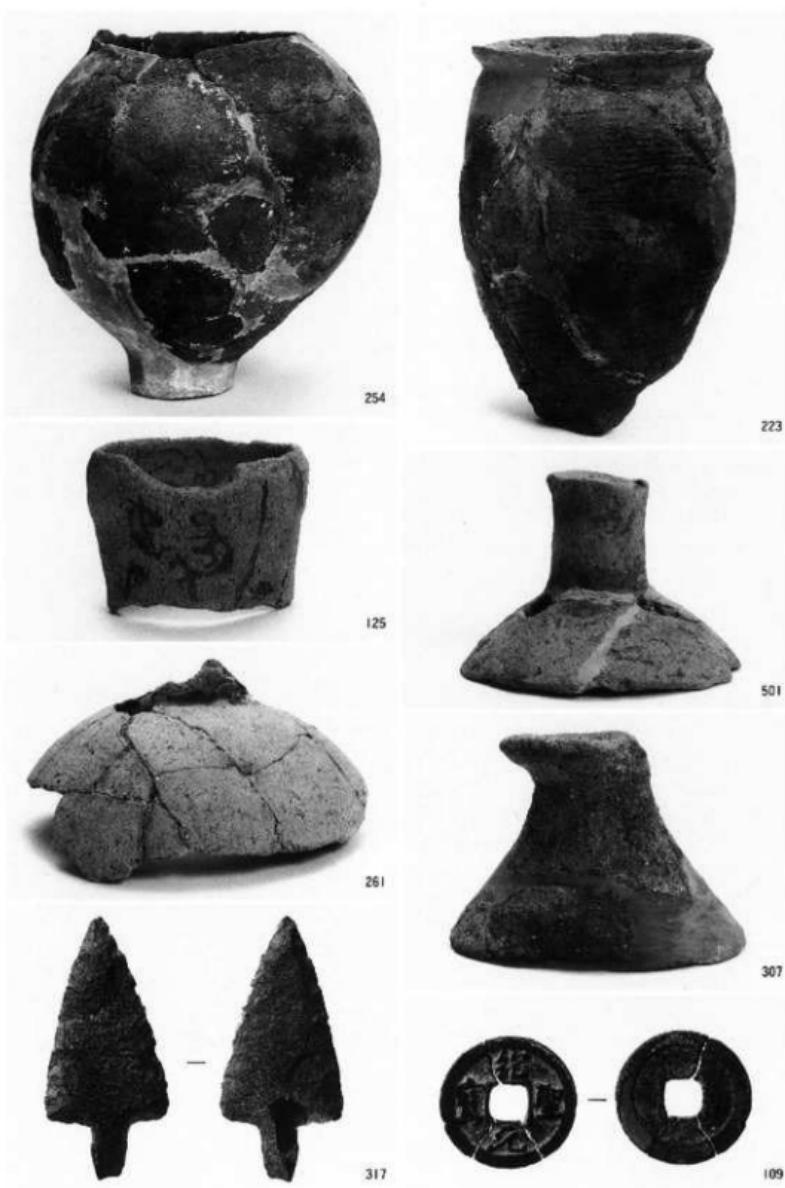


135



240

SA-101, SK-119・128・131, SD-101, 第8層出土遺物



SK-119・126・130、SD-101、第4・8(501)層出土遺物